

宦官謀去胤。時朱全忠有挾天子令諸侯之意胤以書召之。全忠舉兵來。宦者韓全誨等劫上如鳳翔。全忠圍之。李茂貞遂殺全誨等。奉上還長安。全忠以兵驅宦官盡殺之。其出使外方者詔所在誅之。存黃衣幼弱三十人。備酒掃。宦官自文宗已後廢置在其掌握。至有定策國老。門生天子之號。及是大被誅殺。全忠由東平王。進爵梁王。還汴。

宦官、胤を去らんと謀る。時に朱全忠、天子を挾みて諸侯に令するの意有り。胤、書を以て之を召す。全忠、兵を擧げて來る。宦者韓全誨等、上を劫して鳳翔に如かしむ。全忠之を圍む。李茂貞、遂に全誨等を殺し、上を奉じて長安に還る。全忠、兵を以て宦官を驅りて盡く之を殺し、其出で、外方に使せる者は、所在に詔して之を誅し、黃衣の幼弱なるもの三十人を存して、酒掃に備ふ。宦官、文宗より已後、廢置其掌握に在り。定策國老・門生天子の號有るに至る。是に及びて大に誅殺せらる。全忠、東平王より爵を梁王に進め、汴に還る。

●宦官の幼きもの、黃衣は宦官の衣なり ●君を廢するも願くも其手中にあり ●定策國老とは天子策立の功勞有る國家の老臣の義、門生天子は天子を飼ふこと試験官の貢職人に於けるが如しとの意

○全忠、威天下に震ひ、篡奪の志有り。胤、懼れて是が爲に備ふ。全忠、表して

下有篡奪之志。胤懼爲是備。全忠表請除胤。密使其黨殺之。遂請上遷都東京。促百官東行。驅徙士民。上謂侍臣曰。鄙語云。紇干山頭凍殺雀。何不飛去。生處樂。朕今漂泊不知竟落何所。泣下沾巾。上至洛陽。李茂貞等移檄。以興復爲辭。全忠將三四討。以三上有英氣。恐生變。遣三人入洛弒之。

胤を除かんと請ひ、密かに其黨をして之を殺さしむ。遂に上に請ひて都を東京に遷し、百官を促して東に行かしめ、士民を驅り徙す。上、侍臣に謂ひて曰く、鄙語に云ふ、紇干山頭、雀を凍殺す。何ぞ飛び去りて生處に樂まざると。朕今漂泊して竟に何の所に落つるを知らずと。泣下りて巾を沾す。上、洛陽に至る。李茂貞等檄を移して、興復を以て辭と爲す。全忠、將に西討せんとす。上が英氣有るを以て、變を生ぜんことを恐れ、人をして洛に入りて之を弒せしむ。

●紇干山は蓋し紇干山の稱也、雲中都にありて四時雪を敷く故に此語あり ●王室の回復を口實とす

○上、位に即きてより、賢豪を夢想せざりしに非ず。卒に之を用ひざりき。嘗て朝士鄭檠といふもの有り、檠、諧を好み、多く歌語の詩を爲りて時事を嘲る。上、其蘊む所有るを意ひ、手から班簿を注して以て相と爲す。堂吏走り告ぐれども、

好二恢諧。多爲二歌語。詩一朝二時事。上意二其有レ所。蘊。手注二班簿。一以爲レ相。堂吏走告不レ信。已而賀客至。紫攝首曰。歌後鄭五作二宰相。時事可レ知矣。上在位十七年。改元者七。曰龍紀。大順。景福。乾寧。光化。天復。天祐。子立。是爲二哀皇帝。

信ぜず。已にして賀客至る。紫、首を掻きて曰く、歌後の鄭五、宰相と作る。時事知る可しと○上、在位十七年。改元する者七。龍紀・大順・景福・乾寧・光化・天復・天祐と曰ふ。子立つ。是を哀皇帝と爲す。

● ちどけ ● 詩の終の語句を缺き、人をしてその含意を想像せしむるもの ● 朝士の班列を記録せる帳簿にかき入る ● 鄭氏の五番目、自稱也

哀皇帝

哀皇帝。初名祚。昭宗有二廢太子裕。已壯。全忠惡之。祚以幼得立。更二名視。全忠殺二

哀皇帝、初めの名は祚。昭宗に廢太子裕有り。已に壯なり。全忠之を惡みしかば、祚、幼を以て立つことを得たり。名を視と更む。全忠、裕等九人を殺す。皆昭宗の子なり。全忠、相國と爲り、九錫を加ふ。帝、位に在りて、仍ほ天祐と稱す。四年ならずして梁に禪る。尋ぎて弒せらる。唐、高祖より是に至るまで

二十世、凡べて二百九十年なり。

● やはり前代の天祐の年號を稱へたり

裕等九人。皆昭宗子。全忠爲二相國。加二九錫。帝在位仍稱二天祐。不二四年。禪二于梁。尋被弒。唐自二高祖。至是二十世。凡二百九十年。

卷之六

五代

梁

太祖皇帝

梁太祖皇帝。初名溫。姓朱氏。碭山人。朱五經之子也。少無賴。從黃巢爲盜。降唐。賜名全忠。初鎮汴。攻併徐州。兗州。鄆州。

梁の太祖皇帝、初めの名は温、姓は朱氏。碭山の人、朱五經の子也。少きとき無賴にして黄巢に従ひて盗を爲す。唐に降り、名を全忠と賜ふ。初め汴に鎮し、徐州・兗州・鄆州を攻め併せ、河北・河東の諸郡を攻め、屢々李克用と兵を交ふ。尋ぎて河中の晉・絳を取り、兵を華・岐に用ひ、東のかた青州を降し、南のかた荆・襄を取り、諸鎮の間を横行し、唐の都を洛に劫し遷し、遂に唐を篡ひ、名を晃と更む。其兄全昱を封じて王と爲す。全昱嘗て之を罵りて曰く、朱三、汝天子

攻河北河東諸郡。屢與李克用交兵。尋取河中晉絳。用兵華岐。東降青州。南取荆襄。横行諸鎮間。劫遷唐都於洛。遂篡唐。更名晃。封其兄全昱爲王。全昱嘗罵之曰。朱三。汝作天子邪。汝從黃巢作賊。天子用汝爲四鎮節度使。何負於汝。奈何滅唐家。三百年社稷。自爲帝王。行當族滅一矣。是時李克用王晉。李茂貞王岐。楊行密爲吳王。王淮南。行密已卒。子温代之。王建王蜀。錢僖王兩浙。王潮據閩。已卒。弟審知代之。馬殷據湖南。劉隱據廣。皆自唐末以來。割據諸州。

と作るか。汝、黄巢に従ひて賊を作す。天子、汝を用ひて四鎮の節度使と爲す、何ぞ汝に負かん。奈何ぞ唐家三百年の社稷を滅して、自ら帝王と爲れる。行くゆく當に族滅せらるべしと。是の時李克用、晉に王たり。李茂貞、岐に王たり。楊行密、吳王と爲りて淮南に王たり。行密已に卒す。子渥之に代る。王建、蜀に王たり。錢僖、兩浙に王たり。王潮、閩に據り、已に卒す。弟審知之に代る。馬殷、湖南に據り、劉隱、廣に據る。皆唐の末より以來、諸州に割據す。

● 朱全忠は兄弟の行第三番目也

○ 梁主、馬殷を以て楚王と爲す。蜀主王建、帝と稱す。○ 晉王李克用卒す。初め克用養子有り。存孝と曰ふ。最も驍勇にして功有り。養子存信疾みて之を請す。

王李克用卒。初克用有養子。曰存孝。最駿勇有功。裴子存信疾而謂之。存信懼。而叛。克用討獲囚歸。惜其才。意臨刑。必有爲之請者。諸將疾其能。竟無一人言。遂死。又有薛阿檀。亦勇。密與存孝通。恐事泄。自殺。自是克用兵勢浸弱。唐末數爲汴人所攻。失數州。汴

存孝、禍を罹れて叛す。克用討ち獲へて囚して歸る。其才を惜み、意へらく、刑に臨まば、必ず之が爲に請ふ者有らんと。諸將其能を疾み、竟に一人の言ふもの無し。遂に死す。又薛阿檀といふもの有り。亦勇なり。密に存孝と通ず。事の泄れんことを恐れて自殺す。是より克用の兵勢浸く弱し。唐の末、數々汴人の爲に攻められて、數州を失ふ。汴の兵、直に晉陽の城下に抵る。克用、城に登り、備禦して、寢食に違あらず。後汴の兵再び晉陽を圍み、夜を以て還る。克用幾んど走らんと欲す。汴の兵の去るに會ひて止む。克用、汴人と争ふこと能はざる者累年、惛惛として以て卒するに至る。子存勗立つ。時に梁の兵晉を侵して潞州を圍む。晉の李嗣昭、城を閉ぢて固く守り、年を踰ゆ。梁、夾寨を築きて之を守る。存勗、諸將と謀りて曰く、朱溫の憚る所の者は先王のみ。吾が新に立てるを聞かば、以て童子と爲して必ず驕怠の心有らん。若し精兵を簡び、道を倍して之に趨き、其不意に出でば、威を取り霸を定めんこと此一舉に在らん。失ふ可

兵直抵晉陽城下。克用登城。備禦不遺。寢食。後汴兵再圍晉陽。以疫還。克用幾欲走。會汴兵去而止。克用不能與汴人争上者累年。他他以至子卒。子存勗立。時梁兵侵晉。圍潞州。晉李嗣昭閉城固守。踰年。梁築夾寨守之。存勗與諸將謀曰。朱溫所憚者先王耳。聞吾新立。以爲童子。必有驕怠之心。若簡精兵。倍道趨之。出其不意。取威定霸。在此一舉。不可失也。帥兵發晉陽。伏三垂岡下。且乘大霧。直抵夾寨。填壘鼓譟而入。梁兵大潰。遂解潞圍。

からずと。兵を帥りて晉陽を發し、三垂岡の下に伏し、旦に大霧に乗じて直に夾寨に抵り、壘を填め鼓譟して入る。梁の兵大に潰え、遂に潞の圍を解く。

● 二日の行程を一日に進むをいふ ● せめ太鼓を打ちならしむるをいふ ● 城をとりまきて設けたるといふ ●

淮南將張顥。徐溫弒楊渥。溫復殺顥。將吏推立楊隆演。徐溫自領昇州。而以養子徐知誥往

○淮南の將張顥・徐溫、楊渥を弒す。溫、復た顥を殺す。將吏推して楊隆演を立て。徐溫自ら昇州を領し、養子徐知誥を以て往きて之を治めしむ。○梁王審知を以て閩王と爲す。○梁、劉守光を以て燕王と爲す。守光は盧龍の節度使仁恭の子也。是より先其父を囚へて自ら軍府を領す。○梁の夏州亂る。節度李彝昌

治之。梁以二王
審知二爲二閩王。
梁以二劉守光
爲二燕王。守光
者盧龍節度
使仁恭之子也。先是因其父。而自領二軍府。梁夏州亂。殺二節度李彝昌。以其族父仁福二代之。
夏州李氏本姓拓跋。上世自唐賜姓。領二鎮久矣。

● 父のまたいとこ

廣州劉隱卒。
弟巖代之。劉
守光稱二燕帝。
鎮州王鎔。定
州王處直。推二
晉王爲二盟主。
梁攻二鎮州。襲二
取諸郡。晉王
伐其兵於柏
鄉。大破之。晉
帥二鎮。伐燕。

○廣州の劉隱卒す。弟巖之に代る。○劉守光、燕帝と稱す。○鎮州の王鎔、定州の
王處直、晉王を推して盟主と爲す。梁、鎮州を攻め、諸郡を襲ひ取る。晉王、其兵
を柏郷に伐ちて大に之を破る。晉、二鎮を帥りて燕を伐つ。梁、主之を救ひ、大敗
して走せ歸る。是より先、梁、主已に疾有り。是に至りて慙憤して曰く、我天下を經
營すること三十年、意はざりき、太原の遺孽、更に昌熾なること此の如くならんと
は。吾其志を觀るに小ならず。我死せば、諸兒は彼の敵に非ず。吾、葬地無か
らんと。疾愈々劇しく、且躁怒を加ふ。假子友文の妻を愛し、將に友文を立て、

梁主教之。大
敗走歸。先是
梁主已有疾。
至是慙憤曰。
我經二營天下
三十年。不意
太原遺孽。更
昌熾如此。吾
觀其志。不小。
我死諸兒。非
彼敵也。吾無
葬地一矣。疾
愈劇。且加二
躁怒。愛二假
子友文之妻。將
立二友文爲二
嗣。遂爲二其
子友珪所弒。在
位六年。改元
者二。曰二開
平。乾化初。以
二汴州一
爲二東都。開
封府。洛陽爲
二西都。遷都
洛陽者凡四年。
友珪自立。尋
伏二誅。均王
立。

嗣と爲さんとす。遂に其子友珪の爲に弒せらる。在位六年、改元する者二。開平。
乾化と曰ふ。初め汴州を以て東都開封府と爲し、洛陽を西都と爲す。遷りて洛陽
に都する者凡そ四年。友珪自立し、尋ぎて誅に伏す。均王立つ。

● 晉の子孫、遺孽は妾腹と遺子にて晉王存嗣を指す ● さかんなり ● 短氣にてわやみに怒る ● 養子

均王。名友貞。初め東都の指揮使と爲る。友珪篡弒す。兵を起し之を誅し
て、位に汴に即き、名を珪と更む。晉王幽州に入る。燕の劉仁恭及び守光を
執へ、歸りて之を斬る。○梁、荆南の節度使高季昌に爵を賜ひて、王と爲す。

均王

均王。名友貞。
初爲二東都指
揮使。友珪篡
弒。起兵誅之。
而即二位於汴。
更二名珪。晉王

均王、名は友貞。初め東都の指揮使と爲る。友珪篡弒す。兵を起し之を誅し
て、位に汴に即き、名を珪と更む。晉王幽州に入る。燕の劉仁恭及び守光を
執へ、歸りて之を斬る。○梁、荆南の節度使高季昌に爵を賜ひて、王と爲す。

● 帝を弒して其の位をうばふ

入幽州。執燕劉仁恭及守光。歸斬之。梁賜荆南節度使高季昌爵爲王。

契丹阿保機稱帝。古東胡種也。其國先在橫山南。本鮮卑舊地。元魏時自號契丹。初太賀氏有八子。號八部。太人推一人爲主。三歲一代。唐開元中。有邵固者。統衆。詔許襲王。至是諸部以耶律幹里少子阿保機爲主。并奚渤海諸國。始建元。不復受代。國人謂之天皇王。

廣州劉巖稱越王。已而稱

○廣州の劉巖、越王と稱す。已にして帝と稱し、國號を改めて漢と曰ふ。後又

帝。改國號曰漢。後又更名。吳徐溫徙治昇州。以徐知誥入輔吳政。蜀主王建殂。子宗衍立。

更めて漢と名づく。○吳の徐溫、徙りて昇州を治む。徐知誥を以て入りて吳の政を輔けしむ。○蜀主王建、殂す。子宗衍立つ。○吳王楊隆演卒す。弟溥普立つ。○梁、錢鏐を以て吳越國王と爲す。

吳王楊隆演卒。弟溥普立。梁以錢鏐爲吳越國王。

晉與梁連歲交兵。梁魏州降于晉。晉王入魏。拔魏州。澧州。梁劉鄩襲晉陽。不克而還。攻鎮定。營。晉師敗之。鄩攻魏州。晉王又敗之。梁

○晉、梁と連歲兵を交ふ。梁の魏州、晉に降る。晉王、魏に入りて德州・澧州を拔く。梁の劉鄩、晉陽を襲ひ、克たずして還る。鎮定の營を攻む。晉の師之を敗る。鄩、魏州を攻め、晉王又之を敗る。梁又兵を遣して晉陽を襲ふ。晉人擊ちて之を卻く。晉衛・磁・洛・相・邢・滄・貝の州に克ち、濮鄆を掠む。梁人、河を決して以て晉を限る。晉王、攻めて其四寨を拔く。已にして大舉して梁を伐ち、胡柳に戦ふ。晉の周德威敗れ死す。晉王、兵を收めて復た戦ひ、大に梁の軍を破る。晉、

又遣兵襲晉陽。晉人擊卻之。晉克衛磁。潘相那滄貝州。掠河以限。晉人決河以限。晉王攻拔其四寨。已而大舉伐梁。戰于胡柳。晉周德威敗死。晉王收兵復戰。大破梁軍。晉築德勝南北兩城。梁攻之不克。梁招討王瓚爲晉所敗。梁河中降。晉鎮州將弒趙王王鎔。晉

德勝南北兩城を築く。梁之を攻めて克たす。梁の招討王瓚、晉の爲に敗る。梁の河中、晉に降る。鎮州の將、趙王王鎔を弒す。晉王、討ちて之を平ぐ。是より先、吳、蜀、屢々書もて晉王に勸めて帝と稱せしめんとす。晉王自ら謂ふ、先王遺言有り、當に務めて唐の社稷を復すべしと。既にして傳國の寶を魏州に得たり。將佐皆賀し、勸進して已ます。遂に帝位に魏に即き、國を唐と號す。李嗣源を遣はして梁の鄆州を襲ひ取らしむ。梁、王彦章を以て招討と爲す。唐主、德勝の守者を戒めて曰く、王鐵槍、勇決なり。之を謹めよと。彦章果して南城を抜き、進みて諸寨を抜き、楊劉に至りて力攻す。克たずして退く。梁、彦章を遣はして鄆を攻めしむ。唐主之を救ふ。梁、敗れ彦章死す。唐、嗣源を以て前鋒と爲し、五日、大梁に入る。梁主、猶ほ諸兄弟の危きに乘じて亂を謀らんことを慮り、盡く之を殺し、尋ぎて其下に命じて己を殺さしむ。在位十一年。改元する者一。貞明・龍德と曰ふ。梁、太祖の帝と稱せしより、是に至りて二世、一十七年

にして亡ぶ。

● くひ止む ● 帝と稱せんをすむ ● 彦章常に二本の鐵槍を用ひて戰ふ、故に時人斯く呼べり

王討平之。先是吳蜀屢書勸晉王自謂先王有遺言。當務復唐社稷。既而得傳國寶於魏州。將佐皆賀。勸進不已。遂即帝位於魏。國號唐。遣李嗣源襲取梁鄆州。梁以王彦章爲招討。唐主戒德勝守者曰。王鐵槍勇決。謹之。彦章果拔南城。進拔諸寨。至楊劉。力攻不克。而退。梁遣彦章攻鄆。唐主救之。梁敗。彦章死。唐以嗣源爲前鋒。五日入大梁。梁主猶慮諸兄弟乘危謀亂。盡殺之。尋命其下殺己。在位十一年。改元者二。曰貞明。龍德。梁自太祖稱帝。至是二世。一十七年而亡。

唐

莊宗皇帝

唐の莊宗皇帝、名は存勗。沙陀の人也。本姓は朱邪。先世功を立て、姓を李と賜ふ。父克用、勇略有り。一目微眇、獨眼龍と號す。唐の爲めに黃巢を平けて大功を立て、晉に王たり。朱氏と仇を爲し、暮年頗る爲に覺められ、憂色に形はる。存勗、幼なりしとき、進言して曰く、朱氏、凶を窮め暴を極む。人怨み

唐莊宗皇帝。名存勗。沙陀人也。本姓朱邪。先世立功。賜姓李。父克用有勇略。一

目微眇。號三獨
 眼龍。爲唐平
 黃巢。立大功。
 王于晉。與朱
 氏爲仇。暮年
 頗爲所覺。憂
 形於色。存昂
 幼進言曰。朱
 氏窮凶極暴。
 人怨神怒。極
 將斃矣。吾家
 世襲忠貞。大
 人當下遺養時
 晦以待其衰。
 奈何輕爲沮
 喪。使羣下失
 望乎。克用說。
 臨終立爲嗣。
 謂其下曰。此
 子志氣遠大。

神怒る。極めて將に斃れんとす。吾が家世々忠貞を襲ぬ。大人當に遺養時晦して、以て其衰を待つべし。奈何ぞ輕しく沮喪を爲し、羣下をして望を失はしめんやと。克用説ぶ。終るに臨み、立て、嗣と爲す。其下に謂ひて曰く、此子志氣遠大なり。必ず能く吾が事を成さんと。年十七、晉王の位を嗣ぐ。即ち兵を擧げて梁を破り、潞の圍を解く。是より連に勝つ。梁祖歎じて曰く、子を生まば當に李亞子の如くなるべし。吾が兒は豚犬のみと。存昂、東のかた幽州を併せ、北のかた契丹を卻け、南のかた梁と河を夾みて百戰す。是より先晉陽の監軍故の唐の宦者張承業、晉王の爲に財賦を拮拾し、兵馬を召補す。攻戰連年、接應して乏しからざりしは、皆承業の力なり。承業の意は、唐の宗社を復するに在り。王の將に帝と稱せんとするを聞きて力諫し、止む可からざるを知るや、慟哭して曰く、諸侯の血戰するは本と唐家の爲なり。今王自ら之を取り、老奴を誤まると。惛惛として疾を成して卒す。王、位に即き、晉を改めて唐と爲し、唐

必能成吾事。
 年十七。嗣晉
 王位。即擧兵
 破梁。解潞圍。
 自是連勝。梁
 祖歎曰。生子
 當如李亞子。
 吾兒豚犬耳。
 存昂東併幽
 州。北卻契丹。南與梁夾河百戰。先是晉陽監軍故唐宦者張承業。爲晉王拮拾財賦。召補
 兵馬。攻戰連年。接應不乏。皆承業力。承業意在復唐宗社。聞王將稱帝。力諫。知不可止。慟
 哭曰。諸侯血戰。本爲唐家。今王自取之。誤老奴矣。惛惛成疾而卒。王即位。改晉爲唐。奉唐
 祀。入汴。滅梁。都大梁。已而遷離陽。侍中郭崇韜有謀略。佐唐主成業。至是權兼內外。謀猷
 規益。竭忠無隱。薦引人物。他相受成而已。

の祀を奉ず。汴に入り梁を滅し、大梁に都し、已にして離陽に遷る。侍中郭崇韜謀略有り。唐主を佐けて業を成さしむ。是に至りて權内外を兼ね、謀猷規益、忠を竭して隱すこと無く、人物を薦引す。他の相は成を受くるのみ。

● 少し見えず ● 晩年 ● 時勢に順ひ、退いて徳を養ひ、その才をかかず ● 力を蓄して ● 存昂の功
 名 ● をさめとり立つ ● 召集して補充す ● 輜重の接應、士卒の餉糧 ● 宗廟社稷 ● はかりごと
 をめぐらし、君の過をたゞし、君の行を益す ● 出来上りたる事柄

○ 荆南の高季興、入朝す。季康は季昌の名を改めたる也。唐、以て南平王と爲す
 ○ 蜀主王衍、盤遊淫酒なり。國亂れ盜起る。唐、皇子繼岌と郭崇韜とを遣はして之を伐たしめ、遂に蜀を滅す。衍、降る。唐、其族を赤す。繼岌、讒を信じ、

崇韜を殺して還る。

● あそびまはりて、酒色に耽る ● はるばす

行盤遊淫濁。國亂盜起。唐遣皇子繼岌與郭崇韜伐之。遂滅蜀。帝降唐赤其族。繼岌信讒殺崇韜而還。

唐以孟知祥爲西川節度使。唐帝自克梁後。凌驕首以伶人爲刺史。帝幼習音樂。或時自傳粉墨。與優人共戲。優名謂之李天下。嘗自呼曰李天下。優人敬新磨。遽前批其頰。帝

○唐、孟知祥を以て西川の節度使と爲す。○唐帝、梁に克ちてより後凌驕る。首めに伶人を以て刺史と爲す。帝、幼より音樂に習ひ、或は時に自ら粉墨を傳けて、優人と共に戲る。優名を李天下と謂ふ。嘗て自ら呼びて、李天下、李天下といふ。優人敬新磨、遽に前みて其頰を批つ。帝色を失ふ。新磨徐に曰く、天下を理むるは只一人のみ。尚ほ誰を呼ぶかと。帝悦ぶ。諸伶、宮掖に出入して搢紳を侮弄す。羣臣憤り疾めども、敢て氣を出すもの無く、亦反りて相附託して、貨を納れ展轉して以て恩澤を干むるもの有り。政を蠹し人を害し、恣に讒慝を爲す。帝、宿將を疎んじ忌み、軍士を恤まず、數々出で遊獵し、民の田

失色。新磨徐曰。理天下。只一人。尙誰呼邪。帝悅。諸伶出入宮掖。侮弄搢紳。羣臣憤疾。莫敢出氣。亦有反相附託。納貨展轉。以干恩澤。爲讒害人。恣忌宿將。不恤軍士。數出遊獵。踐踐民田。上下咨怨。魏博將戊瓦橋。代歸。復遣留屯貝州。遂作亂。李趙在禮。

を蹂躪し、上下咨き怨む。魏博の將、瓦橋を戍る。代り歸るや、復た留りて貝州に屯せしむ。遂に亂を作し、趙在禮を奉じて入りて鄴郡に據る。唐將李嗣源を遣はして之を討つ。城下に至れば、軍士大に謀きて曰く、將士、主上に從ふこと十年、百戰して以て天下を得たり。今貝州の戊卒歸らんことを思ふ。主上赦さず。從馬直の數卒喧競すれば、遽に盡く其族を誅せんと欲す。我輩初めより叛心無し。但だ死を畏るゝのみ。今城中と勢を合せんと欲すと。白刃を抜き、嗣源を擁して城に入る。城中外兵を受けず、之を逆へ撃つ。皆潰ゆ。嗣源、詭辭して出づることを得たり。將に兵を召して亂者を攻めんとす。安重誨曰く、公、元帥と爲りて、不幸にして凶人に劫かざる。若かず、星行して闕に詣り、天子に見えんには、庶はくは自ら明かにす可しと。嗣源、乃ち南のかた相州に趨る。譖者、嗣源已に叛すと奏す。嗣源、章を上りて自ら理す。過められて通ずることを得ず。始めて疑ひ懼る。石敬瑭曰く、安んぞ上將叛卒と

入據鄴都。唐遣將李嗣源討之。至城下。軍士大譟曰。將士從主上。十年百戰。以得天下。今貝州戍卒思歸。主上不赦。從馬直數卒喧競。連欲盡誅其族。我輩初無叛心。但畏死。今欲與城中一合勢。拔白刃。擁嗣源入城。城中不受。外兵逆擊之。皆潰。嗣源能辭得。出將三召。

城に入りて佗日恙無きを保つことを得る者有らんや。大梁は天下の都會なり。願はくは、先づ往きて之を取れ。始めて自ら全くす可し。康義誠曰く、主上無道にして、軍民怨望す。公、衆に從はば、則ち生きん。節を守らば、必ず死せん。嗣源、乃ち敬塘を以て前鋒と爲し、李從珂を殿と爲し、兵を引き大梁に入る。唐主、關東に如き、嗣源已に大梁に據り、諸軍離叛すと聞き、神色沮喪し、歎じて曰く、吾濟らじと。即ち命じて師を旋す。從馬直郭從謙、兵を帥めて帝を汜水に攻む。唐主、流矢に中りて殂す。帝と稱すること僅に三歳にして、弒に遇ふ。改元する者一。同光と曰ふ。伶人、樂器を斂め、屍を覆ひて之を焚く。嗣源之を聞きて痛哭す。乃ち洛陽に入る。百官、廢を上りて勸め進む。許さず。又三たび嗣源に請ひて國を監せしむ。乃ち之を許す。繼岌、蜀より歸り、途にて内難を聞き、長安に至りて自殺す。監國立つ。是を明宗皇帝と爲す。

● 樂人 ● 白粉をつけ眉を飾す ● 匿名 ● 李天下の李と理と吾通なるを以て顔を爲したる也 ● それからそれと手裏を求めて天子の風運を得んとす ● 老功の將軍 ● 莊宗軍の驍勇なる者を選びて親軍とし、

分ちて四指揮を置き、從馬直と號す ● さわぎきも、從馬直の軍士王通等五人軍使を殺して亂を爲せるをいふ ● いつはり説きて ● 星を置きて馳せ行き ● 罪なきをい明す ● 書面を上りて天子たらんことをす、わ

兵攻亂者。安重誨曰。公爲元帥。不幸爲囚人。所効不若。星行詣關。見天子。庶可自明。嗣源乃南趨。相州。譚者奏。嗣源已叛。嗣源上章自理。過不得通。始疑懼。石敬瑭曰。安有上將與二叛卒入城。而佗日得保無恙者乎。大梁天下都會。願先往取之。始可自全。康義誠曰。主上無道。軍民怨望。公從衆則生。守節必死。嗣源乃以敬塘爲前鋒。李從珂爲殿。引兵入大梁。唐主如關東。嗣源已據大梁。諸軍離叛。神色沮喪。歎曰。吾不濟矣。即命旋師。從馬直郭從謙帥兵攻帝於汜水。唐主中流矢而殂。稱帝僅三歲。而遇弒。攻元者一。曰同光。伶人斂樂器。覆屍面焚之。嗣源聞之。痛哭。乃入洛陽。百官上廢勸進。不許。又三請嗣源監國。乃許之。繼岌自蜀歸。途聞內難。至長安。自殺。監國立。是爲明宗皇帝。

明宗皇帝

明宗皇帝は、本と胡人遷估烈也。晉王克用の養子と爲り、嗣源と名づく。莊宗の梁を滅すや、嗣源功最も高し。中書令・蕃漢馬歩の總管と爲り、命を受けて鄴を討ち、叛卒の爲に推されて、鄴より汴に趨き、洛に入り、遂に位に即く。

明宗皇帝。本胡人遷估烈也。爲晉王克用養子。名嗣源。莊宗滅梁。

嗣源功最高。爲中書令。著漢馬步總管。

名を賣と更む。

● 夷狄及び中國の騎兵歩兵の總管

受命討鄴。爲叛卒。所推。自鄴趨汴。入洛。遂即位。更名夏。

契丹阿保機卒。子德光立。閩王王審知卒。子延翰立。驕淫殘暴。其下弑之。而立其弟延鈞。後稱帝。更名璘。吳王楊溥稱帝。南平王高季興卒。子從壽立。楚王馬殷卒。子希聲立。後希聲卒。希範立。吳越王錢鏐卒。子元瓘立。夏州李仁福卒。子彝超嗣。四川孟知祥併東川。以知祥爲蜀王。

○契丹阿保機卒す。子德光立つ。○閩王王審知卒す。子延翰立つ。驕淫殘暴なり。其下之を弑して、其弟延鈞と立つ。後帝と稱し、名を璘と更む。○吳王楊溥、帝と稱す。○南平王高季興卒す。子從壽立つ。○楚王馬殷卒す。子希聲立つ。後希聲卒す。希範立つ。○吳越王錢鏐卒す。子元瓘立つ。○夏州の李仁福卒す。子彝超嗣ぐ。○四川の孟知祥、東川を併す。知祥を以て蜀王と爲す。

● もごりみだりにして下をしへた

唐秦王從榮驕狠。自知時論不與。常懼不得爲嗣。唐主慶疾。連半牙兵千人。至端門下。將入。禁衛討之。從榮兵潰。走歸府。皇城使斬之。唐主悲駭。疾劇。遂殂。唐主性不猜忌。與物無競。登極之年。已踰六十。每夕於宮中焚香祝天。曰。某胡人。因亂爲衆所推。願天早生

○唐の秦王從榮、驕狠なり。自ら時論の與せざることを知り、常に嗣と爲るを得ざらんことを懼る。唐主疾に寢ぬ。遽に牙兵千人を率ゐて、端門の下に至り、將に入らんとす。禁衛之を討つ。從榮の兵潰ゆ。走りて府に歸る。皇城使之を斬る。唐主悲み駭きて疾劇し。遂に殂す。唐主、性猜忌せず、物と競ふこと無し。登極の年、已に六十を踰ゆ。毎夕宮中に於て、香を焚き、天に祝して曰く、某は胡人なり、亂に因りて衆の爲に推さる。願はくは天早く聖人を生じて生民の主と爲せと。在位八年。改元する者一。天成。長興と曰ふ。内に聲色無く、外に遊敗無し。宦官に任せず、内藏庫を廢し、庶吏を賞し、賊蠹を治む。書を知らずと雖も、行ふ所暗に道に合ふ。年穀屢豊にして、兵革用ふること罕なり。五代に校ぶるに、粗ほ小康と爲す。子宋王立つ。是を閔帝と爲す。

- 心もごり、もとる
- 旗下の兵
- 王城の正門
- 物事に對しきそひまふことなし
- 祈りて
- 遊樂女色
- 遊行田獵
- 收賄の吏又は政をそこなふ者
- 少しく安んずる時代

聖人爲生民主。在位八年。改元者二。曰天成。長興。內無聲色。外無遊敗。不任官。廢內藏。實廉吏。治賦。雖不知書。所行暗合於道。年穀屢豐。兵革罕用。較於五代。粗爲小康。子宋王立。是爲閔帝。

閔帝

閔帝。名從厚。明宗次子也。即位有志。爲治。然不知其要。寬柔少斷。劉孟知祥稱帝。唐潞王反。於鳳翔。舉兵。長驅至洛陽。閔帝出奔。在位改元應順。數月而已。潞王立。

閔帝、名は從厚。明宗の次子也。位に即きて、治を爲すに志有り。然れども、其要を知らず。寛柔にして斷少かりき。蜀の孟知祥、帝と稱す。唐の潞王、鳳翔に反し、兵を擧げて、長驅して洛陽に至る。閔帝出で奔る。位に在りて、應順と改元す。數月のみ。潞王、立つ。

● 寛大柔弱にして決斷に乏しかりき

潞王

潞王。名は從珂。本姓は王氏。明宗の養子也。少從明宗。征伐。有功。名を得。衆心用事者。忌之。從珂鎮鳳翔。閔帝命移鎮河東。將佐以爲難。鎮必無全理。乃移微郡。道起兵入清。帝側。從珂至陝。諸軍皆迎降。至洛。宰相馮道等。百官班迎。遂即位。遣人燒殺閔帝於衛州。

潞王、名は從珂、本姓は王氏。明宗の養子也。少くして明宗に従ひて征伐し功名有り、衆の心を得たり。事を用ふる者、之を忌む。從珂、鳳翔に鎮す。閔帝、命じて河東に移鎮す。將佐以爲らく、鎮を離るれば必ず全き理無しと。乃ち檄を鄰道に移し、兵を起して入りて帝側を清めんとす。從珂、陝に至る。諸軍皆迎へ降る。洛に至る。宰相馮道等、百官班迎す。遂に位に即く。人を遣はして閔帝を衛州に燒殺せしむ。

● 安全なるべき道理なし ● 班列を正して出で迎ふ

蜀主孟知祥殂。子昶立つ。○夏州の李彝超卒す。兄彝殷之に代る。○閩人、其州李彝超卒。兄彝殷代之。

蜀主孟知祥殂す。子昶立つ。○夏州の李彝超卒す。兄彝殷之に代る。○閩人、其王璘を殺して、其子繼鵬を立つ。名を昶と改む。○唐主、初め河東の節度使石敬瑭と素より相悦ばず。唐主立つ。敬瑭已むことを得ずして入朝す。尋ぎて鎮に

國人殺其王
麟而立其子
繼嗣更其名
唐主初與河
東節度使石
敬瑭素不相
悅唐主立敬
瑭不得已入

歸り、陰に自全の計を爲す。唐主之を移す。遂に反し、援を契丹に求む。契丹、唐の兵を敗り、敬瑭を立て、晉帝と爲し、兵を引き洛陽に向ふ。唐主自ら焚死す。在位三年ならず。改元する者一。清泰と曰ふ。唐、莊宗より是に至るまで四主、凡て一十四年なり。

● 自ら身を全うするの計 ● 天平の節度使に移す

朝尋歸鎮。陰爲自全之計。唐主移之。遂反。求援於契丹。契丹敗唐兵。立敬瑭爲晉帝。引兵向洛陽。唐主自焚死。在位不三年。改元者一。曰清泰。唐自莊宗至是四主。凡一十四年。

晉

高祖皇帝

晉高祖皇帝。
姓石氏。名敬
瑭。沙陀人。唐

晉の高祖皇帝、姓は石氏、名は敬瑭。沙陀の人にして、唐の明宗の婿也。初め從珂と皆勇力にして善く闘ふ。明宗に事へて皆功有り。内、相忌む。從珂、

明宗之婿也。
初與從珂皆
勇力善闘。事
明宗。皆有功。
內相忌。從珂
稱帝。敬瑭自
河東來朝。將
佐皆勸留之。
時久病骨立。
唐主不以爲
虞。遂得歸鎮。
公主在洛陽。
辭歸。唐主醉
曰。何不且留。
遣歸。欲與石
郎一反邪。敬瑭
聞之益懼。尋
命移鎮鄆州。
敬瑭拒命。唐
主發兵討之。

帝と稱す。敬瑭、河東より來朝す。將佐皆勸めて之を留めしむ。時に久しく病みて骨立つ。唐主以て虞るゝとを爲さず。遂に鎮に歸るゝを得たり。公主、洛陽に在り。辭し歸らんとす。唐主酔ひて曰く、何ぞ且く留らずして遽に歸る。石郎と反せんと欲するか。敬瑭之を聞きて益々懼る。尋ぎて命じて、鄆州に移り鎮せしむ。敬瑭命を拒む。唐主兵を發して之を討つ。桑維翰、敬瑭の爲に表を草すらく契丹に臣と爲り、事ふるに父の禮を以てし、事捷たば地を割くを約せんと。劉知遠以爲らく、ただ過ぎたり。厚く金帛を賂はゞ、其兵を致すに足らん。必ずしも許すに土田を以てせざれ。恐くは異日大に中國の患を爲さんと。敬瑭聽かず。表至る。契丹の主大に喜び、騎五萬を將るて來り、唐兵と晉陽に戦ひて大に之を破る。契丹の主、敬瑭を立て、帝と稱せしむ。國を晉と號す。幽・薊・瀛・莫・涿・檀・順・新・媯・儒・武・雲・應・寰・朔の十六州を割きて之に與ふ。契丹、晉主を以て南に下り、又唐の兵を破りて潞州に至る。契丹北に還り、晉主引きて南す。

桑維翰爲二敬
塘一草表。爲臣
於契丹。事以二
父禮。約二事捷
割地。劉知遠

唐の將校、皆狀を飛して以て迎ふ。唐主殂す。晉主、入りて洛に都し、己にし
て汴に還る。

●石敬瑭に嫁したる唐昭宗の女 ●夫の石敬瑭也。師は妻の夫を描していふ謂、戲にその口氣を假る也

以爲太過。厚賂金帛。足致其兵。不三必許以二土田。恐異日大爲二中國之患。敬瑭不聽。表至。契
丹主大喜。將二騎五萬而來。與唐兵二戰於晉陽。大敗之。契丹主立二敬塘。稱二帝。國號二晉。割二幽薊
瀛莫涿檀順新媯儒武雲應寰朔蔚十六州。與之。契丹以二晉主南下。又破二唐兵。一至二潞州。契
丹北還。晉主引而南。唐將校皆飛狀以迎。唐主殂。晉主入都洛。已而還汴。

吳徐知誥稱
帝。奉吳主溥
爲二讓皇。初徐
溫命二知誥治二
昇州。致二繁富。
城市府舍甚
盛。溫自徙居
之。知誥入二廣
陵。稱二吳政。溫
卒。知誥以二中

○吳の徐知誥、帝と稱し、吳主溥を奉じて讓皇と爲す。初め徐溫、知誥に命じ
て昇州を治めしむ。繁富を致し、城市府舍甚だ盛なり。溫自ら徙りて之に居
る。知誥、廣陵に入りて吳の政を輔く。溫卒す。知誥、中書令を以て昇を
鎮し、而して其子を留めて吳の政を輔けしむ。金陵城を廣くす。吳、知誥に
大元帥を加へ、齊王に封じ、殊禮を備ふ。是に至りて遂に吳の禪を受く。知誥は
本と徐州の李氏の子也。自ら唐の後なりと謂ひ、國を唐と號す。尋きて李姓を復

し、名を昇と更む。是を南唐と稱す。

●とり別けてあつき禮遇

書令二領昇。而
留二其子二輔二吳
政。廣二金陵城。
吳加二知誥大元帥。封二齊王。備二殊禮。至是遂受二吳禪。知誥本徐州李氏子也。自謂二唐後。國號二
唐。尋復二姓李。更二名昇。是稱二南唐。

契丹改二國號二
大遼。國王曠
弒二其主親。而
自立。吳越王
錢元瓘卒。子
弘佐嗣。南漢
主劉龔。又更二
名龔。尋殂。子
玠立。晉主在位不二七歲。改元者一。曰二天福。齊王立。是爲二出帝。

○契丹、國を改めて大遼と號す。○國王曠、其主親を弒して自立す。○吳越王錢元
瓘卒す。子弘佐嗣。○南漢の主劉龔、又名を龔と更む。尋きて殂す。子玠立
つ。○晉主、位に在ること七歳ならずして殂す。改元する者一。天福と曰ふ。齊
王立つ。是を出帝と爲す。

玠立。晉主在位不二七歲。改元者一。曰二天福。齊王立。是爲二出帝。

出帝

出帝。名重貴。高祖兄子也。高祖臨終。命幼子重瑋。拜宰相。馮道欲其補立。景延廣議以國家多難。宜立長君。遂立重貴。延廣用事。

出帝、名は重貴。高祖の兄の子也。高祖、終るに臨み、幼子重瑋に命じて、宰相馮道を拜せしめ、其輔立を欲す。景延廣の議に以へらく、國家多難なり、宜しく長君を立つべしと。遂に重貴を立つ。延廣事を用ふ。

● 瑋の字當に當に作るべしといふ ● たすけ立つ

南唐主李昇。子瓌立。閩王之弟王延政。據建州。稱殷帝。南漢主劉玢之弟弘熙。玢而自立。更名晟。閩主文進弒其主王曦。而自

南唐主李昇。子瓌立。閩王之弟王延政。據建州。稱殷帝。南漢主劉玢之弟弘熙。玢而自立。更名晟。閩主文進弒其主王曦。而自

○南唐の主李昇歿す。子瓌立つ。○閩王の弟王延政、建州に據りて殷帝と稱す。○南漢主劉玢の弟弘熙、玢を弒して自立し、名を晟と更む。○閩の朱文進、其主王曦を弒して自立す。殷主延政、兵を遣はして之を討つ。閩人、文進を殺し、首を殷に傳ふ。殷、國號を改めて閩と曰ふ。唐人、攻めて建州を拔く。延政、出で、降る。閩亡ぶ。唐福州を攻む。克たず。後、吳越、兵を遣はして之を取る。

立。殷主延政遣兵討之。閩人殺三文進。傳首於殷。殷改國號曰閩。唐人攻拔建州。延政出降。閩亡。唐攻福州。不克。後吳越遣兵取之。

初晉高祖事契丹甚謹。至少主即位。景延廣主議。告哀不復稱臣。契丹大怒。延廣又囚其回鹘使。已而遣歸。大言曰。歸語而主。先帝爲北朝所立。故稱臣。奉表。今上乃中國所立。爲隣稱。孫足矣。翁怒。則來戰。孫有下

○初め晉の高祖、契丹に事ふること甚だ謹む。少主位に即くに至りて、景延廣主として議し、哀を告ぐるに、復た臣と稱せず。契丹大に怒る。延廣又其回鹘使を囚ふ。已にして歸らしむるとき、大言して曰く、歸りて而の主に語けよ。先帝は北朝に立てらる。故に臣と稱して表を上れり。今上は中國の立つる所なり、隣と爲し、孫と稱すれば足る。翁怒らば、則ち來り戦へ。孫に十萬の磨劍を横へて相待てる有り。桑維翰、屢々遜辭して以て契丹に謝せんと請ひ、毎に延廣の爲に沮む。是に於て契丹入寇して河を渡る。晉主、自ら將とし、及び李守貞等をして道を分ちて之を撃たしむ。契丹敗れ走る。契丹再び相州に至り、引き還る。晉主又自ら將として之を追ふ。契丹、兵を旋して南に下り、晉人之を撃つ。契丹又敗れ走る。晉主既に再び勝つ。意へらく、契丹畏るゝに足らずと。契

十萬橫磨劍
相待桑維翰
屢請遜辭以
謝契丹每爲
延廣所沮於
是契丹入寇
波河晉主自
將及遣李守
貞等分道擊
之契丹敗走
契丹再至相
州引還晉主
又自將追之
契丹旋兵南
下晉人擊之
契丹又敗走
晉主既再勝
意契丹不足
畏契丹主大
舉入寇晉將

丹の主大舉して入寇す。晉の將杜威降る。契丹兵を遣はして汴に入り、晉主を執へて以て其國に歸る。在位五年、改元する者一。開運と曰ふ。晉、高祖より是に至るまで再世、二十二年にして亡ぶ。契丹の主、大梁に入る。胡騎四出して剽掠し、之を打草穀と謂ふ。丁壯は鋒刃に斃れ、老弱は溝壑に委し、東西兩畿より鄭滑・曹・濮に及び、數百里の閒、財帛殆んど盡く。契丹の主、判三司劉昫に謂ひて曰く、契丹の兵應に優賜有るべしと。遂に都城士民の錢帛を括し、使者數千人を遣はして諸州に括す。皆迫るに嚴誅を以てす。人々生を聊んぜず。括し至れば初めより預ち給すること無く、皆輦して歸らんと欲す。中外怨み憤り、皆之を逐はんとを思ふ。所在盜起る。契丹の主曰く、我、中國の治め難きこと此の如くなるを知らざりきと。汴に居ること三月にして還る。晉の劉知遠先つこと一月、位に晉陽に即く。

- 高祖の喪を告げ知らずるに
- 契丹より晉に往來し產物の貿易を禁る役人
- 契丹を指す
- かすめと

杜威降。契丹
遣兵入汴。執
晉主以歸其國。在位五年。改元者一。曰開運。晉自高祖至是再世。一十二年而亡。契丹主入大梁。胡騎四出剽掠。謂之打草穀。丁壯斃鋒刃。老弱委溝壑。自東西兩畿及鄭滑曹濮。數百里閒。財帛殆盡。契丹主謂判三司劉昫曰。契丹兵應有優賜。遂括都城士民錢帛。遣使者數千人。括於諸州。皆迫以嚴誅。人不聊生。括至。初無預給。皆欲輦歸。中外怨憤。皆思逐之。所在盜起。契丹主曰。我不知中國難治如此。居汴三月而還。晉劉知遠。先一月即位於晉陽。

- 晉主に對せ自領に持歸らんとす

漢

高祖皇帝

漢の高祖皇帝、姓は劉氏、初の名は知遠。沙陀の人也。晉祖敬瑭に兵間に事へて功最も多し。晉祖の河東に在りしとき、唐の潞王之を移して鄆を鎮せしめんとす。知遠曰く、明公久しく兵に將として士卒の心を得たり。今形勝の地に據り、士

漢高祖皇帝。姓劉氏。初名知遠。沙陀人也。事晉祖敬瑭於兵間。功

最多。晉祖在河東。唐諸王移之鎮。郭知遠曰。明公久將兵。得士卒心。今據形勝之地。士馬精強。若稱兵。傳檄。帝業可成。奈何。以一紙制書。自投虎口。遂拒命。唐遣將攻之。不克。晉祖舉兵。滅唐入洛陽。知遠時爲侍衛馬軍都指揮使。分漢兵入營。館契丹兵於寺中。肅然。後晉祖以知遠鎮河東。晉祖殂。遣命以知遠入輔政。晉人匿之。知遠由是怨朝廷。契丹連入寇。晉雖下以知遠爲行營都統。知遠不行。契丹精強なり。若し兵を稱け檄を傳へば、帝業成る可し。奈何ぞ一紙の制書を以て自ら虎口に投ぜん。遂に命を拒む。唐、將を遣はして之を攻め、克たず。晉祖、兵を舉げ、唐を滅して洛陽に入る。知遠、時に侍衛馬軍都指揮使たり。漢の兵を分ちて營に入れ、契丹の兵を寺に館せしむ。城中肅然たり。後晉祖、知遠を以て河東を鎮せしむ。晉祖殂す。遣命して知遠を以て入りて、政を輔けしむ。晉人之を匿す。知遠、是に由りて朝廷を怨む。契丹連に入寇す。晉、知遠を以て行營都統と爲すと雖も、知遠行かず。契丹、晉を滅して大梁に入る。知遠、帝を晉陽に稱す。契丹去る。乃ち太原を發して洛に入り、遂に汴に入り、國を漢と號す。後名を嵩と更む。

● 景也 ● 轉任の辭命書を受けて身を危地に投ずるは不可と也 ● 洛陽の天宮寺

丹滅晉入大梁。知遠稱帝於晉陽。契丹去。乃發太原入洛。遂入汴。國號漢。後更名嵩。

契丹主耶律德光歸。至殺胡林而死。割腹實鹽載去。人謂之帝把。子兀欲立。楚王馬希範卒。子希廣立。吳越王錢弘佐卒。弘侗立。其下廢之。而立弘俶。漢主祖。在位一年。改元乾祐。子周王立。是爲隱帝。

○契丹の主耶律德光歸り、殺胡林に至りて死す。腹を剖き鹽を實て、載せ去る。人之を帝把と謂ふ。子兀欲立つ。○楚王馬希範卒す。子の希廣立つ。○吳越王錢弘佐卒す。弘侗立つ。其下之を廢して公俶を立つ。○漢主祖す。在位一年、元を乾祐と改む。子周王立つ。是を隱帝と爲す。

● 其屍の腹實を防ぐ爲め也

隱帝

隱帝。名承祐。年十八即位。先是漢祖以

隱帝、名は承祐。年十八にして位に即く。○是より先漢祖、弟崇を以て太原に尹とし、留守河東の節度使と爲す。崇、郭威と隙有り。是に至りて威、樞密使侍中

弟崇尹太原。爲留守河東。節度使崇與郭威有隙。至是威爲樞密使侍中執政。崇爲自全之計。選募勇士。招納亡命。繕甲兵。實府庫。罷上供財賦。朝廷詔令。多不稟承。

と爲りて政を執る。崇自ら全くするの計を爲す。勇士を選び募り、亡命を招き納れ、甲兵を繕ひ、府庫を實し、財賦を上供することを罷め、朝廷の詔令多くは稟承せず。

● かけもち者 ● うけ継げず

荆南高從誨卒。子寶融。知軍府。河中李守貞反。郭威督諸軍討克之。守貞自殺。漢以郭威爲鄴都留守。楚王馬希廣之兄希萼殺希廣而自立。

○荆南の高從誨卒す。子寶融、軍府に知たり。○河中の李守貞反す。郭威諸軍を督して討ちて之に克つ。守貞自殺す。○漢、郭威を以て鄴都の留守と爲す。○楚王馬希廣の兄希萼、希廣を殺して自立す。

● 知事たり

漢主自即位。漢主の位に即きてより以來、同平章事楊邠、樞密使郭威主征伐。侍衛指揮使史弘肇、典宿衛。三司使王章、掌財賦。邠頗公忠。弘肇察京師。道不拾遺。章措拾遺。利供饋不乏。國家相安。弘肇嘗謂天下須用長槍大劍。安用毛錐。子章曰。若無毛錐。財賦何由取辦。章曰。此文人。嘗曰。此

○漢主の位に即きてより以來、同平章事楊邠、樞密使郭威、征伐を主り、侍衛指揮使史弘肇、宿衛を典り、三司使王章、財賦を掌る。邠、頗る公忠なり。弘肇、京師を察し、道遺ちたるを拾はず。章、遺物を措拾して、供饋乏しからず。國家相安し。弘肇嘗て謂く、天下須らく長槍大劍を用ふべし。安んぞ毛錐子を用ひん。章曰く、若し毛錐無くんば、財賦何に由りてか取辦せんと。章は文人を輕んず。嘗て曰く、此輩、算を握りて縦横を知らず。何ぞ用に益あらんと。漢主の左右の嬖倖、浸く事を用ひ、親戚政を干す。邠等毎に之を裁抑す。漢主益々壯にして、大臣の爲に制せらるゝを厭ふ。楊邠嘗て事を前に議して曰く、陛下但だ聲を禁ぜよ、臣等の在る有り。漢主積みて平なること能はず。左右因りて之を誦す。乾祐三年、邠、弘肇、章を殺す。密詔を遣はして、郭威を鄴に殺さんと欲す。將佐、威に勸めて入朝して自ら訴へしむ。威、大軍を引きて至る。漢主、兵を遣はして之を拒ぐ。或は降り、或は戦はずして還る。漢主、亂兵の爲に弑せらる。威、太后に白して、武寧の節度置を迎ふ。未だ至らざ

輩握算不知
縱橫何益於
用漢主左右
嬖倖寔用事
親戚干政邪
等每裁抑之
漢主益壯厭
爲大臣所制
楊邪嘗議事

るに、契丹の入寇を聞き、威を遣はして兵に將として之を撃たしむ。威、澶州に至りしとき、將士大に謀ぎ、黃旗を裂きて以て威の體に被らしめ、共に之を扶け抱きて萬歳と呼ぶ。地に震ふ。威を擁して南に行く。遂に漢に代る。漢、二世四年にして亡ぶ。

- 世人に遣れられたる利益を拾ひ集む
- 供給顧問
- 算を握りても殿と稱との數取りだに知らず
- ちさへつく
- 口を閉ぢて何事をも言はざれ
- 鬱憤積りて
- 天子の服する黃衣に疑したる也

於前曰。陛下但禁聲。有臣等在。漢主積不能平。左右因譖之。乾祐三年。殺邪弘。肇章。遣密詔。欲殺郭威於鄴。將佐勸威入朝。自訴。威引大軍至。漢主遣兵拒之。或降或不戰而還。漢主爲亂兵所弑。威自太后迎武寧節度。贊未至。聞契丹入寇。遣威將兵擊之。威至澶州。將士大譟。裂黃旗以被威體。共扶抱之。呼萬歳。震地。擁威南行。遂代漢。漢二世四年而亡。

周

太祖皇帝

周太祖皇帝。姓郭氏。名威。太原人也。唐莊宗有宮人柴氏。歸其家。擇姻。一日窺于門。見有疾走而過者。柴氏大驚。問何人。告者曰。從馬軍使郭雀兒也。柴氏欲嫁之。父母不肯。曰。汝帝左右人。當嫁節度使。奈何。嫁此人。柴氏堅不嫁。他人竟歸威。漢祖鎮河東。威爲孔

周の太祖皇帝、姓は郭氏、名は威。太原の人也。唐の莊宗に宮人柴氏有り、其家に歸りて姻を擇ぶ。一日門に窺ふ。疾走して過ぐる者有るを見る。柴氏、大に驚き、何人ぞと問ふ。告ぐる者曰く、從馬軍使郭雀兒なりと。柴氏之に嫁せんと欲す。父母肯せずして曰く、汝は帝の左右の人なり。當に節度使に嫁すべし。奈何ぞ此人に嫁せんと。柴氏堅く他人に嫁せず、竟に威に歸す。漢祖の河東に鎮せしとき、威、孔目官たり。契丹汗に在り。威、漢祖に勸めて兵を擧げしめ、遂に帝業を成す。漢の隱帝の時、威専ら征伐を主る。隱帝之を殺さんと欲して克はず。威、兵を擁して汴に入り、已にして出で、契丹を禦ぐ。軍士、擁して汴に還る。時に已に賀を徐州に迎ふ。乃ち漢の太后の令を以て、賀を廢して湘陰公と爲し、威を監國と爲す。尋きて即位す。自ら謂ふ、周の統叔の後なりと。國を周と號す。賀は崇の子也。崇初め隱帝の害に遇へるを聞き、兵を起して南に向はんと欲せしが。賀を迎へ立つと聞くに及び、則ち曰く、吾が兒帝と爲らば、吾復

日官。契丹在
汴。威動漢祖。
舉兵。遂成二帝
業。漢隱帝時。
威專主征伐。
隱帝欲殺之。
不克。威擁兵
入汴。已而出
禦契丹。軍士
擁還汴。時已

た何をか求めんと。賀、廢せられて死す。崇、乃ち帝を晉陽に稱す。有つ所は、
并、汾、忻、代、嵐、憲、隆、蔚、沁、遼、麟、石、十二州の地なり。其臣に謂ひて曰く、願
ふに我は是れ何の天子にして、汝等は是れ何の節度使ぞやと。是を北漢と爲す。
子承鈞を遣はして周を伐たしむ。克たず。使を遣して師を契丹に乞ふ。契丹
北漢の主に策名し、名を旻と更めしむ。

●官女 ●威は項(ワジ)に雀の子のほりものあり、時人因りて項雀兒と譯名す

迎贊於徐州。乃以漢太后令廢贊爲湘陰公。威爲監國。尋即位。自謂周執叔之後。國號周。
贊崇子也。崇初聞隱帝遇害。欲起兵南向。及聞迎立贊。則曰。吾兒爲帝。吾復何求。贊廢死。
崇乃稱帝於晉陽。所有并汾忻代嵐憲隆蔚沁遼麟石十二州之地。謂其臣曰。願我是何
天子。汝等是何節度使邪。是爲北漢。遣子承鈞伐周。不克。遣使乞師於契丹。契丹策命北
漢主。更名旻。

契丹述軌弒兀欲而自立。述律討殺述
契丹述軌弒兀欲而自立。述律討殺述

契丹述軌弒兀欲而自立。述律討殺述

○契丹の述軌、兀欲を弒して自立す。述律、討ちて述軌を殺して之に代る。○楚、
希廣・希尊より以來、相攻奪して寧歲無し。其下又希尊を廢して希崇を立つ。南

軌而代之。楚
自希廣。希尊
以來相攻奪
無寧歲。其下
又廢希尊。而
立希崇。南唐
遣邊鎬擊楚。
希崇降。南唐
遷馬氏之族
于金陵。楚亡。
故楚將劉言。
自朗州攻潭。
邊鎬走。言取
潭。後又以行
達鎮潭。達自
居朗。周主在
位三年。改元
者一。曰廣順。
晉王立。是爲
世宗皇帝。

唐、邊鎬を遣はして楚を撃つ。希崇降る。南唐、馬氏の族を金陵に遷す。楚亡
ぶ。○故の楚の將劉言、朗州より潭を攻む。邊鎬走る。言、湖南を取り、命を周に
請ふ。周、言を以て朗を鎮せしめ、王達に潭を鎮せしむ。達、襲ひて言を朗に殺
し、周行逢を以て朗を守らしむ。達、潭に還る。後又行逢を以て潭を鎮せしめ、
達自ら朗に居る。○周主、在位三年にして殂す。改元する者一。廣順と曰ふ。
晉王立つ。是を世宗皇帝と爲す。

●述軌は兀欲の子、述律は述軌の弟也 ●邊鎬の命令を周に請ふ

世宗皇帝。名

世宗皇帝

世宗皇帝、名は榮、本姓は柴氏。周祖の妻の兄柴守禮の子也。周祖子無し。故

榮。本姓榮氏。周祖妻兄榮守禮之子也。周祖無子。故養之。周初領節鎮。已而尹二開封。封晉王。周主臨終。命晉王聽政。尋即位。北漢主喜。請兵於契丹。契丹遣將楊衰將二萬騎。北漢主自將三萬人來。周主欲自將禦之。羣臣皆諫。主曰。崇幸大喪。輕朕年少

に之を養ふ。周の初めより節鎮を領す。已にして開封に尹たり。晉王に封ぜらる。周主、終るに臨み、晉王に命じて政を聽かしむ。尋ぎて位に即く。北漢主、周主の殂せしを聞きて大に喜び、兵を契丹に請ふ。契丹、將楊衰を遣して萬騎に將たらしめ、北漢主自ら三萬人に將として來る。周主自ら將として之を禦がんと欲す。羣臣皆諫む。主曰く、崇、大喪を幸とし、朕の年少くして新に立つを輕んず。此れ必ず自ら來らん。朕、往かすんばある可からず。吾が兵力の強きを以て崇を破らんこと、山の卵を壓するが如きのみと。馮道力め争ふ。惟だ王溥のみ勸め行かしむ。北漢主、高平に軍す。周の前鋒之を撃つ。北漢の兵卻く。主、其遁れ去らんことを慮り、諸軍を趣して亟かに進ましむ。後軍未だ至らず、衆心危み懼る。而して主の志氣益々銳し。合戦未だ幾くならざるに、周の右軍の將樊愛能・何徽先づ遁れ、右軍潰ゆ。歩軍千餘、甲を解きて降る。主、軍勢の危きを見、自ら親兵を引き、矢石を犯して督戰す。宿衛の將趙匡胤曰く、主の危きこと此の如し。吾が屬何ぞ死を致さざることを得んと。又禁兵の將張永徳に謂ひて曰く、賊、氣驕る。破る可し。公、兵を引きて高きに乗じ、西に出で、左翼と爲れ。吾右翼と爲りて以て之を撃たん。國家の安危此一舉に在り。と。永徳之に従ふ。各二千人に將として進み戰ふ。匡胤身ら士卒に先ち、馳せて其鋒を犯す。士卒死戦し、一、百に當らざるもの無し。北漢の兵大に敗る。楊衰敢て救はず。北漢主、晝夜北に走り、僅に晉陽に入ることを得たり。周主、樊愛能・何徽及び所部の軍使以上七十餘人を收へ、之を責めて曰く、汝が輩戰ふこと能はざるに非ず。正に朕を以て奇貨と爲して、劉崇に賣り與へんと欲せしのみと。悉く之を斬る。是より驕將情卒も始めて懼る、所を知り、姑息の政を行はず。張永徳盛に趙匡胤の智勇を稱す。權に殿前都虞侯とす。周主、侍臣に謂ひて曰く、兵は精を務めて多きを務めず。農夫の百は、未だ戰士の一を養ふ能はず。奈何ぞ民の膏血を浚ひて此無用の物を養はんやと。乃ち

新立。此必自來。朕不可不往。以吾兵力之強破崇。如山壓卵耳。馮道力爭。惟王溥勸行。北漢主軍于高平。周前鋒擊之。北漢兵卻。主慮其遁去。趣諸軍亟進。後軍未至。衆心危懼。而主志氣益銳。合戰未幾。周右軍將樊愛能。何徽先遁。右軍潰。歩軍千餘解甲降。主見

胤曰く、主の危きこと此の如し。吾が屬何ぞ死を致さざることを得んと。又禁兵の將張永徳に謂ひて曰く、賊、氣驕る。破る可し。公、兵を引きて高きに乗じ、西に出で、左翼と爲れ。吾右翼と爲りて以て之を撃たん。國家の安危此一舉に在り。と。永徳之に従ふ。各二千人に將として進み戰ふ。匡胤身ら士卒に先ち、馳せて其鋒を犯す。士卒死戦し、一、百に當らざるもの無し。北漢の兵大に敗る。楊衰敢て救はず。北漢主、晝夜北に走り、僅に晉陽に入ることを得たり。周主、樊愛能・何徽及び所部の軍使以上七十餘人を收へ、之を責めて曰く、汝が輩戰ふこと能はざるに非ず。正に朕を以て奇貨と爲して、劉崇に賣り與へんと欲せしのみと。悉く之を斬る。是より驕將情卒も始めて懼る、所を知り、姑息の政を行はず。張永徳盛に趙匡胤の智勇を稱す。權に殿前都虞侯とす。周主、侍臣に謂ひて曰く、兵は精を務めて多きを務めず。農夫の百は、未だ戰士の一を養ふ能はず。奈何ぞ民の膏血を浚ひて此無用の物を養はんやと。乃ち

軍勢危。自引親兵。犯矢石。督戰。宿衛將趙匡胤曰。主危如此。吾屬何得不致死。又謂禁兵將張永德曰。賊

命じて大に諸軍を簡ばしむ。又諸道に詔して、天下の壯士を募り、咸く闕に詣らしめ、匡胤に命じて其尤なる者を選びて、殿前の諸班と爲し、其騎歩諸軍は各々將帥に命じて之を選ばしむ。是に由りて士卒精強にして、向ふ所克く捷つ。

● 鎮守の節度使 ● 一に獨克に作る ● 極めて容易なる論 ● 高地を利用して ● 上さしめるもの ● 一時のがれの政 ● 百人の農夫より取立つる物

氣驕可破也。公引兵乘高。西出爲左翼。我爲右翼。以擊之。國家安危。在此一舉。永德從之。各將二千人進戰。匡胤身先士卒。馳犯其鋒。士卒死戰。無不一當百。北漢兵大敗。楊衰不敢救。北漢主晝夜北走。僅得入晉陽。周主收樊愛能何徽及所部軍使以上七十餘人。責之曰。汝輩非不能戰。正欲以朕爲奇貨。實中與劉崇上耳。悉斬之。自是驕將情卒始知所懼。不行。姑息之政。矣。張永德盛稱趙匡胤智勇。權殿前都虞侯。周主謂侍臣曰。兵務精不務多。農夫百。未幾能養戰士一。奈何凌民之膏血。養此無用之物乎。乃命大簡諸軍。又詔諸道募天下壯士。咸造詣闕。命匡胤選其尤者。爲殿前諸班。其騎步諸軍。各命將帥選之。由是士卒精強。所向克捷。

周攻北漢。汾

○周、北漢を攻む。汾・遼・憲・嵐・石・沁・沂の州、皆周に入る。周主、晉陽を攻めて

遼憲嵐石沁沂州。皆入于周。周主攻晉陽。不克。引軍還。北漢主劉晏。殂。子鈞立。周伐蜀。取秦階成鳳州。

克たす。軍を引ききて還る。○北漢主劉晏殂す。子鈞立つ。○周、蜀を伐ちて、秦・階・成・鳳の州を取る。

● 契丹の來擾するに會ひて敗れたる也

周伐南唐。唐遣兵拒於壽州。而敗。周主自將。大敗唐兵於正陽。唐將皇甫暉。姚鳳保。清流關。主命趙匡胤。倍道襲之。擒暉。鳳。克滁州。周師取揚泰。光舒。蔚州。唐

○周、南唐を伐つ。唐、兵を遣はし壽州に拒ぎて敗る。周主自ら將として大に唐の兵を正陽に敗る。唐の將皇甫暉・姚鳳、清流關を保つ。主、趙匡胤に命じて、道を倍して之を襲はしむ。暉・鳳を擒にし滁州に克つ。周の師、揚・泰・光・舒・蔚州を取る。唐の兵、周の師を拒ぎて、復た泰州を取り、揚州を攻む。周主、匡胤に命じて六合に屯せしむ。唐の兵來り攻む。奮撃して大に之を敗る。將士に力を致さざる者有り。匡胤陽りて督戰を爲し、劍を以て其皮笠を斫る。明日遍く其笠を闕す。劍の跡有る者數十人、皆之を斬る。是に由りて部兵敢て死を

兵拒周師復取泰州攻揚州周主命匡胤屯六合唐兵來攻奮擊大破之將士有不致力者匡胤陽爲督戰以劍斫其皮笠明日遍閱其笠有二劍跡者數十人皆斬之由是部兵莫敢不盡死周主還大梁留兵圍壽州唐兵復江北諸州周守將皆棄去并兵攻壽州周主復自將如壽唐人以城降周主還大梁己而復自將攻濠泗皆降進攻楚州遣兵取揚泰周主克楚州還至揚州唐主遣使獻江北地周主乃還唐主更名景去帝號奉周正朔

○朔州之王遠潘叔嗣所殺將吏迎潭州

○朔州之王遠潘叔嗣の爲に殺さる。將吏潭州の周行逢を迎へて朔州に入らしむ。行逢、潭州を併せて之を有つ○南漢主劉晟歿す○子鑑立つ。周主自ら將とし

○二日の行程を一日に進めて 戰を奮闘するやうに見せ掛けて軍中を馳せ廻り 皮造りの陣笠 斬也

周行逢入朔州。行逢併潭州。有之。南漢主劉晟歿。子鑑立。周主自將伐契丹。取瀛莫易州。離京四十二日。而關南悉平。讓趙幽州。會不豫。面止。以瓦橋關爲雄州。置戍而還。往還六十日。趙匡胤先是爲殿前都指揮使。從攻淮南。又從征契丹。至是爲殿前都點檢。

○周主、在位六年にして殂す。改元する者一。顯徳と曰ふ。周主、藩に在りて韜晦す。位に即くに及び、首めに高平の寇を破る。人始めて其英武に服す。號令嚴明、人敢て犯すこと莫し。城を攻め敵に對して、矢石左右に落つるも略々容を動かさず。機に應じて策を決すること、人の意表に出づ。又政事に勤め、姦を發

て契丹を伐ち、瀛・莫・易の州を取る。京を離るゝこと四十二日にして、關南悉く平く。幽州に趨かんことを議せしが、不豫に會ひて止む。瓦橋關を以て雄州と爲し、益津關を霸州と爲し、戍を置きて還る。往還六十日○趙匡胤、是より先殿前都指揮使と爲り、從ひて淮南を攻め、又從ひて契丹を征す。是に至りて殿前都點檢と爲る。

● 病氣 ● 往復の日數

周主在位六年。改元者一。曰顯徳。周主在藩韜晦。及即位。首破高平之寇。人

始服其英武。號令嚴明。人莫敢犯。攻城對敵。矢石落左右。略不動容。應機決策。出人意表。又勤於政事。發姦擒伏。聽察如神。閒暇則召儒者。讀史。商榷大義。性不好絲竹珍玩之物。常言朕必不因喜賞人。因怒刑人。文武參用。各盡其能。人畏其明。而懷其惠。故能破敵廣地。所向無前。登遐之日。遠近哀慕。子梁王立。是為恭帝。

き伏を摘み、聰察神の如し。閒暇あれば、則ち儒者を召して史を讀ましめ、大義を商榷す。性、絲竹、珍玩の物を好まず。常に言く、朕は必らず喜に因りて人を賞し、怒に因りて人を刑せじと。文武參へ用ひ、各々其能を盡さしむ。人其明を畏れて、其惠に懐く。故に能く敵を破り地を廣めて、向ふ所前無し。登遐の日、遠近、哀慕ふ。子梁王立つ。之を恭帝と爲す。

● 才能をつ、みくらます ● 思ひも掛けざる所に出づ ● 姦邪を發見し、かくしかく惡事を探捕す ● 推一に確に作る、通用す。是非得失を論究するをいふ ● 崩御

恭 帝

恭帝。名宗訓。

恭帝、名は宗訓。七歳にして位に即く。趙匡胤を以て歸德節度使と爲す。明

欠

欠

太宗皇帝

太宗皇帝。初名匡父。太祖長弟也。太祖入京城。匡父首請下號。令諸將戰。士卒仍自於馬前。戒標掠。太祖受禪。乃改多光。義。尹。開。封。同平章事。封晉王。建隆二年。昭憲杜太后臨崩。謂太祖曰。汝知下所以得天下者乎。太祖曰。皆祖

太宗皇帝、初めの名は匡父、太祖の長弟也。太祖の京城に入りしとき、匡父首として諸將に號令し、士卒を戦めんと請ふ。仍りて自ら馬前に於て標掠を戒む。太祖、禪を受く。乃ち名を光義と改め、開封に尹として、同平章事たり。晉王に封ぜらる。建隆二年、昭憲杜太后崩するに臨み、太祖に謂ひて曰く、汝天下を得し所以の者を知るか。太祖曰く、皆祖考と太后との餘慶なり。太后笑ひて曰く、然らず。正に柴氏が幼兒をして天下に主たらしめしに由るのみ。汝、萬歳の後、當に位を晉王に傳へ、晉王は秦王に傳へ、秦王は以て徳昭に傳ふべし。國に長君有るは社稷の福也。太祖曰く、謹みて教を受くと。太后、趙普を呼びて曰く、趙書記共に吾が言を記せよ。違ふ可からずと。因りて普に命じて榻前に於て誓書を爲らしむ。普、紙尾に署して曰く、臣普記すと。之を金匱に藏む。太祖、友愛

考與太后之餘慶。太后笑曰。不然。正由柴氏使三幼兒主天下耳。汝萬歲後當傳位晉王。晉王傳秦王。秦王以傳中德昭。國有長君。社稷之福也。太祖曰。謹受教。太后呼趙普。普曰。趙書記共記。吾言不可違。

篤く至る。晉王嘗て疾に寝ね、灼艾す。太祖も亦た自ら灸して以て其痛を分つ。嘗て曰く、晉王は、龍行虎歩す。且つ生れし時異有りき。他日必ず太平の天子と作らん。福德吾が能く及ぶ所に非ずと。太祖蜀に幸す。布衣張齊賢有り、十策を獻す。召し問ひて食を賜ふ。且啗ひ且對ふ。太祖、其某策を善しとす。齊賢固く稱す、餘の策も皆善しと。太祖、怒り斥けて便ち出す。既にして還り、晉王に語るらく、吾西都に幸して一の張齊賢を得たり。吾之を用ひんと欲せず。佗日留めて汝に與へて宰相と作さんと。蓋し傳位の定まれると久し。

● 鳳皇を捕かぬやうに賤賤る ● 祖先と父 ● 周の世宗が恭帝に傳へしと ● 灸をすう ● その動作を龍虎にたとへて、高貴なる事をいふ ● 位を晉王に傳ふべきことは、久しき以前よりの決定なりし也

因命普於前爲晉書。普署紙尾曰。臣普記。藏之金匱。太祖友愛篤至。晉王嘗廢疾灼艾。太祖亦自灸。以分其痛。普曰。晉王龍行虎歩。且生時有異。他日必作太平天子。福德非吾所能及也。太祖幸蜀。有布衣張齊賢。獻十策。召問賜食。且啗且對。太祖善其某策。齊賢固稱。餘策皆善。太祖怒斥。便出。既還。語晉王。吾幸西都。得一張齊賢。吾不欲用之。佗日留與汝作宰相。蓋傳位之定久矣。

太祖不豫。后遣王繼恩召皇子德芳。繼恩徑召晉王。王至宮中。散遣左右。所言皆不可得聞。但遙見燭影下。王有離席之狀。既而上引柱斧。截地。大聲曰。好爲之。遂崩。后見晉王。愕然曰。吾封改封齊王。德昭封武功郡王。

太祖不豫なり。后、王繼恩をして皇子德芳を召さしむ。繼恩徑ちに晉王を召す。王宮中に至れば左右を散遣す。言ふ所皆聞くことを得可からず。但だ遙かに燭影の下を見れば、王、席を離るゝの狀有り。既にして、上、柱斧を引きて地に截し、大聲して曰く、好く之を爲せと。遂に崩す。后、晉王を見、愕然として曰く、吾母子の命、皆官家に託す。王曰く、共に富貴を保たん。憂ふることも無れと。王、位に即きて、名を昊と更む。秦王廷美、開封に尹たり。改めて齊王に封ぜらる。德昭、武功郡王に封ぜらる。

● 近侍の人々を遣さく ● 座右なる大斧 ● 天子の事にて晉土を指す

○使を遣して、州縣を分行し、官吏を廉察し、其優劣を第せしめ、罷軟にして任に勝へず、惰慢にして事を親らせざるは官を免す。○臧吏の配せらるゝ者は、赦に

軟不勝任。情慢不親事。免官。賊吏配者。遇赦不叙。大理評事陳舜封奏事口捷。舉止類倡優。問誰氏子。對以父爲伶官。上曰汝真雜類。豈得任清望官。改授殿直。陳洪進來朝。獻漳泉二州。吳越王錢俶來朝。遂獻其地。命潘美伐北漢。尋親征圍太原。劉繼元出降。北漢亡。

遇ふも叙せず○大理評事陳舜封、事を奏するに、口捷くして舉止倡優に類す。誰が氏の子ぞと問ふ。對ふるに、父の伶官たるを以てす。上曰く、汝眞の雜類なり。豈清望の官に任ずることを得んやと。改めて殿直を授く○陳洪進、來朝し、漳・泉二州を獻す○吳越王錢俶、來朝し、遂に其地を獻す○潘美に命じて北漢を伐たしめ、尋ぎて親征して太原を圍む。劉繼元出で降り、北漢亡ぶ。

○次第せしむ ○政に倦み且つ軟弱 ○藝人 ○樂人 ○雜色下賤の徒 ○清要にして名望ある官

詔征契丹。易州涿州來降。上攻幽州。諭旬不下。遂班師。郡王德昭從征幽州。軍

○詔して契丹を征す。易州・涿州來り降る。上、幽州を攻む。旬を踰えて下らず、遂に師を班す。郡王德昭、從ひて幽州を征す。軍中嘗て夜驚く。上の在る所を知らず。德昭を立てんと謀る者有り。上、聞きて悦ばず。歸るに及び、北征利あらざるを以て、北漢を平けしの賞を行はず。德昭之を言ふ。上大に怒りて曰

中嘗夜驚。不知上所在。有下謀立德昭者。上聞不悅。及歸以北征不利。不行下平北漢之賞。德昭言之上大怒。曰待汝自爲之。賞未晚也。德昭退而自刎。後二年。岐王德芳卒。自太祖二子相繼死。齊王廷美不自安。佗日上嘗以傳國意訪趙普。普曰太祖已誤。陛下豈容再誤邪。於是普復入相。廷美遂得罪。降涪陵縣公。普復使知開封府李符告其繼望。南還房州。尋殺之。普恐李符漏言。因弭德超。謂曹彬故以符薦德超。貶符春州卒。

く、汝の自らの之を爲さんとを待つも、賞は未だ晚しとせざる也と。德昭退きて自ら刎ぬ。後二年、岐王德芳卒す。太祖の二子相繼ぎて死せしより、齊王廷美自ら安んぜず。佗日、上、嘗て傳國の意を以て、趙普に訪ふ。普曰く、太祖已に誤る。陛下豈再び誤る容けんやと。是に於て普復た入りて相たり。廷美遂に罪を得て涪陵縣公に降さる。普、復、知開封府李符をして其怨望を告げしむ。南、房州に還し、尋ぎて之を殺す。普、李符の言を漏さんことを恐れ、弭德超が曹彬を譖するの故に因りて、符が德超を薦めしを以て、符を春州に貶す。卒す。

○「還」は「還」の字の誤

○种放、終南山に隠れ、草を結びて廬と爲し、講習を以て務めと爲す。後進多く之

南山。結草爲廬。以講習爲務。後進多從之。學。上聞召之。辭以母老。上高其節。厚賜錢帛。旌之。呂蒙正爲參政。有朝士指之曰。此子亦參政邪。蒙正作不聞。同列欲詰其姓名。蒙正止之曰。若一知名。姓。則終身不忘。不如無知也。

に從ひて學ぶ。上、聞きて之を召す。辭するに母の老いたるを以てす。上、其節を高しとし、厚く錢帛を賜ひて之を旌す。○呂蒙生參政と爲る。朝士有り、之を指して曰く、此子も亦參政かと。蒙生佯りて聞かざるごとくす。同列其姓名を詰らんと欲す。蒙生之を止めて曰く、若し一たび名姓を知らば、則ち身を終ふるまで忘れじ。知る無きに如かざる也と。

● 輕佻の言也 ● 聞かぬよりす

召華山陳搏。賜號希夷先生。開寶寺塔成。前後八年。所費億萬。田錫奏曰。衆以

○華山の陳搏を召し、號を希夷先生と賜ふ。○開寶寺の塔成る。前後八年、費す所億萬。田錫奏して曰く、衆は以て金碧煖燿たりと爲し、臣は以て膏を塗り血を費ると爲すと。上怒らず。○是より先西夏の李光叡卒す。子繼筠嗣ぐ。又卒す。弟繼捧嗣ぐ。繼捧、來朝して、四州の地を獻す。其弟繼遷、叛きて去り、數

邊に入寇す。契丹の主明記、殂す。景宗と號す。子隆緒立つ。年十一。母蕭氏、其國政を専らにす。○上、曹彬等に命じ、道を分ちて契丹を伐たしむ。彬の兵、大に岐溝關に敗る。詔して師を班さしむ。契丹はより連年入寇す。後女眞、契丹が其朝貢の路を隔つるを以て、之を撃たんと請ふ。許さず。女眞遂に契丹に臣たり。

● 金碧光り輝く、碧は青く美しき石の名 ● 人民の膏血を塗りたるもの

爲金碧煖燿。臣以爲塗膏。覺血。上不怒。先是西夏李繼嗣。又卒。弟繼捧嗣。繼捧來朝。獻四州地。其弟繼遷叛去。數入寇邊。契丹主明記。殂。景宗。子隆緒立。年十二。母蕭氏。專其國政。上命曹彬等。分道伐契丹。彬兵大敗於岐溝關。詔班師。契丹自是連年入寇。後女眞以契丹隔其朝貢之路。請擊之。不許。女眞遂臣於契丹。

上賜李繼捧姓名趙保忠。授節度使。命管夏銀綬宥靜五州。使圖

○上、李繼捧に姓名を趙保忠と賜ひ、節度使を授け、命じて夏・銀・綬・宥・靜の五州を管して、繼遷を圖らしむ。繼遷降る。姓名を趙保吉と賜ふ。保吉、復邊に寇す。李繼隆に命じて之を討たしむ。保忠言ふ、己に保吉と仇を解く。乞ふ兵を罷

繼遷。繼遷降。賜姓名趙保吉。保吉復寇邊。命李繼隆討之。保忠言。已與保吉解仇。乞罷兵。上怒。命繼隆先移兵討之。繼隆入夏州。檄送保忠於闕下。保吉尋亦請降而復叛。命繼隆討之。

めんと。上怒り、繼隆に命じて先づ兵を移して之を討たしむ。繼隆、夏州に入り、保忠を闕下に檻送す。保吉、尋ぎて亦降を請ひ、而して復叛す。繼隆に命じて之を討たしむ。

● 中なほりを掃したり ● 檻車に入れて送る

蜀自既平之後。府庫之物。悉載歸內府。土狹民稠。有司不無賦外之科。王小波起爲盜。小波死。李順繼之。攻陷成都。僭號蜀王。上命王繼恩討擒之。蜀平。

○蜀既に平ぎしより後、府庫の物悉く載せて内府に歸す。土狹く、民稠く、有司、賦外の科無きにあらず。王小波、起りて盜を爲す。小波死して、李順之に繼ぎ、成都を攻陥し、蜀王と僭號す。上、王繼恩に命じ、討ちて之を擒へしむ。蜀平く。

● 城内の府庫に送る ● 規定の賦税以外の取立物

交趾丁璉卒。大校黎桓囚其宗族。而專其國。上初命討之。無功。已而桓率貢。竟以桓爲交趾郡王。時霖潦過度。上曰。朕於刑獄盡心。安得積陰之譴。寇準越班對言。某州局吏。侵官錢。若干。於法爲小過。陛下殺之。王淮參政王沔之弟。盜錢數百萬。於法爲大愆。陛下以沔故。務相容蔽。如此而曰刑獄盡心。如之何。無積陰之譴。上即日誅淮。罷沔。俄而雨止。

○交趾の丁璉卒す。大校黎桓、其宗族を囚へて其國を專らにす。上、初め命じて之を討たしむ。功無し。已にして桓、奉貢す。竟に桓を以て交趾郡王と爲す。○時に霖潦、度に過ぐ。上曰く、朕、刑獄に於て心を盡す。安んぞ積陰の譴を得たる。寇準、班を越えて對へて言ふ、某州の局吏、官錢を侵すこと若干。法に於て小過と爲す。陛下之を殺せり。王淮は、參政王沔の弟なり。錢數百萬を盜む。法に於て大愆と爲す。陛下、沔の故を以て、務めて相容し蔽ふ。此の如くにして刑獄に心を盡すと曰ふ。之を如何ぞ積陰の譴無からんやと。上、即日、淮を誅し、沔を罷む。俄にして雨止みぬ。

● なが雨 ● 陰氣の積りてなれる長雨の天 ● 己の罪順を越えて ● 大愆

○上崩す。在位二十二年。改元する者五。曰く太平興國、曰く雍熙、端拱、淳化。

十二年。改元者五。曰太平興國。曰雍熙。端拱。淳化。至道。壽五十九。薛居正。沈淪。趙普。宋琪。李昉。呂蒙正。張齊賢。呂端等。相繼爲相。普凡再入再罷。尋薨。普初以史道。開。寡。學。術。太祖嘗勸以讀書。普遂手不釋卷。每三朝有大議。輒闕戶自啓。一篋取一書。閱之。及卒。家人

至道。壽五十九。薛居正。沈淪。趙普。宋琪。李昉。呂蒙正。張齊賢。呂端等。相繼ぎて相と爲る。普。凡そ再び入りて再び罷めらる。尋いで薨す。普。初め史道を以て聞え、學術寡し。太祖、嘗て勸むるに讀書を以てす。普、遂に手に巻を釋かず。朝に大議有る毎に、輒ち戸を闔ち、自ら一篋を啓き、一書を取りて之を閱す。卒するに及び、家人其篋を見れば、則ち論語也。嘗て上に謂ひて曰く、臣に論語一部有り。半部を以て太祖を佐けて天下を定め、半部を以て陛下を佐けて太平を致せりと。蒙正晩に出づ。嘗て普と並びに相たり。普、甚だ之を推す。蒙正嘗て冊子を夾袋の中に置き、四方人才の姓名を疏して以て選用を待つ。初め太祖、嘗て張齊賢を以て上に屬す。齊賢の進士に擧げらるゝに至り、上、之を上第に置かんと欲す。而るに有司其名を第して下に在り。乃ち詔して、一榜特に通判を與ふ。卒に大に用ひらるゝに至れり。呂端、相と爲る。人謂ふ、呂相事を作して糊塗すと。上之を知りて曰く、端、小事は糊塗すれど、大事は糊塗せず

見其後則論語也。嘗謂上曰。臣有論語一部。以半部佐太祖。定天下。以半部佐陛下。致太平。蒙正晩出。嘗與普並相。普甚推之。蒙正嘗置冊子夾袋中。疏四方人才姓名。以待選用。初太祖嘗以張齊賢屬上。至齊賢舉進士。上欲置之。上第。而有司第其名在下。乃詔一榜特與通判。卒至大用。呂端爲相。人謂呂相作事糊塗。上知之曰。端小事糊塗。大事不糊塗。自上即位以來。以小入爲相者。虛多遜一人而已。太子立。是爲眞宗皇帝。

と。上、位に即きてより以來、小人を以て相と爲し、は、盧多遜一人のみ。太子立つ。是を眞宗皇帝と爲す。

● 事務の敏活 ● 晩年に出身す ● はまらぶくる ● 事前に出づ、六七四頁を見よ ● 齊賢の名を配したる進士の本札一枚に特に京官通判の役を授く ● コツトツとも調ず。曖昧にごまかして問にははず

眞宗皇帝。初名元侃。封襄王。有舉人楊礪。嘗夢至一大殿。有下坐殿

眞宗皇帝

眞宗皇帝、初めの名は元侃。襄王に封ぜらる。舉人楊礪といふもの有り、嘗て夢に一大殿に至る。殿上に坐する者有り、之に語りて曰く、我は汝の主に非ず。來和天尊は汝の主也と。指し示して之に謁せしむ。礪、後進士第一たり。入り

上二者語之曰。我非汝主。來和天尊汝主也。指示令謁之。嗣後進士第一。入爲襄王府記室。既謁。如夢中所見。太宗嘗遣三相者詣襄王。及門而返曰。王門所役皆將相也。王可知矣。立爲太子。至是卽位。更三名恆。

て襄王府の記室と爲る。既に謁すれば、夢中見る所の如し。太宗嘗て相者を遣して襄王に詣らしむ。門に及び返りて曰く、王の門は厮役も皆將相也、王は知る可しと。立ちて太子と爲る。是に至りて位に即き、名を恆と更む。

● 道家の奉ずる神の名 ● 書き役 ● 所は新を折る者

咸平二年契丹入寇。上親征。至大名府。而還。三年。益州卒王均反。僭號大蜀。以雷有終知州。討擒之。益州平。范廷召擊

○咸平二年、契丹入寇す。上、親征し、大名府に至りて還る。○三年、益州の卒王均反し、大蜀と僭號し、雷有終を以て州に知とす。討ちて之を擒にす。益州平ぐ。○范廷召、契丹を撃ち、援を高陽關の都部署康保裔に求む。亟に之に赴く。廷召潛に通る。保裔爲に圍まれ、力戦して之に死す。

契丹。求援於高陽關都部署康保裔。亟赴之。廷召潛通。保裔爲所圍。力戰死之。

李繼遷。先朝奪所賜姓名。寇邊不已。攻陷靈州。西涼六合酋長潘羅支。乞會王師討之。繼遷攻陷西涼府。潘羅支要而擊之。繼遷中流矢。死於靈州之境。其子德明請降。復賜姓趙。後封爲西平王。楊嗣勳。楊延朗。智勇善戰。加關練使。虜懼之。曰。楊六郎。

○李繼遷、先朝賜ふ所の姓名を奪はれ、邊に寇して已まず。攻めて靈州を陷る。西涼六合の酋長潘羅支、乞ひて王師に會して之を討つ。繼遷攻めて西涼府を陷る。潘羅支要して之を撃つ。繼遷流矢に中りて靈州の境に死す。其子德明陣を請ふ。復姓を趙と賜ふ。後封せられて西平王と爲る。○楊嗣勳・楊延朗は智勇にして善く戦ふ。團練使を加ふ。虜之を懼り、目して楊六郎と曰ふ。

● 趙保吉といふ姓名 ● 官職の名

景德元年。契丹主與其母蕭氏。大舉入寇。中外震駭。

景德元年、契丹主、其母蕭氏と大舉して入寇す。中外震ひ駭く。參政陳堯叟は蜀の人なり。蜀に幸せんことを請ふ。王欽若は江南の人なり。江南に幸せん

參政陳幾叟蜀人。請幸江南。王欽若、江南人。請幸江南。上以問宰相寇準。準問誰畫此策。上曰：卿姑斷其可否。勿問也。準曰：臣欲得獻策之臣。斬以伐上耳。遂定親征之議。上駐蹕韋城。尋至衛南。契丹擁兵抵澶州。圍合三面。李繼隆等出禦之。契丹撻覽中

ことを請ふ。上以宰相寇準に問ふ。準問ふ、誰か此策を畫せる。上曰く、卿姑く其可否を斷ぜよ。問ふこと勿れ。準曰く、臣、策を獻するの臣を得て、斬りて以て鼓に斃り、然る後北伐せんと欲するのみと。遂に親征の議を定む。上、蹕を韋城に駐め、尋ぎて衛南に至る。契丹兵を擁して澶州に抵り、三面を圍合す。李繼隆等出でて之を禦ぐ。契丹の撻覽、弩に中りて死す。大に挫けて退却し、敢て動かす。寇準力めて上を勸めて河を渡らしむ。殿前帥高瓊も亦力め贊く。猶豫の間、瓊衛士を麾きて、鞏を進めて曰く、陛下若し河を過ぎざれば、百姓、考妣を喪ふが如けん。梁適之を呵す。瓊怒りて曰く、君が鞏此時尚ほ人の失禮を責む。何ぞ一詩を賦して虜を退けざるかと。遂に上を擁して以て渡る。既にして澶州に至り、北城に登り、黃旗幟を張る。諸軍皆萬歲と呼ぶ。聲數十里に聞え、契丹氣奪はる。

● 連れ去らんことをす、むる也 ● 所謂出陣の血祭を爲さんと也 ● 彼れ此れとしばらくためらふ間に ●

父母の喪に居るが如く力を活してまげき慰まん ● 近侍の文臣輩通、その禮を失するをしかる

辱死。大挫退却。不敢動。寇準力勸上渡河。殿前帥高瓊亦力贊。瓊豫聞瓊應衛士進聲曰。陛下若不遇河。百姓如喪考妣。梁適之呵之。瓊怒曰。君輩此時尚責人失禮。何不賦一詩退虜耶。遂擁上以渡。既至澶州。登北城。張黃旗幟。諸軍皆呼萬歲。聲聞數十里。契丹氣奪。

先是王繼忠者陷虜。嘗言和好之利。故雖大舉亦遣使以繼忠書來。上命曹利用報之。至是利用與契丹使者韓杞偕來。請世宗所取關南故地。上曰。地必不可得。寧與金

是より先王繼忠といふ者虜に陷る。嘗て和好の利を言ふ。故に大舉すと雖も亦使を遣はし繼忠の書を以て來らしむ。上、曹利用に命じて之に報せしむ。是に至り利用、契丹の使者韓杞と偕に來り、世宗が取りし所の關南の故地を請ふ。上曰く、地は必ず得可からず。寧ろ金帛を與へて以て和せんと。準の意亦與ふるを欲せず。且畫策して以て進めて曰く、此の如くならば則ち百年の無事を保つ可し。然らざれば數十歳の後戎復た心を生ぜん。準は蓋し之を擊ちて雙輪をも返らざらしめんと欲せしなり。上曰く、數十歳の後は當に能く之を禦ぐ者有るべし。吾、生靈の重ねて困しむに忍びず。姑く其和を聽かんと。遂に再び利

帛以和準意亦不欲與。且畫策以進曰。如此則可保。百年無事。不然數十歲後或復生心。準蓋欲擊之。使隻輪不返。上曰。數十歲後當有能禦之者。吾不忍生靈重困。姑聽其和。遂再遣利用往。利用請賂金帛之數。上曰。必不得已。雖百萬亦可。準召語之曰。雖有勅旨。不得過三十萬。如過此數。勿來見準。準斬汝矣。利用卒以絹二十萬。銀十萬。定和議。南朝爲兄。北朝爲弟。交誓約。各解兵歸。

用をして往かしむ。利用歳ごとに賂ふ金帛の數を請ふ。上曰く、必ず已むを得ずんば百萬と雖も亦た可なりと。準召して之に語りて曰く、勅旨有りと雖も三十萬に過ぐるを得ず。如し此數を過ぎば、來りて準を見る勿れ。準汝を斬らんと。利用卒に絹二十萬、銀十萬を以て和議を定め、南朝を兄とし、北朝を弟とし、交々誓約し、各々兵を解きて歸る。

● 大いに兵を擧げしかども ● どうありても與ふるを得べからず ● 之を擊ちて賂(ミナゴロシ)にし、車の片輪だにも國へは返さじと思ひし也 ● 人民 ● 中國 ● 契丹

準初發京師。命朝士出知諸州。皆於殿廊受勅。戒之。

準、初め京師を發せしとき、朝士に命じて出で、諸州に知たらしめ、皆殿廊に於て勅を受けしむ。之を戒めて曰く、百姓は皆兵にして、府庫は皆財なり。汝に

曰。百姓皆兵。府庫皆財。不貴汝浪戰。但失一城一壁。當以軍法從事。恐欽若沮親征之議。以其有智且有福。出欽若知天雄軍。契丹至城下。欽若閉門。東手無策。修齋誦經而已。上還自澶淵。待準極厚。欽若歸深恨準。嘗退朝。上目送準。欽若進曰。陛下敬準。爲其有社稷功邪。城下之盟。春秋小國所恥也。上愀然。欽若每日澶淵之役。準以陛下爲孤注。上待準遂寢薄。尋罷相。

浪りに戰ふを責めず。但だ一城一壁を失はば、當に軍法を以て事に従ふべしと。欽若が親征の議を沮まんことを恐れ、其智有り且福有るを以て、欽若を出して天雄軍に知たらしむ。契丹城下に至る。欽若、門を閉ぢ、手を束ねて策なく、齋を修し、經を誦するのみ。上、澶淵より還り、準を待つこと極めて厚し。欽若歸りて深く準を恨む。嘗て朝より退くや、上、準を目送す。欽若進みて曰く、陛下の準を敬するは、其社稷の功有るが爲か。城下の盟は、春秋の小國も恥づる所なりと。上、愀然たり。欽若毎に曰く、澶淵の役、準、陛下を以て孤注と爲すと。上、準を待つこと遂に寢薄し。尋ぎて相を罷む。

● 處分すべし ● ものいみして佛經を誦す ● 賭博にありたりの錢をかけて勝負を決する世錢をいふ

王旦を以て同平章事とす。旦は王祐の子也。太祖嘗て祐を遣して事を按せし

章事。且王祐之子也。太祖嘗遣祐接事。謂祐還與王溥官職。祐不徇太祖意。竟不任用。祐曰。祐不做。兒子二耶必做。植三上心深屬之。

む。謂ふ、祐還らば王溥の官職を與へんと。祐、太祖の意に徇はず。竟に大に用ひられず。祐曰く、祐、做らすとも兒子二郎は必ず做らんと。三槐を庭に植ゑて曰く、吾が後世必ず三公と爲る者有あらんと。是に至りて、且、果して相と爲る。深沈にして徳望有り。能く大事を斷ず。上、心深く之に屬す。

● 高官とならずとも ● 三本の五んじゆのき ● 心の内に深く頼みに思へり

二耶必做。植三槐于庭。曰。吾後世必有爲三公者。至是且果爲相。深沈有徳望。能斷大事。

趙德明嘗以民饑。上表乞糧。羣臣皆請責之。且曰。臣欲詔德明云。塞上儲糧不可與。已於京師積百萬。可三

趙德明嘗て民の饑るたるを以て、表を上りて糧を乞ふ。羣臣皆之を責めんと請ふ。且曰く、臣、徳明に詔せんと欲す。云く、塞上の儲糧は與ふ可からず。已に京師に於て百萬を積む。自ら衆をして來り取らしむ可しと。徳明再拜して詔を受けて曰く、朝廷人有りと。上、既に欽若の言を入れ、數々欽若に問ふ、何を以て恥を刷はんと。欽若、上の兵を用ふるを厭ふを知り、謬りて曰く、幽

自遣衆來取。徳明再拜受。詔曰。朝廷有人。上既入。欽若之言。數問。欽若何以刷恥。欽若知。上厭用兵。謬曰。取幽薊乃可。上令思其次。乃請封禪。以鎮四海。誇示夷狄。又言。

薊を取らば乃ち可なりと。上、其次を思はしむ。乃ち請ふ。封禪して以て四海を鎮服し、夷狄に誇示せんと。又言ふ、封禪は當に天瑞を得べし。前代、人力を以て之を爲す有り。河圖洛書果して此有らんや。聖人神道を以て教を設けしのみと。是に於て、大中祥符より以來、數々天書有りて降る。東のかた泰山に封じ、西のかた后土を汾陰に祀る。又趙氏の祖九天司命天尊有りて降る。天下に天慶觀を立て、聖祖殿を置き、聖祖の名を立明を諱み、京師に玉清昭應宮を作る。且も其事を止むる能はず。

● 下の如き詔を與へんとす ● 邊塞にたくはへある兵糧 ● 朝廷に賢人あり

封禪當得天瑞。前代有以人力爲之。河圖洛書果有此邪。聖人以神道設教耳。於是自大中祥符以來。數有天書降。東封泰山。西祀后土。於汾陰。又有趙氏祖九天司命天尊降。天下立天慶觀。置聖祖殿。諱聖祖名玄朗。京師作玉清昭應宮。且不能止其事。

上在位二十

○上在位二十六年。元年、呂端罷められてより後、張齊賢・李沆・呂蒙正・向敏中。

六年。自元年。張
 呂端罷。後。張
 齊賢。李沆。呂
 蒙正。向敏中。
 畢士安。寇準。
 王旦。相繼爲
 相。惟且居位
 十一年。當李
 沆爲相時。且
 甫參政。沆喜
 讀論語。嘗曰。
 爲宰相。如論
 語中節用而
 愛人。使民以
 時。兩句。尙不
 能行。聖人之
 言。終身誦之
 可也。沆日取
 四方水旱盜
 賊。奏之。且謂

畢士安・寇準・王旦、相繼ぎて相と爲る。惟り且、位に居ると十一年。李沆の相たりし時に當りて、且、甫めて參政たり。沆、喜びて論語を讀む。嘗て曰く、宰相と爲りて、論語中の、用を節して人を愛し、民を使ふに時を以てすといふ兩句の如き、尙行ふ能はず。聖人の言は、終身之を誦して可也と。沆、日々に四方の水旱盜賊を取りて之を奏す。且謂ふ、細事なり、上聽を煩すに足らずと。沆曰く、人主少年なり、當に人間の疾苦を知らしむべし。然らざれば、血氣方に剛なり、意を聲色犬馬に留めずんば、則ち土木甲兵禱祠の事作らん。吾老いたり、見るに及びじ。此れ參政他日の憂也と。大中祥符に及んで、封禪祠祀土木並び興る。且、乃ち歎じて曰く、李文靖は眞の聖人也と。大禮有る毎に、且、輒ち首相を以て天書を奉じ以て行く、常に愜愜として樂まず。去らんと欲すれば、則ち上之を遇すること厚し。位に薨するに及びて遺令すらく、髮を削り縮を披せて以て斂せよと。議者謂ふ、且、君を得たれども、正を以て自ら終る能はざりきと。或は之

細事。不足煩
 上聽。沆曰。人
 主少年。當使
 知人閒疾苦。
 不然。血氣方
 剛。不留意聲
 色犬馬。則土
 木甲兵禱祠
 之事作矣。吾
 老不及見。此
 參政他日之
 憂也。及大中
 祥符。封禪祠
 祀土木並興。
 且乃歎曰。李
 文靖眞聖人
 也。每有大禮。
 且輒以首相。
 奉天書以行。
 常愜愜不樂。

を馮道に比すといふ。張詠嘗て言ふ、吾が榜中人を得ること最も多し。謹重にして徳望あるは、李文靖に如くは無く、深沈才徳天下を鎮め服するは、王公に如くは無く、面折廷争して素より風采有るは、寇公に如くは無し。方面の寄に當りては、則ち詠、敢て辭せずと。且の世に當りて、王欽若已に相たり。欽若罷められ、寇準再び入りて相たり。參政丁謂、準に事へて甚だ謹む。嘗て會食せしとき、美準の鬚を汚す。謂、起ちて之を拂ふ。準、笑ひて曰く、參政は國の大員なり、乃ち官長の爲に鬚を拂はんやと。謂甚だ愧ぢ恨む。準罷められ、李迪・丁謂、相と爲る。準、遠く貶せられ、迪罷められ、謂獨り相たり。時に上已に疾有り、昏眩す。準の罷め貶せられたる如き、皆謂、中宮に白して之を行ひ、上は知らざりき。尋ぎて崩す。年五十五。位に在りて改元する者五。曰く咸平・景德。曰く大中祥符。曰く天禧・乾興。太子立つ。是を仁宗皇帝となす。

●心を善樂・女色・犬馬などに留めずとすれば ●墨染の衣 ●君の信任を得たれど正道を以て身を終る能は

欲去則上遇之厚。及薨于

ザリキ 聖人の名札 一方を顧し一面に當るの寄託

位。遺令制髮披緇以數。議者謂且得君而不能以正自終。或比之馮道云。張詠嘗言。吾榜中得人最多。謹重有德望。無如李文靖。深沈才德。鎮服天下。無如王公。而折廷爭。素有風采。無如寇公。當方面之寄。則詠不敢辭。當且之世。王欽若已相。欽若罷。寇準再入相。參政丁謂事準甚謹。嘗會食。羹汚準鬚。謂起拂之。準笑曰。參政國大臣。乃爲官長拂鬚邪。謂甚愧恨。準罷。李迪。丁謂爲相。準遠貶迪罷。謂獨相。時上已有疾昏眩。如準罷。皆謂自中宮行。之。上不知矣。尋崩。年五十五。在位改元者五。曰咸平。景德。曰大中祥符。曰天禧。乾興。太子立。是爲仁宗皇帝。

仁宗皇帝

仁宗皇帝。名禎。母李氏。章獻明肅劉皇后子之。眞宗得皇子已晚。始生晝夜啼

仁宗皇帝。名は禎。母は李氏。章獻明肅劉皇后之を子とす。眞宗、皇子を得ること已に晩し。初め生れしとき、晝夜啼きて止まず。道人あり言ふ、能く兒啼を止めんと。召し入るれば、則ち曰く、叫ぶ莫かれ、叫ぶ莫かれ、何ぞ當初の笑ふ莫きに似かんと。啼くこと即ち止む。蓋し謂ふ、眞宗嘗て上帝を顧びて嗣

不止。有道人一。言能止兒啼。召入。則曰。莫。叫莫。何似。當初莫。笑。啼。即止。蓋謂眞宗嘗顧上帝。祈嗣。問羣仙。誰當往者。皆不應。獨赤脚大仙一笑。遂命降爲眞宗子。在宮中。好赤脚。其駭也。自昇王。爲太子。年十三。即位。劉太后垂簾同聽政。丁謂用事。竄寇準爲雷州司

を祈る。羣仙に問ふ、誰か當に往くべき者ぞと。皆應ぜず。獨り赤脚大仙一笑す。遂に命じて、降りて眞宗の子と爲らしむ。宮中に在りて、赤脚を好むは其驗也。昇王より太子と爲り、年十三、位に即く。劉太后、簾を垂れて同じく政を聽く。丁謂、事を用ふ。寇準を竄して雷州の司戸と爲す。參政王曾、密に奏すらく、謂、禍心を包藏し、眞宗の山陵擅に皇堂を絶地に移すと。遂に謂を罷め、貶して崖州の司戸に至らしむ。謂、初め學士に命じて、準の責詞を草するに、春秋無將。漢法不道を用ひて證事と爲さしむ。謂の竄せらるゝに及び、學士乃ち其語を用ふ。人之を快とす。準を逐ふ時に方り、京師語りて曰く、天下の寧きを得んと欲せば、當に眼中の丁を抜くべく、天下の好みを得んと欲せば、寇老を召すに如くは莫しと。然れども準竟に北に還るに及ばずして卒す。王曾、相と爲り、王欽若再び相たり。欽若卒す。張知白相たり。知白卒す。張士遜相たり。士遜罷められ、呂夷簡相たり。惟、王曾、天聖の初より相位に居り、是

月。參政王曾
密奏。謂包藏
禍心。眞宗山
陵。擅移。皇堂
於絕地。遂罷
謂。貶至崖州
司戶。謂初命
學士。草準責
詞。令下用。春秋
無將。漢法不
道。爲證事。及
謂竄。學士乃
用其語。人快
之。方逐準時。京師語曰。欲得天下寧。當拔眼中丁。欲得天下好。莫如召寇老。然準竟不及北還而卒。王曾爲相。王欽若再相。欽若卒。張知白相。知白卒。張士遜相。士遜罷。呂夷簡相。惟王曾自天聖初居相位。至是七年而罷。曾初舉進士。青州發解。禮部廷試。皆第一。人曰。狀元三場。喫著不盡。曾曰。曾平生之志。不在溫飽。眞宗末。正色立朝。朝廷賴以爲重。作相日。所進退士。莫有不知者。或問其故。曾曰。恩欲歸己。怨使誰當。

に至りて七年にして罷めらる。曾、初め進士に擧げられ、青州の發解、禮部、廷試、皆第一なり。人曰く、狀元三場、喫著して盡きずと。曾、曰く、曾、平生の志、温飽に在らずと。眞宗の末、色を正しくして朝に立つ。朝廷頼りて以て重きを爲す。相と作るの日、進退する所の士、知る者ある莫し。或ひと其故を問ふ。曾曰く、恩を己に歸せんと欲せば、怨誰をして當らしめんと。

● 下文の「一笑才」に應ず ● 呼也 ● 天帝が ● はぎをあらはすこと ● むはん心 ● 水石多くして地脈斷絶せる地 ● 罪状を責むる書 ● 春秋の無將と漢法の不道といふ語を引用して準の事を證する材料とせり。春秋に「君臣無將將而必誅焉」の語あり、將に叛せんとする程あれば其發覺を待たずして誅す也、漢法不道とは大逆無道の意 ● 丁は釘也、目の中の釘即ち邪眼物 ● 寇の試験、禮部の試験、殿前の試験 ● 狀元は進士第一の稱三場所の試験皆第一等なれば、生涯衣食に窮することなかるべし ● 選衣餉食

交趾黎桓。景
德中卒。子龍
延殺其兄龍
鉞。而自立。來
貢。賜名全忠。
大中祥符間。
全忠卒。子幼。
弟爭立。大校
李公蘊遂殺
之而自立。至
是公蘊卒。子
德政立。來告
喪。封交趾郡
王。契丹主隆
緒。號聖宗。子
宗眞立。西夏
趙德明。卒。
子元昊立。

○交趾の黎桓、景德中に卒す。子龍延其兄龍鉞を殺して自立し、來貢す。名を全忠と賜ふ。大中祥符の間、全忠卒す。子幼なり。弟立つを爭ふ。大校李公蘊、遂に之を殺して自立す。是に至りて公蘊卒す。子德政立ち、來りて喪を告ぐ。交趾郡王に封ぜらる。○契丹主隆緒、殂す。聖宗と號す。子宗眞立つ。○西夏の趙德明、卒す。子元昊立つ。

● 眞宗の景德三年なり ● 綱目に「至忠」に作る、從ふべし

劉太后以上
爲己子而上
母李氏默默
處先朝續御
中未嘗自異
人亦長后不

○劉太后、上を以て己の子と爲す。而して上の母李氏默默として先朝の續御の中に處りて、未だ嘗て自ら異にせず。人亦后を畏れて敢て言はず。疾革まる、乃ち位を宸妃に進めて薨す。宰相呂夷簡太后に奏す。宜しく禮を備へて以て葬るべし。曰く、他日、夷簡曾て説き來らずと道ふ莫れと。宸妃卒し、一年を踰えて太后崩す。

敢言疾革。乃進位宸妃。而薨。宰相呂夷簡奏太后。宜備禮以葬。曰。他日莫道夷簡不曾說來。宸妃卒。論一年太后崩。稱制十一年。上始親政。先是呂夷簡張士遜並相。夷簡罷。李迪相。而士遜爲首相。無所發明。而罷。夷簡復相。迪罷。王曾復相。而權在夷簡。夷簡之初制。稱制十一年。上始親政。先是呂夷簡張士遜並相。夷簡罷。李迪相。而士遜爲首相。無所發明。而罷。夷簡復相。迪罷。王曾復相。而權在夷簡。夷簡之初

制を稱する二十一年。上始めて政を親らす。是より先呂夷簡・張士遜並に相たり。夷簡罷められ、李迪相たり。而して士遜首相たり。發明する所無くして罷めらる。夷簡、復た相たり。迪罷む。王曾復た相たり。而して權は夷簡に在り。夷簡の初め罷められしは郭皇后の言を以てす。復た入るに及びて、后尙美人が寵を爭ふの隙有り。遂に郭皇后を廢す、夷簡力有り。臺諫孔道輔・范仲淹爭へども得ずして出づ。仲淹、朝に還りて待制と爲り、開封府に知たり。事を言ふこと愈々急に、數々時の政を議す。夷簡、其職を越ゆるを訴ふ。罷めて饒州に知たらしむ。館閣余靖・尹洙之を爭ふ。皆坐して貶せらる。歐陽修諫官高若訥の諫めざるを責め、謂ふ、人間羞恥の事有るを知らずと。若訥、其書を奏す。亦た貶せらる。蔡襄、四賢一不肖の詩を作る。四賢は仲淹・洙・靖・修を指し、不肖は若訥を指す也。王曾、對に因りて夷簡が賂を納れて恩を示すを斥く。夷簡・曾並に罷めらる。王隨・陳堯佐之に代る。建明する所無きを以て罷め

張士遜・章得象之に代る。

●上の實母李氏、一言の不平もなく欲して漢宗のきまきの中にもまじり居り、上の母として特別に威張る如き事なかりき ●夷簡の言、他日夷簡云々の夷簡は自ら名いよ也 ●建明開明する所

罷也。以郭皇后之言及復入。而后有尙美人爭寵之隙。遂廢郭后。夷簡有力焉。臺諫孔道輔。范仲淹爭。不得而出。仲淹還朝爲待制。知開封府。言事愈急。數議時政。夷簡訴其越職。罷知饒州。館閣余靖。尹洙爭之。皆坐貶。歐陽修責諫官高若訥不諫。謂不知人。朋有羞恥事。若訥奏其書。亦貶。蔡襄作四賢一不肖詩。四賢指仲淹。洙。靖。修。不肖指若訥也。王曾因對斥夷簡納賂示恩。夷簡。曾並罷。王隨。陳堯佐代之。以無所建明而罷。張士遜。章得象代之。

趙元昊。據有夏銀綏宥靈鹽會勝甘涼瓜沙肅州之地。居興州。阻賀蘭山爲固。僭號大夏皇帝。入寇西邊。騷然。范雍經制

○趙元昊、夏・銀・綏・宥・靈・鹽・會・勝・甘・涼・瓜・沙・肅州の地を據有し、興州に居り、賀蘭山を阻して固と爲し、大夏皇帝と僭號して入寇す。西邊騷然たり。范雍、西夏を経略す。元昊が將に延州を攻めんとするを聞き、懼るゝこと甚しく、門を閉ぢて救はず。劉平戰ふ。中官黃德和、平、賊に降ると謬奏し、兵を以て其家を圍み、其族を收めんと議す。富弼言ふ、平、環慶より來り援ひ、姦臣救はず。

略四夏。聞元昊將攻延州。懼甚。閉門不救。劉平戰中。官黃德和誣平降賊。以兵圍其家。議收其族。富弼言。平自環慶來援。姦臣不救。故敗。屬賊而死。德和誣人。冀免。坐腰斬。范雍罷。時軍興多事。張士遜無所補。諫官韓琦上疏曰。政事府豈養病坊邪。於是士遜致仕。呂夷簡復相。用韓琦。范仲淹爲邊帥。仲淹嘗兼知延州。夏人相戒曰。毋以延州爲意。小范老子胸中自有數萬甲兵。不比大范老子可欺也。邊人爲之

故に敗れ、賊を罵りて死す。徳和人を誣ひて免れんとを冀ふなりと。坐して腰斬せらる。范雍罷めらる。時に軍興りて多事なれども、張士遜補ふ所無し。諫官韓琦上疏して曰く、政事府は豈養病坊ならんやと。是に於て士遜致仕す。呂夷簡復た相たり。韓琦・范仲淹を用ひて邊帥と爲す。仲淹、嘗て兼ねて延州に知たり。夏人、相戒めて曰く、延州を以て意と爲す毋れ。小范老子、胸中自ら數萬の甲兵有り。大范老子の欺く可きに比せざる也と。邊人之が語を爲して曰く、軍中に一韓有り。西賊之を聞きて、心膽寒し。軍中一范有り。西賊之を聞きて膽を驚破すと。昊の大に逞しくするを得ざりしは、蓋し琦・仲淹の力を宣ぶること多きに居りしに藉れるなり。

- 諫官 韓琦をさす
- 邊城守備の將
- 延州を取らんとの事をいふ勿れ
- 范淹を指す
- 范雍を指す

語曰。軍中有二韓。西賊聞之。心膽寒。軍中有二范。西賊聞之。驚破膽。昊之不得大逞。蓋藉琦仲淹之宣力居多。

契丹乘朝廷有西夏之撓。遣泛使求石晉所割周世宗所取關南地。知制誥富弼接待時夷。簡任事。人莫敢抗。弼數侵之。夷簡欲因事罪弼。以弼報使。弼至。往返論難。力拒。其割地。使還。再遣。而國書故爲異同。夷簡欲以陷弼。弼疑而啓觀。乃復回奏。而責夷簡。易書而往。增歲賂銀絹各十萬。定和議而還。

契丹、朝廷の西夏の撓有るに乗じて、泛使を遣して、石晉の割きし所、周の世宗の取りし所の關南の地を求めしむ。知制誥富弼接待す。時に夷簡事に任じ、人敢て抗する莫し。弼、數々之を侵す。夷簡事に因りて弼を罪せんと欲し、弼を以て報使とす。弼至り、往返論難力めて其の地を割くを拒む。使し還れば再び遣る。而も國書故らに異同を爲す。夷簡以て弼を陷れんと欲せしなり。弼疑ひて啓き觀る。乃ち復た回奏し、夷簡を面責し、書を易へしめて往き、歲賂銀絹各々十萬を増し、和議を定めて還る。

- 常使外の臨時の使者。原註は泛使之使とす
- 反抗す
- 返報の使者
- 年々の賂

呂夷簡求罷。上遂欲更天。下弊事增。諫官員命王素。歐陽修。余靖。蔡襄。供諫院。職以韓琦。范仲淹。爲樞密副使。召夏竦。爲樞密使。諫官論罷竦。以杜衍代之。國子直講石介喜曰。此盛德事也。乃作慶曆聖德詩。有曰。衆賢之進。如芴斯拔。大姦之去。如距斯脫。大姦指

○呂夷簡罷めんとを求む。上、遂に天下の弊事を更めんと欲す。諫官の員を増し、王素・歐陽修・余靖・蔡襄に命じて、諫院の職に供せしめ、韓琦・范仲淹を以て樞密副使と爲し、夏竦を召して樞密使と爲す。諫官、論じて竦を罷め、杜衍を以て之に代ふ。國子直講石介喜びて曰く、此れ盛徳の事也。乃ち慶曆聖徳の詩を作る。曰へる有り、衆賢の進むは芴の斯に抜くるが如く、大姦の去るは距の斯に脱するが如しと。大姦は竦を指す也。仲淹・琦、適々陝西より來り、道中に詩を得たり。仲淹、股を拊ちて琦に謂ひて曰く、此怪鬼輩の爲に事を壞らると。竦、因りて其黨と論を造り、衍等を目して黨人と爲す。歐陽修乃ち朋黨論を作りて之を上る。略に曰く、小人は朋無し、惟だ君子のみ之有り。小人の利を同じくする時、暫く朋を爲す者は偽也。其の利を見るに及びて先を争ひ、或は利盡きて情疎に、反りて相賊害す。君子身を修むれば則ち道を同じくして相益し、國に事ふれば則ち心を同じくして共に濟ふ。終始一の如し。此れ君子の朋也。君たる

疎也。仲淹琦適自陝西來。道中得詩。仲淹拊股謂琦曰。爲此怪鬼輩。環事。竦因與其黨造論。目衍等爲黨人。歐陽修乃作朋黨論。上之。略曰。小人無朋。惟君子有之。小人同利之時。暫爲朋者。偽也。及其見利而爭先。或利盡而情疎。反相賊害。君子修身則同道。而相益。事國則同心。而共濟。終始如一。此君子之朋也。爲君者。但當退小人之僞朋。進君子之眞朋。則天下治矣。

者、但だ當に小人の僞朋を退けて、君子の眞朋を進むべし。則ち天下治まらんと。
 ① 一本のちがやを引き抜くに、根相連りて根本も同時に抜くるが如し ② 駒のけづめのぬけ落ちて他の駒の背を傷ず能はざるが如し ③ 怪しき鬼の如き夏竦の輩 ④ 友情うとくなる

仲淹遷參政。富弼爲樞副。上既擢仲淹等。每進見。必以太平一貫之。開天章閣。召對。賜坐。給筆札。仲淹等皆惶恐。退列。奏十事。一曰。明二

○仲淹參政に遷り、富弼、樞副と爲る。上、既に仲淹等を擢んで、進見する毎に、必ず太平を以て之を責め、天章閣を開きて召對し、坐を賜ひ、筆札を給す。仲淹等皆惶恐す。退きて十事を列奏す。一に曰く、黜陟を明にせよ。二に曰く、僥倖を抑へよ。三に曰く、貢舉を精しくせよ。四に曰く、官長を擇べ。五に曰く、公田を均しくせよ。六に曰く、農桑を厚くせよ。七に曰く、武備を修めよ。八に曰く、徭役を減ぜよ。九に曰く、恩信を覃べよ。十に曰く、命令を重くせよ。

黜陟。二曰。抑。三曰。精。四曰。準。五曰。均。六曰。厚。七曰。修。八曰。減。九曰。重。十曰。重。命令。上方信。向。悉用。其說。惟武備。欲復。府兵。一說。宰相。以爲。不可。時。章。得。象。晏。殊。並。同。平。章。事。未。幾。仲。淹。宣。撫。陝。西。河。東。富。弼。宣。撫。河。北。竦。等。造。

と。上方に信向せるをもて、悉く其説を用ふ。惟だ武備、府兵を復せんと欲する一説は、宰相以て不可と爲す。時に章得象・晏殊並に同平章事たり。未だ幾くならず、仲淹、陝西・河東を宣撫し、富弼、河北を宣撫す。竦等、誘を造る。故に仲淹等朝に安んぜず、歐陽修亦た出で、河北に使す。晏殊罷めらる。杜衍同平章事たり。衍務めて僥倖を裁す。内降ある毎に、率ね寢格して行はず、詔旨を積むこと十數なれば、輒ち上の前に納る。上、嘗て諫官に語りて曰く、外人、衍が内降を封じ還すを知るか。朕宮中に在りて毎に可かざるを以て告げて止むる者封じ還す所よりも多しと。會々衍の婿蘇舜欽、進奏院に監とし、故紙を露ぎし公錢を用て、神を祀り客を會す。御史中丞王拱辰、素より衍等の爲す所を便とせず。因りて其事を攻む。獄を置きて罪を得る者數人なり。拱辰喜びて曰く、吾、一網に打ち去り盡せりと。衍、相たること七十日にして罷めらる。賈昌朝平章事兼樞密使たり。韓琦、樞副を罷められて、楊州の事に知たり。章得象罷められ、陳執中

平章事たり。昌朝罷められ、夏竦代りて樞密使と爲る。

- 條目をつらねて奏す
- 恩惠と威信とをひろくし及ぼせ
- 此人々を儲じ心の傾き向へる最中なれば
- 内意の降るもの
- 獨りつよして
- 杜衍が衆知せぬからと

誘。故。仲。淹。等。不。安。於。朝。歐。陽。修。亦。出。使。河。北。晏。殊。罷。杜。衍。同。平。章。事。衍。務。裁。僥。倖。每。內。降。率。寢。格。不。行。積。詔。旨。十。數。輒。納。上。前。上。嘗。語。諫。官。曰。外。人。知。衍。封。還。內。降。邪。朕。在。宮。中。每。以。不。可。告。而。止。者。多。於。所。封。還。也。會。衍。婿。蘇。舜。欽。監。進。奏。院。用。露。故。紙。公。錢。祀。神。會。客。御。史。中。丞。王。拱。辰。素。不。便。衍。等。所。爲。因。攻。其。事。置。獄。得。罪。者。數。人。拱。辰。喜。曰。吾。一。網。打。去。盡。矣。衍。相。七。十。日。而。罷。賈。昌。朝。平。章。事。兼。樞。密。使。韓。琦。罷。樞。副。知。楊。州。事。章。得。象。罷。陳。執。中。平。章。事。昌。朝。罷。夏。竦。代。爲。樞。密。使。

貝州卒王則反。文彦博宣撫河北。討平之。彦博入爲平章事。趙元昊慶曆初嘗因范仲淹請和。反覆數歲。竟納款復稱。

○貝州の卒王則反す。文彦博河北を宣撫す。討ちて之を平らぐ。彦博入りて平章事と爲る。○趙元昊、慶曆の初、嘗て范仲淹に因りて和を請ひ、反覆數歲に款を納れて復た臣と稱す。策命して夏國王と爲し、曩霄と名づけ、歲ごとに銀絹茶綵二十五萬五千を賜ふ。遂に復た邊に寇せず。卒す。子諒祥立つ。○陳執中、建明する所無きを以て罷めらる。○夏竦罷められ、宋庠之に代る。尋ぎて同平章

臣策命爲夏國王。名銀鬚。歲賜銀絹茶綵二十五萬五千。遂不復寇邊。卒。子諒祥立。陳執中以無所建明。夏竦罷。宋庠代之。尋同平章事。未幾罷。張貴妃兄堯佐。一日除四使。監察御史裏行唐介論之。不聽。遂劾奏。文彥博向守蜀。以燈籠錦獻貴妃。得執政。故黨堯佐。上怒。遠貶介。彥博亦求罷。龐籍平章事。

事たり。未だ幾くならずして罷めらる。○張貴妃の兄堯佐、一日、四使に除せらる。監察御史裏行唐介之を論ず。聽かれず。遂に劾奏す。文彥博向に蜀に守たりしとき、燈籠錦を以て貴妃に獻じ、執政を得たり。故に堯佐に黨すと。上、怒りて介を遠貶す。彥博亦た罷めんを求む。龐籍平章事たり。

●貝州の宣毅軍の卒の王則 ●賊寇を通じて ●いさ糸 ●彈劾上奏するやう

廣源州儂智高寇廣州。連歲陷諸州。自邕至廣西。皆被其害。命龐籍副秋青討平之。還爲樞密

○廣源州の儂智高、廣州に寇し、連歲諸州を陷れ、邕より廣西に至るまで皆其害を被る。樞密使秋青に命じて討ちて之を平けしむ。還りて樞密使と爲る。○龐籍罷めらる。○陳執中、梁適、平章事たり。適罷められ、劉沆之に代る。執中罷められ、文彥博、富弼、竝に同平章事たり。士大夫、人を得たるを相慶す。上曰く、人情此

の如し、豈に夢に賢らずやと。上嘗て王素に問ふ、孰か相と爲す可き。素曰く、惟宦官宮妾の、姓名を知らざる者、其遷に充つ可しと。上、慨然として曰く、此の如くんば、則ち富弼のみと。

●殿の高宗は夢によりて傳説を擧げ、周の文王はトによりて呂尚を得たり、今文彥博と富弼とを得たるは一般の人情之を喜ぶこと斯くの如し、豈夢とトとの故事にもまさらずやと也

使龐籍罷。陳執中、梁適、平章事。適罷。劉沆代之。執中罷。文彥博、富弼、竝に同平章事。士大夫相慶得此人。上曰。人情如此。豈不賢於夢ト哉。上嘗問王素。孰可爲相。素曰。惟宦官宮妾不知姓名者。可充其選。上慨然曰。如此則富弼耳。

契丹主宗眞。號興宗。子洪基立。交趾李德政卒。子日遵立。劉沆罷。文彥博罷。韓琦平章事。富弼罷。王安石知制誥。安

○契丹の主宗眞、殂す。興宗と號す。子洪基立つ。○交趾の李德政、卒す。子日遵立つ。○劉沆罷められ、文彥博罷められ、韓琦、平章事たり。富弼罷めらる。○王安石知制誥たり。安石、官を遷さる。毎に逃避して已まざりしが、知制誥に至りて、則ち復た官を辭せず。安石、嘗て花を賞し、魚を釣る宴に侍し、誤りて鉤餌を食ふ。已に悟りて、之を食ひ既す。上、其不情にして非を遂ぐるを以て、之を惡む。

石每遷官。遜
避不巳。至知
制詰。則不復
辭官矣。安石
嘗侍賞花釣
魚宴。誤食鈎
餌。已悟而食
之既。上以其
不情而遂非
惡之。安石有
重名。土爭向
之。惟蘇洵不
見。著辯姦論。亦
以為。不近人情。必大姦。應司馬光知諫院。進三劄。一論君德有三。曰仁。曰
明。曰武。二論御臣。曰任官。曰信賞。曰必罰。三論揀軍。又進五規。曰保業。曰惜時。曰遠謀。曰
謹微。曰務實。

安石重名有り。士爭ひて之に向ふ。惟蘇洵のみ見ず、辯姦論を著し、亦た以
爲らく、人情に近からず、必ず大姦悪あらんと○司馬光、諫院に知たり。三劄
を進む。一に君徳に三有るを論ず。曰く仁、曰く明、曰く武。二に臣を御するを
論ず。曰く、官に任ず。曰く、賞を信にす。曰く、罰を必す。三に軍を揀ぶを論
ず。又、五規を進む、曰く、業を保つ。曰く、時を惜む。曰く、謀を遠くす。曰
く、微を謹む。曰く、實を務むと。

● 釣針につきたる餌 ● 大姦惡 ● 三通の書面

策制科人。得二
蘇軾蘇轍。曾
公亮平章事。
上在位四十

○制科の人を策して、蘇軾・蘇轍を得たり。曾公亮、平章事たり○上、在位四十
二年、改元するもの九。天聖・明道は則ち垂簾の政也。景祐以來は、政己より出

二年。改元者
九。天聖。明道。
則垂簾之政
也。景祐以來。
政由己出。寶
元康定間。西
鄙多事。慶曆
更化。君子滿
朝。至皇祐至和
日。遺制下。雖深

づ。寶元・康定の間は西鄙多事なりき。慶曆更め化し、君子朝に滿つ。皇祐・至和・
嘉祐に至りて、天下承平無事なり。恭儉の徳、人を愛し物を恤むの心、即位より
升遷に至るまで、終始一日の如し。遺制下りて、深山窮谷と雖も奔走せざる莫
く、悲號して止む能はず。壽五十四。皇子立つ。これを英宗皇帝と爲す。

● 太后の御殿を垂れて政を避きたる時代也 ● 崩御 ● 皆奔走して相告げ

朝。至皇祐至和
日。遺制下。雖深
山窮谷。莫不奔走。悲號而不能止。壽五十四。皇子立。是爲英宗皇帝。

英宗皇帝

英宗皇帝、初めの名は宗實。濮の安懿王允讓の子、太宗の曾孫也。仁宗立て
て皇子と爲し、名を曙と賜ふ。仁宗崩す。固く避くること數四、而して後位に
即く。憂疑を以て疾を致す。慈聖光獻曹太后、權に同じく政を聽く。上の舉

英宗皇帝。初
名宗實。濮安
懿王允讓之
子。太宗之曾
孫也。仁宗立

爲皇子。賜名
曙。仁宗崩。固
避數四。而後
即位。以愛疑
致疾。慈聖光
獻曹太后權
同聽政。上舉
措或改常度。
遇宦官尤少
恩。左右多不
悅。乃共爲讒
開。兩宮遂成
隙。賴宰相韓
琦。參政歐陽
修。未僉。修曰
第書之。韓公
必有說。琦坐
政事堂。召內
侍任守忠。立
庭下。曰。汝
罪當死。責
交關。兩宮之
人也。

措、或は常度を改め、宦官を遇する尤も思少し。左右多く悦ばず。乃ち共に讒間を爲す。兩宮遂に隙を成す。宰相韓琦、參政歐陽修等の調護せるに頼りて、上、既に康復して政を親らし、太后簾を撤す。琦、一日、空頭の勅を出す。修已に僉す。趙槩未だ僉せず。修曰く、第之に書せよ。韓公、必ず説有らんと。琦、政事堂に坐し、内侍任守忠を召して、庭下に立たしめて曰く、汝の罪死に當ると。責めて蕪州に安置す。蓋し交々兩宮を關かはしめし人也。

● 舉動措置常規を違す ● 讒言離間 ● 圖停保固 ● 授くる人の名を空白にせる勅書 ● 署名す

議崇奉濮王
典禮。執政欲
稱皇考。又以
太后詔。令上

○濮王を崇奉する典禮を議す。執政、皇考と稱せんと欲す。又太后の詔を以て、上をして親と稱せしめんとす。司馬光・范鎮・呂誨・范純仁・呂大防・呂公著、交々論じ

稱親。司馬光。
范鎮。呂誨。范
純仁。呂大防。
呂公著。交論
以爲不可。鎮
罷翰林。誨純
仁大防解言職。
公著罷侍講。
議竟不決。

て、以て不可と爲す。鎮は翰林を罷められ、誨・純仁・大防は言職を解かれ、公著は侍講を罷めらる。議竟に決せざりき。

● 上の生父也 ● 濮王を親と稱せしめんとす

契丹改號大
遼。

○契丹、大遼と改號す。

上崩。在位四
年。改元者一。
日治平年三
十八。皇太子
立。是爲神宗
皇帝。

○上、崩す。在位四年。改元する者一。曰く、治平。年、三十八。皇太子立つ。之を神宗皇帝と爲す。

神宗皇帝

神宗皇帝名頊。母曰宣仁聖烈皇后高氏。曹太后之甥也。幼與英宗同鞠。后所後爲英宗配。生頊。自頊王爲太子。尋卽位。

神宗皇帝、名は頊。母を宣仁聖烈皇后高氏と曰ふ。曹太后の甥也。幼にして、英宗と同じく、后の所に鞠はる。後英宗の配と爲りて頊を生む。頊王より太子と爲り、尋ぎて位に卽く。

● ぬひ也、甥の字ラヒにもメヒにも用ふ

自_レ有_二濮議_一以來。言者攻_二歐陽修_一不已。遂罷_二韓琦_一亦罷。王安石爲_二翰林學士_一入對。首以_レ擇_レ術爲_レ言。言必稱_二堯舜_一。

○濮の議有りしより以來、言者、歐陽修を攻めて已まず。遂に罷めらる。韓琦亦た罷めらる。○王安石、翰林學士と爲り、入對す。首に術を擇ぶを以て言と爲し、言必ず堯舜を稱す。

● 參内して上の語間に對す

富弼同平章

○富弼同平章事たり。王安石參政たり。安石既に政を執る。士大夫、素より

事。王安石參政。安石既執政。士大夫素重_二其名_一。以爲太平可_二立_一致。呂誨時爲_二御史中丞_一。將_レ對。學士侍讀司馬光。亦將_レ詣_二經筵_一。相遇並行。光密問。今日所言何事。誨曰。袖中彈文。乃新參也。光愕然曰。衆喜_レ得人。奈何論_レ之。誨曰。君實亦爲_二此言_一。邪。安石執_二偏見_一。喜_レ入_レ。侯_レ已。天下必受_二其弊_一。光退而思_レ之。不_レ得_二其說_一。摺紳聞_レ。有_レ傳_二其疏_一者。往

名を重んず。以爲らく、太平立どころに致す可しと。呂誨時に御史中丞たり。將に對せんとす。學士侍讀司馬光、亦た將に經筵に詣らんとし、相遇ひて並び行く。光密に問ふ、今日言ふ所は何事ぞ。誨曰く、袖中の彈文は乃ち新參なりと。光、愕然として曰く、衆人を得たるを喜ぶ。奈何ぞ之を論ずる。誨曰く、君實亦た此言を爲すか。安石偏見を執り、人の己に倣するを喜ぶ。天下必ず其弊を受けんと。光退きて之を思へども、其説を得ず。摺紳の間に其疏を傳ふる者有り、往々其太だ過ぎたるを疑ふ。誨言ふ、大姦は忠に似たり、大詐は信に似たり。安石、外、朴野を示し、中、巧詐を藏し、驕蹇上を慢り、陰賊物を害ふと。其十事を疏す。上、兩び手詔を降して、誨を諫す。誨、之を論じて已まず。遂に誨を罷む。

● 袖の中なる彈劾文は新參政の事也 ● 司馬光の字 ● 其上疏を寫し傳ふる者あり ● 過激なるを

往疑其太過。誨言大姦似忠。大詐似信。安石外示朴野。中藏巧詐。驕蹇慢上。陰賊害物。疏其十事。上兩降手詔。論誨誨論之不已。遂罷誨。

安石建議。創置三司條例。司。議。行。新。法。言。周。置。泉。府。之。官。變。通。天下之財。後世惟桑弘羊。劉晏。祖合此意。今當下修泉府之法。以收中利。權。安石多與呂惠卿謀。人號安石爲孔子。惠卿爲顏子。先是治平中。邵雍與

安石、建議して制置三司條例を創め、新法を行はんとを議す。言ふ、周、泉府の官を置きて天下の財を變通す。後世、惟桑弘羊、劉晏祖ほ此意に合す。今當に泉府の法を修めて、以て利權を收むべしと。安石多く呂惠卿と謀る。人、安石を號して孔子と爲し、惠卿を顏子と爲す。是より先治平中、邵雍、客と天津橋上に散歩し、杜鵑の聲を聞きて、愀然として樂まず。客、其故を問ふ。雍曰く、洛陽舊と杜鵑無し。今始めて至る。天下將に治まらんとするや、地氣北よりして南し、將に亂れんとするや、南よりして北す。今、南方の地氣至る。禽鳥飛類は、氣の先を得る者也。二年ならずして、上、南士を用ひて相と作し、多く南人を引きて、専ら更變を務め、天下此れより多事ならんと。是に至りて、雍の言果して驗ありと云ふ。

客散二步。天津橋上。聞杜鵑聲。愀然不樂。

● 鹽鐵度支戶部の三司の條例を制置するを司る ● 市の紙布を掌らしめ、市の售れず貨の民間に滯りたる貨を歛め其價にて賣りて物價を調節する役所 ● 南方に棲む杜鵑の北方に來れるによりて此事を知れる也

客問其故。雍曰。洛陽舊無杜鵑。今始至。天下將治。地氣自北而南。將亂。自南而北。今南方地氣至矣。禽鳥飛類。得氣之先者也。不二年。上用南士。作相。多引南人。專務更變。天下自此多事矣。至是雍言果驗云。

安石欲行青苗法。以爲周官國服爲息法也。蘇轍曰。以金貸民。吏緣爲姦。錢入民手。雖良民。不免妄用。及不納錢。雖富民。不免違限。鞭箠必用。州縣不勝煩矣。參政唐介爭

安石、青苗法を行はんと欲す。以爲らく、周官の國服爲息の法也。蘇轍曰く、金を以て民に貸さば、吏、緣りて姦を爲さん。錢民の手に入らば、良民と雖も妄に用ふるを免れじ。其錢を納るゝに及びては、富民と雖も違限を免れじ。鞭箠必ず用ひば、州縣煩に勝へざらんと。參政唐介、新法を爭論して勝たず。疽、背に發して卒す。時の人、生老病死苦の喻有り。安石を謂ひて生と爲し、曾公亮を老と爲す。介は死し、富弼は議論合はずして、病と稱し、參政趙抃、安石を如何ともすること無く、惟苦苦と稱するのみ。安石、抃を折きて曰く、君が輩、

論新法不勝。疽發背卒。時人有生老病死之苦。喻謂安石爲生。曾公亮爲老。介死。富弼議論不合。稱病。參政趙抃。無如安石。何。惟稱苦。苦而已。安石折抃曰。君輩坐不讀書耳。抃曰。阜夔稷契。何書可讀。安石亦不能對。

書を讀まざるに坐するのみ。抃曰く、阜・夔・稷・契、何の書をか讀むべきと。安石亦た對ふる能はず。

● 春荷苗を植えつくる頃に民に資本を貸與し、秋に利を附して取り返す法 ● 官より民に物を貸すに有司其價を定め、各々其事に服する所の貢物を利足として之を返納せしむる法 ● 返納の期限に違ふ ● 三代よりも前の賢人

遣使察農田水利。罷義倉。行均輸法。臺諫劉琦錢顛以議新法。貶諫院范純仁。檢詳文字蘇轍。以議新法。罷。行青苗法。置常平官。

○使を遣して農田水利を察せしむ ○義倉を罷む ○均輸法を行ふ ○臺諫劉琦・錢顛、新法を議せしを以て貶せらる ○諫院范純仁・檢詳文字蘇轍、新法を議せしを以て罷めらる ○青苗の法を行ひ、常平官を置く。

● 備荒貯蓄の爲めにせる一郷一社の共同の米倉 ● 物價の調節を司る官

富弼罷。陳升

○富弼罷められ、陳升之同平章事たり。升之初め安石に附く。既に相として頗

之同平章事。升之初附安石。既相頗爲異。同行預買法。令諸路預給錢。和買紬絹。趙抃罷。抃日所爲事。夜必焚香告於天。親試舉人。初用策。葉祖洽以附會新法。擢爲第一。右正言孫覺。御史裏行程顛以議新法。罷。

る異同を爲す ○預買の法を行ひ、諸路に令して預め錢を給して紬絹を和買せしむ ○趙抃罷めらる。抃、日に爲す所の事、夜は必ず香を焚きて天に告ぐ ○舉人を親試し、初めて策を用ふ。葉祖洽、新法に附會せしを以て、擢んで第一と爲す ○右正言孫覺・御史裏行程顛、新法を議せしを以て罷めらる。

● 代金を協定して買取りしむ ● 示談の上買取る ● 上自ら試験し ● うまくもふ權にこじつける

中丞呂公著裏行張戢。以議新法。罷。李定爲裏行。知制誥宋敏求。蘇頌。李大臨。以議定詞頭。罷。謝景溫爲

○中丞 呂公著・裏行張戢、新法を議せしを以て罷めらる ○李定、裏行と爲る。知制誥宋敏求・蘇頌・李大臨、定の詞頭を繼せしを以て罷めらる ○謝景溫、御史知雜となる ○直史館蘇軾、嘗て萬言の書を上り、及び廷試の策に對するに擬し、新法を議して、安石に忤へるを以て、景溫の爲に劾せられて去る ○鄧綰上書して言ふ、陛下、伊呂の佐を得たり。百姓、青苗・免役等の法を歌舞すと。又安石に書

御史知雜直
史館蘇軾以下
書上萬言書
及撰對廷試
策。議新法一
安石爲景溫
所劾去。鄧綰上書言。陛下得伊呂之佐。百姓歌二舞。青苗免役等法。又與安石書及頌。置中書檢正。以綰爲之。鄉人皆笑罵。綰曰。笑罵從佗。笑罵好官。我須爲之。

及び頌を與ふ。中書檢正を置き、綰を以て之を爲さしむ。郷人皆笑ひ罵る。綰曰く、笑罵は佗の笑罵に従せん、好官は我須らく之を爲すべしと。

● 季定の任官の御沙汰書を封還せし隙により ● 伊尹、呂望の如き輔佐の功臣、安石を此二人に擬す ● 民の貧富を計り五等に分ち錢を出させてこれを免役錢と名づけ夫役に出る者の代人を官より雇ふ法

曾公亮罷。策制科人。呂陶。張繪。孔文仲。力詆新法。皆報罷。范鎮以下。數議新法。及嘗薦蘇軾。孔文仲罷。乞致仕。陳升之罷。韓絳。王安石。

○曾公亮罷めらる○科人を策制す。呂陶・張繪・孔文仲、力めて新法を詆る。皆、報じ罷めらる○范鎮、數々新法を議し、及び嘗て蘇軾・孔文仲を薦めしを以て罷めらる。乞ひて致仕す。陳升之罷めらる○韓絳・王安石、同平章事たり○保甲の法を立つ○曾布、中書檢正と爲る○科擧の法を更め、詩賦明經の諸科を罷め、經義論策を以て進士を試む。

● 保、大保、都保等の制を定め、民を以て兵となすの法

同平章事。立保甲法。曾布爲中書檢正。更科擧法。罷詩賦明經諸科。以經義論策試進士。司馬光。先自學士除樞副。力辭不拜。數言新法之害。上諭安石曰。聞三不足之說否。曰不聞。上曰。外人云。朝廷以爲天變不足畏。人言不足恤。祖宗法不足守。昨學士院進館職策問。專指此三事。策問光所爲也。光屢請外。得

○司馬光、先に學士より樞副に除せらる。力め辭して拜せず。數々新法の害を言ふ。上安石に諭して曰く、三不足の説を聞きしや否や。曰く、聞かず。上曰く、外人云ふ、朝廷以爲らく、天變畏るゝに足らず、人言恤ふるに足らず、祖宗の法守るに足らずと。昨、學士院、館職の策問を進めしに、専ら此三事を指せりと。策問は光の爲る所也。光屢々外を請ひて永興を得、許州に移る。上言すらく、臣の不才、最も羣臣の下に出づ。先見は呂誨に如かず、公直は范純仁・程顥に如かず、敢言は蘇軾・孔文仲に如かず、勇決は范鎮に如かずと。屢々西京の留司御史臺に判たらんことを請ひしが、是に至りて請を得たり。後四たび任ぜられて嵩山の崇福宮に提舉たり。

● 政府外の人 ● 地方官たちんを願ひ ● 判官

永興。移許州。上言。臣之不才。最出羣臣之下。先見不如呂誨。公直不如范純仁。程顥。敢言不如蘇軾。孔文仲。勇決不如范鎮。屢請判西京留司御史臺。至是得請。後四任。提舉嵩山崇福宮。

歐陽修先知青州。以四道止給散青苗錢。徙知蔡州。至是乞致仕。富弼先知亳州。坐格青苗法。徙知汝州。中丞楊繪。裏行劉摯。以議新法罷。罷差役。行募役法。立太學三舍法。行市易法。行保馬法。頒方田均稅法。

置熙河路。以王韶爲經略

熙河路を置き、王韶を以て經略安撫等の使と爲す。是より先、韶、平戎の策を

○歐陽修、先に青州に知たり。擯に青苗錢を給散するを止めしを以て、徙されて蔡州に知たり。是に至りて乞ひて致仕す。○富弼先に亳州に知たり。青苗の法を格めしに坐し、徙されて汝州に知たり。○中丞楊繪、裏行劉摯、新法を議せしを以て罷めらる。○差役を罷め、募役の法を行ふ。○太學三舍の法を立つ。○市易の法を行ふ。○保馬の法を行ふ。○方田均稅の法を頒つ。

● 民戸に差等を設けて夫役を課する法 ● 民戸より免役錢を取り立て人を募りて代役せしむる法 ● 太學生を外舍・内舍・上舍の三階級に分つ法 ● 保甲に馬を給附して養はしむる法 ● 田を五等に分ちて租稅を均くす

安撫等使。先是韶上平戎策。謂欲平西夏。當復河湟。今古渭之西。熙河蘭鄯皆漢隴西等郡。吐蕃唃廝囉一族國。其間宜併有之。以絕中夏人右臂。安石以爲奇謀。始開熙河之役。詔克河洮岷疊宕等州。又據青唐咽喉之地。邊氓益斥。役兵之死亡甚多。中書檢正章

上る。謂ふ、西夏を平けんと欲せば、當に河湟を復すべし。今、古渭の西より、熙河・蘭鄯・都まで、皆漢の隴西等の郡にして、吐蕃唃廝囉の一族、其間に國せり。宜しく之を併有して、以て夏人の右臂を絶つべしと。安石以て奇謀と爲し、始めて熙河の役を開く。韶、河・洮・岷・疊・宕等の州に克ち、又青唐の咽喉の地に據る。邊氓は益す斥けたれど、役兵の死亡するもの甚だ多し。○中書檢正章惇、湖北を察訪す。始めて議して、南北江蠻を經制す。辰州の南北江は乃ち古の錦州の地にして、施黔梓柯に接す。章惇に命じて措置せしむ。惇、言ふ、梅山の蠻徭を招き諭し、令して戸を省くことを作さしめ、皆歡迎せりと。其實は殺戮して、浮屍江を蔽へり。○詩・書・周禮三經義局を置く。安石提舉たり、呂惠卿及び安石の子雋等檢討たり。

● 河湟の地方を取りかへすべし ● 邊陲の里程のしるしの標は益々向ふの方まで廣まりたれど ● 處分せしむ ● 水に浮き上りたるしかばね

惇察訪湖北。始議經制南北江。辰州南北江。乃古錦州之地。接施黔梓柯。命惇措置。惇言招諭梅山蠻。令作省戶。皆歡迎。其實殺戮。浮屍蔽江。置詩書周禮三經。編局。安石提舉。呂惠卿及安石子雱等爲檢討。

熙寧七年。天久不雨。河東北陝西流民。皆流入京城。而京城外饑民尤多。監安上門鄭俠。畫爲圖。上書曰。陛下南征北伐。皆以勝捷之勢。作圖來上。無一人以下天下憂苦。妻子不保。遷移困頓。退避不給之狀。爲

○熙寧七年。天久しく雨ふらず。河の東北陝西の流民、皆流れて京城に入る。而して京城の外、饑民尤も多し。安上門を監する鄭俠、畫きて圖と爲し、上書して曰く、陛下、南征北伐皆勝捷の勢を以て圖を作りて來り上るあるも、一人の、天下憂苦し妻子相保せず、遷移困頓して、遑遑給せざるの狀を以て、圖を爲りて獻する者無し。安上門、日を逐ひて見る所、百、一に及ばざるも、亦た涕を流す可し。況んや千萬里の外をやと。時に旱を以ての故に直言を求む。言者皆新法を咎む。上疑ひて、之を罷めんと欲す。安石悦ばず、去らんとを求む。知江寧府に除す。安石、韓絳を薦めて、己に代りて相たらしめ、呂惠卿を參政と爲す。時に絳を號して傳法沙門と爲し、惠卿を護法善神と爲す。惠卿、建議す、免役出

匿而獻者。安上門逐日所見。百不及一。亦可流涕。況千萬里外哉。時以早故求直言。言者皆咎新法。上疑欽罷之。安石不悅。求去。除知江寧府。安石薦韓絳。代己爲相。呂惠卿爲參政。時號絳爲傳法沙門。惠卿爲護法善神。惠卿建議。免役出錢不均。出於簿書之不善。行手實法。惠卿既得勢。恐安石復入。遂逆閉其途。出安石私書。有勿令上知之語。凡可以害安石者。無所不用其智。又數與絳忤。絳乘間白上。復相安石。安石罷。不一年再入。聞命不辭。自金陵。七日至闕下。後數月。絳與惠卿相繼罷。

錢均しからざるは、簿書の不善に出づと。手實の法を行ふ。惠卿既に勢を得て、安石の復び入らんことを恐れ、遂に逆め其途を閉ぢ、安石の私書を出す。上をして知らしむる勿れの語有り。凡そ以て安石を害ふべき者、其智を用ひざる所無し。又數々絳と忤ふ。絳、間に乘じて上に白し、復た安石を相とす。安石、罷められて一年ならず、再び入る。命を聞きて辭せず。金陵より七日にして闕下に至る。後數月、絳と惠卿と相繼ぎて罷めらる。
● 人戸より丁口田宅の實を具申せしめ、隱蔽を告發する者には其家財の三分の一を與ふ、一種の民財調査也

行馬法。判相州韓琦薨。琦天資忠厚。

○戶馬の法を行ふ。○判相州韓琦、薨す。琦、天資忠厚、能く大事を斷す。治平の閒、首相と爲り、政事は集賢に問ひ、典故は東廳に問ひ、文學は西廳に問ひ、

能斷大事。治平間爲首相。政事問集賢。典故問東廳。文學問西廳。大事則自決之矣。出判相州。初言青苗不便。朝廷不從。卽命散給。曰。藩臣之體當如是。在鄉郡八年而終。御製碑曰。兩朝願命定策。元勛之碑。命韓績如河東。割地。先是遼使屢至言。河東沿邊增修

大事は則ち自ら之を決す。出で、相州に判たり。初め青苗の不便を言ふ。朝廷從はず。卽ち命じて散給して曰く、藩臣の體、當に是の如くなるべしと。郷郡に在ること八年にして終る。御製の碑に曰く、兩朝願命定策元勛之碑と○韓績に命じ、河東に如きて地を割かしむ。是より先、遼の使屢々至りて言ふ、河東、邊に沿ひて成壘を増修し、舖舎を起して、彼の國の蔚應朔の州界に侵入す。乞ふ、毀撤を行ひ、別に界至を立てんと。蓋し遼人、朝廷の高麗を招き、熙河を建て、西山に榆柳を植ゑ、保甲を創め、河北の城池を築き、都作院を創め、弓刀の新様を降し、界北の三十七將を置けるを見て、燕を復するの意有るを疑ひ、故に地界を争ふを以て名と爲し、朝廷の應ずる所以を觀るなり。安石之を斷じて曰く、將に之を取らんと欲せば、必ず姑く之を與へよと。東西地を失ふこと七百里。

● 英宗の治平年間 ● 集賢學士の自公亮 ● 典故故實 ● 東の官廳に出仕せる韓績 ● 西の官廳に出仕せる韓績 ● 官錢を散じて人民に給貸し ● 取拂ひ

成壘起舖舎。使入彼國蔚應朔州界。乞行毀撤。別立界至。蓋遼人見朝廷招高麗。建熙河。四山植榆柳。創保甲。築河北城池。創都作院。降弓刀新様。置界北三十七將。疑有復燕之意。故以争地界爲名。觀朝廷所以應。安石斷之曰。將欲取之。必姑與之。東西失地七百里。

安石再相二年。屢謝病。子雱死。求去尤力。上益厭其所爲。出判江寧府。遂不復用。自安石用事。口談先王。而專行管商之政。知上有富強之志。思所以濟其欲。謂立法當用小人。而後以君子守之。不

○安石再び相たると二年、屢々病を謝す。子雱死す。去らんを求むること尤も力む。上、益々其爲す所を厭ひ、出して江寧府に判たらしむ。遂に復た用ひられず。安石の事を用ひしより、口に先王を談じて、専ら管商の政を行ひ、上の富強の志、有るを知りて、其欲を濟す所以を思ふ。謂ふ、法を立つるには當に小人を用ひ、而る後君子を以て之を守るべしと。其の是理無きを悟らざりし也。天下駭然として國未だ嘗て富ます。邊鄙事を生じ、徒に多く喪ひ敗れて、國未だ嘗て強からず。西鄙は、治平の末に、种諤、綏州を取りしより、夏人卽ち兵を興して報復せんと欲す。夏主諒祚卒し、子秉常立つ。大に入寇す。安石、王韶が熙河を取るの策を用ひしと雖も、徒に怨を西蕃に構へて、鬼章等が屢々寇患を爲

悞其無是理也。天下騷然。而國未嘗富。邊鄙生事。徒多喪敗。而國未嘗強。西鄙自治。平未種。誘取綏州。夏人即欲興兵。報復。夏主諒祚卒。子秉常立。大入寇。安石雖用王韶取熙河之策。徒構怨西蕃。致鬼章等屢為寇患。初不能以此制西夏。所用沈起。劉彝又生豐南方。交趾李日遵卒。子乾德立。起彝相繼知桂州。集土丁為保

すを致し、初めより此を以て西夏を制する能はざりき。用ふるところの沈起・劉彝又豐を南方に生じぬ。交趾の李日遵卒し、子乾德立つ。起彝相繼ぎて桂州に知たり。土丁を集めて保甲と爲し、海濱に於て、舟師を集めて水戦を教へ、州縣と交人と貿易するを禁止す。交人大舉して入寇し、邕州を圍み、欽・廉を陥れ、聲言すらく中國青苗・助役の法を作りて以て民を困しむ、兵を出して相救はんと。安石怒りて、趙高等を遣して之を討たしむ。官軍の死する者十に六。兵の禍安石の去るに訖ぶまで未だ已まざりき。吳充・王珪、安石に繼ぎて相となる。充、先に政府に在りても數々政事の便に非ざるを言ふ。既にして安石に代る。蔡確・鄧潤甫等、共に之を攻めしも、去る能はず。

- 病を申立て、官を去らんとす
- 管仲商鞅の政
- その欲望を満す方法
- 魯陽即ち不和を南方に生ず
- 本土の兵丁
- 交趾の人
- 十中に六、十人に六人は死す

濱甲。於海集舟師。教水戰。禁止州縣與交人貿易。交人大舉入寇。圍邕州。陷欽廉。聲言中國作青苗助役法。以困民。出兵相救。安石怒。遣趙高等討之。官軍死者十六。兵禍訖。安石之去而未已。吳充王珪繼安石為相。充先在政府。數言政事非便。既代安石。蔡確鄧潤甫等共攻之。不能去。

元豐元年。知湖州蘇軾。安置黃州。先是中丞李定言。軾自熙寧以來。怨誘君父。舒直亦言。軾議時事。陛下發錢本以業貧民。則曰。贏得兒童語。昔好。一年強半。在城中。明法以課試羣吏。則曰。讀書萬

○元豐元年、知湖州蘇軾を黃州に安置す。是より先、中丞李定言ふ、軾、熙寧より以來、君父を怨誘すと。舒直も亦た言ふ、軾、時事を議す。陛下、錢本を發して、以て貧民を業くれれば、則ち曰く、贏得たり兒童語好きを、一年強半は城中に在りと。明法、以て羣吏を課試すれば、則ち曰く、讀書萬卷律を讀ます。君を堯舜に致すこと終に術無しと。水利を興せば、則ち曰く、東海若し明主の意を知らば、應に斥鹵をして桑田に變せしむべしと。鹽禁を謹めば、則ち曰く、豈是れ詔を聞きて味を忘るゝを解せんや、邇來三月食に鹽無しと。其他物に觸れ事に即きて、譏諷を以て主と爲さざる無しと。乃ち軾を追ひて御史の獄に繋ぎ、定と張璪とに詔して推治せしむ。王珪言ふ、軾、不臣の意有りと。軾

卷不讀律。致君堯舜。終無術。與水利。則曰。東海若知。明主意。應教。斥鹵變桑田。謹鹽禁。則曰。豈是聞解。解忘味。通來三月。食無鹽。其無觸物。即事。爲主。乃追。定與張璠。推治。王珪言。賦有。不臣意。舉。賦。檜。詩。根。到。九。泉。無。二。曲。處。世。間。惟。有。二。螿。龍。知。陸。下。飛。龍。御。天。而。賦。彼。欲。求。之。地。下。之。螿。龍。非。不。臣。而。何。上。曰。彼。自。詠。檜。何。預。朕。事。上。本。無。意。罪。賦。吳。充。王。安。禮。皆。勸。上。容。之。賦。成。而。有。是。命。弟。微。亦。坐。救。賦。而。貶。坐。賦。詩。案。二。關。同。者。張。方。平。司。馬。光。以下。二。十。二。人。上。實。憐。賦。尋。移。汝。州。且。復。用。一。矣。爲。蔡。確。張。璠。等。所。沮。

の檜の詩を擧ぐ。根は九泉に到りて曲處無し。世間惟螿龍の知る有り。陸下は飛龍天に御す。而して賦は彼れ之を地下の螿龍に求めんと欲す。不臣に非ずして何ぞ。上曰く、彼自ら檜を詠す。何ぞ朕の事に預らんと。上、本賦を罪するに意無し。吳充・王安禮、皆上に勸めて之を容さしむ。獄成りて是命有り。弟微亦た賦を救ふに坐して貶せらる。賦の詩案に坐して黜罰せられし者、張方平・司馬光以下二十二人なり。上、實に賦を憐む。尋ぎて汝州に移し、且に復た用ひんとして、蔡確・張璠等の爲に沮まる。

●一に「檜」を設する本以て「と訓」●言葉が好みなりしのみ●借録の返納出来ずして一年の過半は城中に上り付けられ故に也●置分ある荒地●孔子は韶の音楽を聞いて面白く感じ、三月の閑内の味を知らざりしといふも、今世豈過殷の禮を解せん、三月閑内なしに物を食ひて既に其味を知らずと也●詩の韻脚に連綴して

吳充罷。臨月而卒。元豐元年。大正。官名。元豐五年。官制。成。改。平。章。事。爲。左。右。僕。射。以。王。珪。蔡。確。爲。之。參。知。政。事。爲。門。下。中。書。侍。郎。章。惇。張。璠。爲。之。置。尚。書。左。右。丞。蒲。宗。孟。王。安。禮。爲。之。以。三。省。一。統。領。百。職。中。書。取。旨。門。下。覆。奏。尚。書。施。行。珪。爲。相。人。謂。之。三。旨。宰。相。凡。事。

○吳充罷められ、月を踰えて卒す。○元豐元年、大に官名を正す。元豐五年、官制成る。平章事を改めて左右僕射と爲し、王珪・蔡確を以て之と爲し、參知政事を門下中書侍郎と爲し、章惇・張璠を之と爲し、尚書左右丞を置き、蒲宗孟・王安禮を之と爲し、三省を以て百職を統領せしむ。中書旨を取り、門下は覆奏し、尚書施行す。珪、相と爲る。人之を三旨宰相と謂ふ。凡そ事惟だ聖旨を取ると曰ひ、聖旨を得れば則ち聖旨を領すと曰ひ、退きて之を書すれば、則ち聖旨を奉すと曰ふのみ。上、之を厭ふ。確、珪に謂ひて曰く、上久しく強武を取らんと欲す。公能く責に任せば、則ち相位保つ可き也と。珪、喜びて其言の如くし、内侍李憲等に命じ、道を分ちて夏國を伐ち、靈州を攻めしむ。克たず。士卒死し、及び凍餒する者十に五六なり。憲、再舉の議を上る。徐禧又承樂の新城を築かんことを議す。夏人大舉して城を攻む。城陥り、禧等の蕃漢官及び諸軍の死する者萬三千。上、奏を聞きて慟哭す。

惟曰取聖旨。得聖旨則曰。領聖旨。退書之。則曰奉聖旨而已。上厭之。確謂珪曰。上久欲取靈武。公能任責。則相位可保也。珪喜如其言。命內侍李憲等分道伐夏國。攻靈州。不克。士卒死。及凍餒者十五六。憲上再舉之議。徐禧又議築承樂新城。夏人大舉攻城。城陷。禧等蕃漢官及諸軍死者萬三千。上聞奏。慟哭。

● 覆讀して奏請す ● 外蕃と漢土との官吏

富弼上遺表。言忠諫杜絕。詔諛日進。興利之臣爲國。斂怨。又言四事。大可愛。望留聖念。弼早名聞夷狄。遠使每至。必問其出處安否。忠義之性。老

○富弼遺表を上る。言ふ、忠諫杜絶し、詔諛日に進み、興利の臣國の爲に怨を斂むと。又言ふ、西事大に憂ふ可し、望むらくは聖念を留めよと。弼早く公輔の望有り、名夷狄に聞え、遠の使至る毎に、必ず其出處安否を問ふ。忠義の性、老いて彌々篤く、家居一紀、斯須も朝廷を忘れず。是に至りて薨す○宰相同じく對せしとき、上、人才無きの歎有り。蒲宗孟曰く、人才半は司馬光が邪説の爲に壞らると。上語らず、宗孟を視ると之を久しくして曰く、蒲宗孟は乃ち司馬光を取らざるかと。宗孟尋ぎて罷めらる。司馬光の資治通鑑成る。上即位の初、

而彌篤。家居一紀。斯須不忘。朝廷至是。葬宰相同對。上有無二人之才。之歎。蒲宗孟曰。人才半爲司馬光邪説所壞。上不語。視宗孟久之。曰。蒲宗孟乃不取司馬光。邪宗孟尋罷。司馬光資治通鑑成。上即位之初。已嘗御製序。至元豐七年。書始上。初官制將行。上欲取新

已に嘗て御製の序あり。元豐七年に至り、書始めて上る。初め官制の將に行はれんとするや、上、新舊人を取りて、兩つながら之を用ひんと欲す。曰く、御史大夫は司馬光に非ざれば不可なり。蔡確曰く、國是方に定まる。願はくは少しく之を遲てと。既にして上疾有り。又曰く、來春儲を建てば、當に司馬光・呂公著を以て師保となすべしと。公著は夷簡の子也。上在位十八年。改元する者二、熙寧・元豐と曰ふ。厲精治を求め、日昃くまで食ふに暇あらず。平生政游を御せず、宮室を治めず、惟れ勤惟れ儉、將に以て大に爲す有らんとす。奈何せん、熙寧以來安石に誤られ、元豐以後事を用ふる者終始皆安石の黨にして、竟に天下の患と爲る。北狄の倔強を憤り、慨然として、幽燕を恢復するの志有り。先づ靈夏を取り、西羌を滅し、乃ち北伐を圖らんと欲す。安南、律を失ふに及びて、喟然として赤子の罪なくして死するを歎じ、永樂の敗に、益々兵を用ふるの難きを知り、始めて征伐を念ふを息め、卒に一事の意の如くなる無くして崩す。

年三十八。皇太子立つ。之を哲宗皇帝と爲す。

● 死後に遺留する表文 ● へつらひ ● 三公補弼たるべき人選 ● 十二年 ● 一國の是とする方針 ● 皇太子 ● 遊行田獵 ● なげく親 ● 人民

舊人一兩用之。曰御史大夫。非司馬光不可。蔡確曰。國是方定。願少遲之。既而上有疾。又曰。來春建儲。當以司馬光。呂公著。爲中帥。保公著。夷簡子也。上在位十八年。改元者二。曰熙寧。元豐。屬精求治。日昃不暇食。平生不御畋游。不治宮室。惟勤惟儉。將以大有所爲也。奈何熙寧以來。誤於安石。元豐以後。用事者。終始皆安石之黨。竟爲天下患。憤北狄。佩強。慨然有恢復幽燕之志。欲先取靈夏。滅西羌。乃圖北伐。及安南。失律。喟然歎。赤子無罪而死。永樂之敗。益知用兵之難。始息念征我。卒無一事如意。崩。年三十八。皇太子立。是爲哲宗皇帝。

卷之七

宋

哲宗皇帝

哲宗皇帝。名煦。初爲延安郡王。神宗大漸。立爲太子。先是蔡確遣舍人邢恕。邀高公繪。欲使白太后言延安冲幼。岐嘉皆賢王也。公繪懼曰。公欲

哲宗皇帝、名は煦。初め、延安郡王たり。神宗の大漸なるとき、立ちて太子と爲る。是より先、蔡確、舍人邢恕を遣して、高公繪を邀へ、太后に白さしめんと欲す。言ふ、延安は冲幼なり、岐・嘉は皆賢王也と。公繪、懼れて曰く、公、吾が家に禍せんと欲するか、亟に去れと。恕、禍心を包蔵し、反りて謂ふ、太后、王珪と表裏し、延安を捨て、子願を立てんと欲せしが、己及び章惇・蔡確に頼りて、變無きを得たりと。且つ其説を士大夫の間に播く。神宗崩じ、太子位に即く。甫めて十歳なり。太皇太后、同じく政を聽く。熙寧中、太后已に嘗て

禍晉家。亟去。想包藏禍心。反謂太后與王珪表裏。欲捨延安而立中子顯。顯已及章惇蔡確得無變。且播其說於士大夫間。神宗崩。太子即位。甫十歲。太皇太后同聽政。熙寧中太后已嘗流涕。爲神宗言。安石變法不便。既垂簾。知天下厭苦日久。首罷東京戶馬。罷京東西路保馬。罷京東西路保馬。罷諸州鎮寨市易。抵當罷汴河堤岸司地課。放市易。常平免役息錢。罷在京免行錢。罷提舉保甲錢糧。巡教等官。罷方田等。皆從中出。大臣不與。

涕を流して、神宗の爲に言ふ、安石の變法、便ならずと。既に簾を垂れて、天下の厭ひ苦むこと、日久しきを知る。首として東京の戸馬を罷め、京の東西路の保馬を罷め、京の東西の物貨場を罷め、諸州の鎮寨市易の抵當を罷め、汴河堤岸司の地課、放市易、常平免役の息錢を罷め、在京免行錢を罷め、提舉、保甲、錢糧、巡教等の官を罷め、方田等を罷む。皆中より出で、大臣は與らず。

● 病氣の危篤なるとき ● 神宗の母高太后の姪(ヲヒ)也 ● 内外相應して ● 殿中にて政を聽く ● 官中即ち太后の英斷に出づと也

王珪卒。蔡確、韓縝爲左右僕射。章惇知

○王珪卒す。蔡確・韓縝、左右僕射と爲り、章惇、樞密院に知たり。司馬光、門下侍郎たり。光、洛に居ること十五年、兒童走卒も、皆、司馬君實を知る。神宗の

樞密院。司馬光門下侍郎。光居洛十五年。兒童走卒皆知。司馬君實。神宗升遐。赴闕入臨。衛士望見。以手加額。曰。司馬相公也。爭擁馬首。呼曰。公毋歸洛。留相天子。活三百姓。所在數千人聚觀之。光懼歸洛。已而召爲執政。

升遐するや、闕に赴きて、入り臨む。衛士、望見し、手を以て額に加へて曰く、司馬相公也と。争ひて、馬首を擁して呼びて曰く、公、洛に歸ること毋れ。留りて天子に相として百姓を活せと。所在數千人、聚りて之を觀る。光、懼れて洛に歸る。已にして召されて執政と爲る。

● 走りづかひの者 ● 崩御 ● 望見する状也、或はいふ敬意を表する作法と

河南程顥以二伯淳弟。顥字正叔。兄弟皆從。濂溪周惇頤。受學。惇頤字茂叔。博學力行。聞道早。

○河南の程顥是歳を以て卒す。顥、字は伯淳、弟、頤、字は正叔、兄弟皆濂溪の周惇頤に従ひて學を受く。惇頤、字は茂叔、博く學び、力め行ひ、道を聞くこと早く、事に遇ひて剛果に、古人の風有り。政を爲すこと嚴恕にして、務めて理を盡し、名節を以て自ら礪く。雅より高趣有り。聽前の草、除かずして曰く、自家の意思と一般なりと。黃庭堅稱す、其人品甚だ高く、胸中灑落、光風

遇事剛果。有古人風。爲政嚴恕。務盡理。以名節自勵。雅有高趣。聽前草不除。曰。與自家意思一般。黃庭堅稱其人品甚高。胸中灑落。如光風霽月。有太極圖通書。行于世。願願初從之。首令尋仲尼顏子所樂何事。學成。各以斯文爲己任。願嘗言。一命以上。苟存心於

霽月の如しと。太極圖・通書有り、世に行はる。願の初めて之に従ふや、首として、仲尼・顔子の樂む所の何事なるかを尋ねしむ。學成るや、各々斯文を以て己の任と爲せり。願嘗て言ふ、一命以上、苟くも心を愛するに存せば、人に於て必ず濟す所有らんと。熙寧中新法の合はざるを以て國を去る。神宗、嘗て人才を推擇せしめしに、薦むる所數十人、表叔の張載、弟願を以て首と爲す。其死するや、文彦博、衆論を采り、其墓に表して明道先生と曰ふ。而して弟願、之が序を爲りて曰く、周公没して聖人の道行はれず、孟子死して聖人の學傳はらず。道行はれざれば、百世善治無し。學傳はらざれば、千載眞儒無し。善治無くとも、士は猶ほ夫の善治の道を明かにするを得て、以て諸を人に淑し、以て諸を後に傳へん。眞儒無くば、天下賢賢焉として之く所を知ること莫く、人欲肆にして、天理滅せん。先生、千四百年の後に生れて、不傳の學を遺經に得、異端を辨じ、邪説を息め、聖人の道をして、復び世に明かならしめぬ。蓋し孟子の

愛物。於人必有所濟。熙寧中以新法不合去國。神宗嘗使推擇人才。所薦數十人。以表叔張載弟願爲首。其死也。文彦博采衆論。表其墓。曰。明道先生。而弟願爲之序。曰。周公没。聖人之道不行。孟子死。聖人之學不傳。道不行。百世無善治。學不傳。千載無眞儒。無善治。士猶得明夫善治之道。以淑諸人。以傳諸後。無眞儒。天下賢賢焉。莫知所之。人欲肆。而天理滅矣。先生生于千四百年之後。得不傳之學於遺經。辨異端。息邪説。使聖人之道復明於世。蓋自孟子之後。一人而已。願嘗語人。欲知吾之道者。觀此序可矣。張載字子厚。初無所不學。後聞二程之言。乃盡棄其學。而講焉。有東銘。西銘。正蒙。理窟等書。行于世。人謂之橫渠先生。

後より一人のみと。願嘗て人に語るらく、吾の道を知らんと欲する者は、此序を觀ば可なりと。張載字は子厚、初め學ばざる所無し。後二程の言を聞き、乃ち盡く其學を棄て、講ず。東銘・西銘・正蒙・理窟等の書有り、世に行はる。人之を横渠先生と謂ふ。

① 草の生々するは自家生々の意思と同じ、刈るべからず ② 聖人の道 ③ 一たび命を拜して士となりたる以上 ④ 母方の叔父 ⑤ 之を人に取りて以て其身をよくし ⑥ 目の明かならざる貌

其墓。曰。明道先生。而弟願爲之序。曰。周公没。聖人之道不行。孟子死。聖人之學不傳。道不行。百世無善治。學不傳。千載無眞儒。無善治。士猶得明夫善治之道。以淑諸人。以傳諸後。無眞儒。天下賢賢焉。莫知所之。人欲肆。而天理滅矣。先生生于千四百年之後。得不傳之學於遺經。辨異端。息邪説。使聖人之道復明於世。蓋自孟子之後。一人而已。願嘗語人。欲知吾之道者。觀此序可矣。張載字子厚。初無所不學。後聞二程之言。乃盡棄其學。而講焉。有東銘。西銘。正蒙。理窟等書。行于世。人謂之橫渠先生。

共城邵雍字堯夫。居河南。與二程友。雍

共城の邵雍、字は堯夫、河南に居りて二程と友たり。雍の學、心を玩ぶこと高明にして、天地の變化、陰陽の消長を觀て、以て萬物の變に達す。物數に精し

之學。玩心高明。觀天地變化。陰陽消長。以達萬物之變。精於物數。推無不中。顯嘗在考試院。以其數推之。出謂雍曰。堯夫數只是加一倍法。雍歎其聰明。雍欲以二數學傳中。程二程不受。邢恕欲受。雍不許。曰。徒長姦雄。雍有二皇極經世書十卷。擊壤集歌。傳于世。人謂之康節先生。富弼。司馬光等。皆深敬重之。宋自歐陽修以古

く、推して中らざること無し。顯、嘗て考試院に在り。其數を以て之を推す。出で、雍に謂ひて曰く、堯夫の數は、只是れ加一倍の法なりと。雍其聰明を歎す。雍、數學を以て二程に傳へんと欲す。二程受けず。邢恕、受けんと欲す。雍、許さずして曰く、徒に姦雄を長せんと。雍、皇極經世書十二卷、擊壤集歌有り、世に傳ふ。人之を康節先生といふ。富弼・司馬光等、皆深く之を敬ひ重んず。宋、歐陽修が古文を以て天下に倡へしより、文章大に變ぜりと雖も、而も儒者義理の學は、周程出づるに至りて、然して後大に明かなり。雍・惇頤・載、皆神宗の世に歿す。是に至りて、顯又歿し、惟頤のみ在り。學者之を宗とし、伊川先生と爲す。

● 既味すること ● 物の數理に精通し ● 一倍を加ふる法。太極圖傳即ち陰陽を生じ、兩儀四象を生じ、四象八卦を生ず等の類

文一倡天下。文章雖大變。而儒者義理之學。至周程出。然後大明。雍惇頤載。皆歿於神宗之世。至是顯又歿。惟頤在。學者宗之。爲伊川先生。

元祐元年。蔡確罷。確與二章惇。邢恕相交。結。恕往來傳送語言。自謂有定策功。言官王觀。極言惇確及韓縝。張璪朋邪。劉摯。朱光庭。蘇轍。累數十疏。論劾。確先黜。以司馬光爲左僕射。時王安石已病。其弟以郎吏狀一

○元祐元年、蔡確罷めらる。確、章惇・邢恕と相交り結ぶ。恕往來し、語言を傳送し、自ら謂ふ、定策の功有りと言官王觀、惇・確及び韓縝・張璪の朋邪を極言し、劉摯・朱光庭・蘇轍、數十疏を累ねて論劾す。確先づ黜けらる。司馬光を以て左僕射と爲す。時に王安石已に病む。其弟郎吏の狀を以て、之に示す。安石曰く、司馬十二、相と作ると。悵然たること之を久しくす。議者或は謂ふ、三年、父の道を改むること無し。新法も姑く稍其甚しき者を損じて足らんと。光、慨然之を争ひて曰く、先帝の法、善き者は百世と雖も變ず可からず。安石・惠卿等の建つる所、天下の害を爲し、先帝の本意に非ざる者の若き、當に焚を救ひ、溺を拯ふが如くなるべくして、猶ほ及ばざらんことを恐る。況んや太皇太后、母を以て子を改む。子、父を改むるに非ざるをやと。衆議、乃ち定まる。或ひと光

示之。安石曰。司馬十二作相矣。恨然久之。議者或謂三年無改父道。新法姑稍損其甚者足矣。光慨然爭之曰。先帝之法。善者雖百世不可變。若下安石。惠卿等所建。爲天下害。非先帝本意。當如救焚拯溺。猶恐不及。況太皇太后。以母改子。非子改父。衆議乃定。或謂光曰。章惇呂惠卿輩。他日有以父子之議。開於上。則朋黨之禍作矣。光起立拱手。勵聲曰。天若許宋。必無此事。安石每開朝廷。變其法。夷然不以爲意。及聞罷助役。復差役。愕然失聲曰。亦罷至此乎。良久曰。此法終不可罷。安石與先帝議之二年。乃行。無不曲盡。

● 確と惇との間に往來して
● 右司諫
● 徒黨を結びて毒邪を爲すこと
● 焚くるを救ひ、溺るゝを救ふ、事の極めて急なるべきをいふ
● 平氣なるさま
● 思はず聲を放ちて

○章惇・韓縝罷めらる○王安石卒す。安石、金陵に在りて、常に福建子と獨語す。

王安石卒。安石在金陵。常獨語福建子。恨惠卿也。惠卿叛安石。惟章惇終始不叛。安石又常曰。新法之行。始終以爲可行者。曾子宣也。始終以爲不可者。司馬君實也。呂公著右僕射。文彥博軍國重事。程頤崇政殿說書。蘇軾翰林學士。竄貶呂惠卿鄆絳等。

福建子々々々とひとりごとす。惠卿は福建の人なれば也

○司馬光相と爲りて、八閏月にして薨す。太皇太后、之を哭して慟す。上亦た感涕して已まず。太師溫國公を贈り、文正と諡す。光の位に在るや、遼人夏人之使來れば、必ず光の起居を問ふ。而して遼人、其邊吏を勅めて曰く、中國、司馬を相とす。切に事を生じて邊隙を開くこと毋れと。卒するに及び、京師の民、市を罷む。其像を畫き、印して之を鬻ぐ。畫工、富を致し、者有り。葬

來。必問光起居。而遼人勅其邊吏曰。中國相司馬矣。切毋生事。開邊隙。及卒。京師民罷市。畫其像。印鬻之。畫工有致富者。及葬。四方來會者。哭之。如哭其親戚。光嘗語晁無咎曰。吾無過人。但平生所爲。未嘗不可對人言。者上耳。劉安世問光一言。可終身行。行之者。光曰。其誠乎。安世問其所從入。曰。自不妄語入。

るに及びて、四方の來り會する者、之を哭する其親戚を哭するが如し。光嘗て晁無咎に語りて曰く、吾、人に過ぎたること無し。但だ平生爲す所、未だ嘗て人に對して言ふ可からざる者あらざるのみと。劉安世、光に、一言にして以て身を終ふるまで之を行ふべき者を問ふ。光曰く、其れ誠かと。安世、其の從ひて入る所を問ふ。曰く、妄語せざるより入ると。

● 邊境の役人を戒めて ● 邊境の事端 ● 虛言

蘇軾。程頤。同在經筵。軾喜諧謔。而頤以禮法自持。軾每嘲侮之。光之薨也。百官

○蘇軾、程頤、同じく經筵に在り。軾は諧謔を喜び、頤は禮法を以て自ら持す。軾、毎に之を嘲り侮る。光の薨するや、百官方に慶禮有り。事畢り往きてて弔はんと欲す。頤、可かすして曰く、子、是日に於て哭すれば、則ち歌はずと。或ひと曰く、歌へば則ち哭せずと言はずと。軾曰く、此れ枉死市の叔孫通、此禮

方有慶禮。事畢欲往弔。頤不可曰。子於是不哭。則不哭。或曰。不哭。則不哭。軾曰。此枉死市叔孫通制。此禮也。頤怒。二人遂成隙。門人朱光庭賈易爲言官。力攻軾。傳堯俞。王巖叟。呂陶等相繼論列。堯俞。巖叟。右二光庭。陶。右軾。是時元豐大。臣退於散地。皆銜怨入骨。

を制せし也と。頤怒る。二人、遂に隙を成しぬ。門人朱光庭・賈易、言官たり。力めて軾を攻む。傳堯俞・王巖叟・呂陶等、相繼ぎて論列す。堯俞・巖叟は光庭を右け、陶は軾を右く。是時、元豐の大、散地に退き、皆怨を銜みて骨に入り、陰に間隙を伺ふ。諸賢悟らず、方に自ら黨を分ちて相攻む。洛黨・川黨・朔黨有り。洛黨は、頤を以て領袖と爲す。光庭・易、羽翼たり。川黨は、軾を以て領袖と爲す。陶等、羽翼たり。朔黨は、劉摯・王巖叟・劉安世を以て領袖と爲す。而して羽翼尤も衆し。未だ幾くならず、頤、罷めて復た召されず。之を久しくして、軾も亦た罷められ、後再び入り、三たび入り、皆久しからずして出づ。○呂公著、司空同平章軍國事と爲る。呂大防・范純仁、左右僕射たり。純仁は仲淹の子也。公著尋ぎて薨す。

● ちどけ ● 孔夫子は人を哀哭したる日は還服して歌はず ● 市中に枉死すべき者の叔孫通 ● 元豐時代の大臣閑散の地に退きて

陰伺隙。諸賢不悟。方自分黨相攻。有洛黨川黨朔黨。洛黨以頤爲領袖。光庭。易爲羽翼。川黨以軾爲領袖。陶等爲羽翼。朔黨以劉擊。王巖叟。劉安世爲領袖。而羽翼尤衆。未幾。頤罷。不復召。久之。軾亦罷。後再入。三入。皆不久而出。呂公著爲司空。同平章軍國事。呂大防。范純仁左右僕射。純仁仲淹子也。公著尋薨。

知漢陽軍吳處厚言。蔡確謫安州。一日。作夏中登車蓋亭詩。譏訕臺諫。論確不已。安置新州。呂大防。劉擊。范純仁。王存等。以爲不宜。令過嶺置死地。純仁曰。此路荆棘八十年矣。奈何開之。吾曹政恐不

○知漢陽軍吳處厚言。蔡確安州に謫せられし日、夏中車蓋亭に登るの詩を作りて、臺諫を譏り訕りぬと。確を論じて已まず。新州に安置す。呂大防・劉擊・范純仁・王存等以爲らく、宜しく嶺を過ぎて死地に置かしむべからずと。純仁曰く、此路荆棘八十年なり。奈何ぞ之を開かん。吾曹、政に免れざるを恐るゝのみと。之を争へども得ず。臺諫、交章して、純仁の確に黨するを攻む。純仁遂に罷めらる。劉擊、右僕射と爲る。大防・擊、元豐の黨人を引き用ひて、以て舊怨を平けんと欲す。之を調停と謂ふ。蘇轍等、力めて、其不可なるを陳す。擊、罷められて、蘇頌右僕射爲り。頌罷められて、純仁又之に代れり。

● 此路八十年來いばらに埋れり ● 交々上章して ● 和解兩全の義

免耳。争之不得。臺諫交章。攻純仁黨。確。純仁遂罷。劉擊爲右僕射。大防。擊。欲引用元豐黨人。以平舊怨。謂之調停。蘇轍等力陳其不可。擊罷。蘇頌爲右僕射。頌罷。純仁又代之。

元祐八年九月。宣仁聖烈太皇太后崩。臨崩對上。謂大防。純仁等曰。老身歿後。必多有調戲官家者。宜勿聽之。公等亦宜早退。令官家別用。一番人。呼左右。問曾賜出社飯否。因曰。公等各去喫一匙。社飯。明年社

○元祐八年九月、宣仁聖烈太皇太后崩す。崩するに臨み、上に對し、大防・純仁等に謂ひて曰く、老身、歿せし後、必ず多く官家を調戲する者有らん。宜しく之を聽く勿かるべし。公等亦た宜しく早く退き、官家をして、別に一番の人を用ひしむべしと。左右を呼びて問ふ、曾て社飯を賜ひ出しや否やと。因りて曰く、公等各々去りて、一匙の社飯を喫し、明年社飯の時、老身を思量せよと。后、政を聽くこと九年、天下稱して女中の堯舜と爲す。外家に比せず、嗣君を擁し佑くるの故を以て、二子一女皆疎んぜらる。至公を以て、天下を御し、當世の賢者畢く朝に集まる。君子の盛んなること、後世、慶曆・元祐を以て並べ稱す。神宗、兵を厭へるの後を承けて、民と休息す。西蕃の鬼章、邊將の爲に擒へ、獻せらる。釋して誅せず、以て其部屬を招く。夏國、其主秉常卒し、乾順

飯時。思量老
身也。后聽政
九年。天下稱
爲女中堯舜。
不比外家。以
擁佑嗣君之
故。二子一女
皆疎。以至公
御天下。當世
賢者畢集于
朝。君子之盛
後世以慶曆
元祐並稱焉。
承神宗厭兵
之後。與民
休息。西蕃
鬼章爲邊將
擒獻。釋不
誅。以招其
部屬。夏國
自其主乘常
卒。乾順立。
政亂主幼。
屢寇邊。失
藩臣禮。皆
強臣爲之。
以其君民
非有罪。不
忍與師討
伐。詔諸路
嚴兵自備
而已。

立ちてより、政亂れ、主幼なり。屢邊に寇して、藩臣の禮を失ふ。皆強臣
之を爲し、其君民、罪有るに非ざるを以て、師を興して討伐するに忍びず、諸路
に詔し、兵を嚴にして自ら備へしむるのみ。

●天子を侮りてあそぶものありん 一 番は當時の俗語にて、一違即ち一交代の義、すつかりかはつた人の
意也 ● 宮中より出し賜はる秋の社日の飯 ● 因りて社飯を賜ひて曰く ● 自分の生家に私せず

上始親政。侍
郎楊畏。首叛
呂大防。自謂
述雖元祐。心
在熙豐。入對
乞召章惇。明
年改元紹聖。

○上始めて政を親らす。侍郎楊畏、首として呂大防に叛く。自ら謂へらく、
迹は元祐と雖も、心は熙豐に在りと。入對して章惇を召さんとを乞ふ。明年、
紹聖と改元す。大防罷められ、惇右僕射と爲る。純仁罷めらる。惇の來るや、
道にして陳瓘に遇ふ。惇素より其名を聞く。獨り共に載らんことを請ひ、訪ふに

大防罷。惇爲
右僕射。純仁
罷。惇之來也。
道遇陳瓘。惇
素聞其名。獨
請其載。訪以
世務。瓘曰。請
以所乘舟爲
喻。偏重其可
行乎。或左或
右。其偏一也。
惇默然良久。
曰。司馬光姦
邪。所當先辨。
瓘曰。相公誤
矣。此猶不欲
舟勢而移左
以置右也。果
然將失天下
之望。惇既至。

世務を以てす。瓘曰く、請ふ、乗る所の舟を以て喩へと爲さん。偏重なれば其
れ行る可けんや。或は左し、或は右せん。其偏は一也と。惇默然たり。良久
しくして曰く、司馬光の姦邪、當に先づ辨すべき所なり。瓘曰く、相公誤れ
り。此れ猶ほ舟の勢ひを平かにせんと欲して、左を移して以て右に置くがごと
き也。果して然らば、將に天下の望を失はんとすと。惇既に至るや、漸を以て
盡く熙豐の法を復し、元祐の人の罪を治すること、虛日無し、司馬光呂公著、
王巖叟趙瞻韓維孫固范百祿胡宗愈司馬康等、已に死せし者は、皆追貶して
贈を奪ひ、呂大防劉摯蘇轍梁燾范純仁劉奉世韓維王觀韓川孫升呂
陶范純禮趙君錫馬默顧臨范純粹孔武仲王欽臣呂希哲呂希純呂希績
姚勛吳安詩王份張耒龜補之黃庭堅賈易程頤秦觀朱光庭孫覺趙鼎
李之純杜純李周蘇軾范祖禹劉安世鄭俠等、皆連りに貶竄せらる。文彦
博、久しく致仕す。降りて、太子太保と爲り、節鉞を罷められ、尋きで薨す。皇后

以漸盡復二熙豐之法一。治二元祐人之罪一。無二虛日一。司馬光。呂公著。王巖叟。趙瞻。韓維。孫固。范百祿。胡宗愈。司馬康等。已死者。皆追貶奪二贈一。呂大防。劉摯。蘇轍。梁燾。范純仁。劉奉世。韓維。王觀。韓川。孫升。呂陶。范純禮。趙君錫。馬默。顧臨。范純粹。孔武仲。王欽臣。呂希哲。呂希純。呂希績。姚勛。吳安詩。王份。張耒。晁補之。黃庭堅。賈易。程頤。秦觀。朱光庭。孫覺。趙高。李之純。杜純。李周。蘇軾。范祖禹。劉安世。晁俠等。皆連貶竄。文彥博。久致仕。降二為太子太保一。罷二節鉞一。尋薨。皇后孟氏。太皇太后所二選聘也一。在中宮五年而廢。章惇。蔡卞。請二追廢太皇太后一。賴二太后向氏一。太妃朱氏泣諫。上悟。惇。卞。堅請二施行一。上怒。曰。卿等不欲二朕入一。英宗廟庭一乎。抵二其奏於地一。

立二賢妃劉氏一。為レ后。右正言鄭浩。乞二追一停二冊禮一。別二選中名族一。詔二浩除レ名勅一。停二羈一。營新州。浩道過二其友田畫一。臨別。出レ涕。畫正レ色。曰。使二君隱一。默官二京師一。遇二寒疾一。不レ汗。五日死矣。豈獨レ嶺海之外能死レ人哉。願二無一自沮。士所レ當レ為者未止レ此也。元符三年上崩。在位十五年。改元者三。壽三十五。皇弟立。是為二徽宗皇帝一。

孟氏は太皇太后の選レび聘レせし所也。中宮に在ると五年にして廢せらる。章惇。蔡卞。太皇太后を追廢せんと請ふ。太后向氏。太妃朱氏の泣レき諫むるに賴りて、上悟る。惇。卞堅く施行せんとを請ふ。上怒りて曰く、卿等、朕が英宗の廟庭に入ることを欲せざるかと。其奏を地に抵レつ。

○賢妃劉氏を立て、后と爲す。右正言鄭浩、冊禮を追停し、別に名族を選ばんとを乞ふ。詔して、浩は名を除きて勅停し、新州に羈管せしむ。浩、道に其友田畫に過り、別に臨みて涕を出す。畫、色を正して曰く、君をして隱默して京師に官たらしむとも、寒疾に遇ひて汗せすんば、五日にして死せむ。豈獨り嶺海の外のみ、能く人を死せしめんや。願はくは、自ら沮むこと無かれ。士の當に爲すべき所の者、未だ此に止まらざる也と。○元符三年、上崩す。在位十五年、改元する者三。壽三十五。皇弟立つ。是を徽宗皇帝と爲す。

- 事を行ふは元祐の今日に於てすと雖も
- 同貶せんと
- 一方に偏するとは
- 左方の重き物を節度使を賜めらる
- 皇后冊立の禮
- 停職
- 留めて其地を管せしむ
- 傷事
- 此後も忠諫すべき樹合あらん

徽宗皇帝

徽宗皇帝。名は侖、神宗の第十一子也。初の端王に封せらる。哲宗崩す。欽聖憲肅皇太后向氏、宰執を召して、嗣を立つることを議す。后、端王を立てんと

端王。哲宗崩。欽聖意肅皇太后向氏。召二宰執。議立嗣。后欲立端王。章惇曰。端王浪子耳。曾布身長。望見端王。已在。下。叱曰。章惇聽太后處分。王出。廉。惇惶恐。失措。王即位。請太后。權同處。分軍國事。范純仁等二十餘人。追復官。太后垂簾。半年而還政。章惇罷。尋竄。韓忠彥。曾布。左右僕射。貶。邢恕。

欲す。章惇曰く、端王は浪子のみと。曾布、身長し。望み見れば、端王已に簾下に在り。叱して曰く、章惇、太后の處分を聴けと。王、簾より出づ。惇、惶れ恐れて措を失す。王、位に即く。太后に請ひて、權に同じく軍國の事を處分せしむ。范純仁等二十餘人、竝に收斂せらる。龔夫・陳瑋・鄒浩、臺諫たり。韓忠彥、右僕射と爲る。忠彥は琦の子也。文彦博・司馬光等三十三人、官を追復せらる。太后、簾を垂るゝこと半年にして政を還す。章惇罷められ、尋ぎて竄せらる。韓忠彥・曾布、左右僕射と爲る。○邢恕を貶す。

●宰相執政 ●當時の俗語にて、かまはづみにて難見なき者の意 ●身のたけ高し ●まごついで爲す所を知らず ●前文に追貶の事見ゆ、竝に至りてまたもとの如く其官を復したる也 ●廟中に在りて政を聽くと

三十餘人。追復官。太后垂簾。半年而還政。章惇罷。尋竄。韓忠彥。曾布。左右僕射。貶。邢恕。

貶。蔡京。蔡卞。卞安石。婿也。先。是。臺諫。龔夫。陳瑋。任伯雨。等。攻。卞。罷。其。執政。京。爲。二。翰林。承旨。瑋。見。其。視。日。不。瞬。謂。此。人。必。大。貴。然。以。其。區。區。精神。敢。抗。太。陽。他。日。得。志。必。爲。天。下。患。瑋。語。人。曰。射。人。先。射。馬。擒。賊。先。擒。王。連。疏。攻。之。甚。力。京。罷。尋。又。以。御。史。陳。次。升。等。言。與。卞。俱。貶。

○蔡京・蔡卞を貶す。卞は、安石の婿也。是より先、臺諫龔夫・陳瑋・任伯雨等、卞を攻めて、其執政を罷めしむ。京、翰林承旨と爲る。瑋、其の日を視て瞬せず。を見、謂ふ、此人必ず大に貴からん。然れども其區區たる精神を以て、敢て太陽に抗す。他日、志を得ば、必ず天下の患を爲さんと。瑋、人に語りて曰く、人を射んとせば先ず馬を射よ。賊を擒にせんとせば先づ王を擒にせよと。連に疏して之を攻むること甚だ力めしかば、京罷めらる。尋ぎて又御史陳次升等の言を以て、卞と俱に貶せられぬ。

上意專欲紹二。述熙豐之政。而曾布微有下。兩存熙豐元祐。之。意。故。建。

○上の意、専ら熙豐の政を紹述せんと欲す。而るに曾布は微かに熙豐・元祐兩ながら存するの意有り。故に建中靖國の初、嘗て略々章惇・蔡卞の爲し、所を變ず。既にして、布、上の旨を迎へしかば、正人任伯雨、江公望・陳瑋等、朝に容れ

中靖國初。嘗略變三章。惇蔡卞所爲。既而布迎上旨。正人任伯雨。江公望。陳瓘等不容於朝。小人雖各有黨。更迭出入。意向則同。祖安石而已。

●先人の志をつぎ、其政を興復す ●四字の年號也

遼主弘基。祖號道宗。孫延禧立。號天祚。女眞阿骨打立。女眞本名朱里眞。肅慎之遺種。而渤海之別族也。或曰。本姓挾辰韓之後。三國志所謂挾婁。元魏所謂

遼主弘基殂す。道宗と號す。孫延禧立つ。天祚と號す。女眞の阿骨打立つ。女眞、本の名は朱里眞といふ、肅慎の遺種にして、渤海の別族也。或は曰く、本姓は挾辰韓の後、三國志に所謂挾婁、元魏に所謂勿吉、唐に所謂黑水靺鞨といふ者、其地也と。七十二の部落あり、本相統べず。太中祥符より以後、絶えて中國と通ぜず。生女眞といふ者有り、其類猶繁し。其酋を嚴版と曰ふ。孫有り、楊哥太師と曰ふ。遂に諸部に雄たり。或は曰く、楊割の先は、新羅の人完顔氏なり、女眞之に妻はすに女を以てす。子二人を生む。長を胡來と曰ふ。三人に傳へて楊割

に至る。阿骨打は其子也と。人となり沈毅にして、大志有り。

●酋長 ●沈者にして剛毅

勿吉。唐所謂黑水靺鞨者其地也。有七十二部落。本不相統。自太中祥符以後。絶不與中國通。有生女眞者。其類猶繁。其酋曰嚴版。有孫曰楊哥太師。遂雄諸部。或曰。楊割之先。新羅人完顔氏。女眞妻之。以女生子二人。長曰胡來。傳三人。而至于楊割。阿骨打其子也。爲人沈毅。有三大志。

○建中靖國、一年にして崇寧と改む。韓忠彦罷めらる。再び司馬光等の官を追奪し、元祐の黨人を籍す。○會布罷めらる。蔡京、相と爲り、蔡卞、政を執る。再び元祐の人を貶竄し、姦黨の碑を立つ。京、崇寧より僕射と爲り、大觀・政和・重和を歴て、大師と爲る。嘗て暫く罷められ、輒ち復た入る。罷められし日と雖も、實は國命を執れり。其間、趙挺之・張商英、相と作り、嘗て京と異なり。然れども位に在ること各々數月に過ぎず、或は一年にして罷めらる。何執中・鄭居中・劉正夫・余深の如きは、相位に在りと雖も、或は久しく或は淺く、居中も

建中靖國。一年而改崇寧。韓忠彦罷。再追奪司馬光等官。籍元祐黨人。會布罷。蔡京爲相。蔡卞執政。再貶元祐人。立姦黨碑。京自崇寧爲僕射。歷大觀。政和。

重和爲大師。嘗暫罷。輒復入。雖罷之日。實執國命。其開趙挺之。張商英作相。嘗與京異。然在位各不過數月。或一年而罷。如二何執中。鄭居中。劉正夫。余深。雖在相位。或久或淺。居中亦與京異。常相排。正夫亦小異。然於京之權寵。無損也。京子攸之婦。出入宮禁。攸遂

亦た京と異にして、常に相排し、正夫も亦た小異なり。然れども京の權寵に於て損すること無し。京の子攸の婦、宮禁に出入す。攸、遂に大に用ひられ、父子權勢自ら相軋るに至る。上、攸を寵して、京の子弟親戚を尊ぶ。滿朝皆其父子の黨なり。京、邪説を倡ふ。以爲らく、豐亨豫大の運に當ると。専ら奢侈を以て上に勧め、土木の功を窮極し、京城を廣め、大内を修め、盛に内苑を築き、九鼎を鑄る。鼎成りて、九州の水土を以て鼎中に納る。北方の寶鼎を奉安するに及びて、忽ち水外に漏る。大晟樂を作る。玉清神霄宮を作り、道士林靈素を崇め信じ、上を策して教主道君皇帝と爲し、延福宮を作り、保和殿を作り、萬歲山を作る。朱勳を以て花石綱を領せしめ、奇石異木怪石珍禽奇獸、遠しとして致さざることを無し。民間の一花一木の妙も、輒ち上供せしむ。一花に數千緡を費し、一石に數萬緡を費す者有り。二十年間、山林高く深くして、藥鹿羣を成す。良嶽と改名す。又、村居、野店、酒肆、青帘を其間に爲り、毎歲冬至の後、

即ち燈を放ち、縱に飲博せしむ。之を、先づ元宵を賞すと謂ふ。

● 意見を異にす ● ちとしりぞく ● 權勢と上の寵 ● 易に、豐亨(トホ)る、王之れに假(イタ)る ● 意あり、又、豫の時と義とは大なるかなとあり。今や天下富むを以て、奢侈にして欲する所を遠しくするも切げずとの意と曲解せる也 ● 花卉石材を舟載して淮水・汴河を運漕すると ● 大鹿や小鹿 ● 酒家の軒に掲ぐるしるしの青旗 ● 飲酒博奕 ● 正月十五日の夜

大用。至父子。權勢自相軋。上寵攸而尊。京子弟親戚。滿朝皆其父子之黨。京倡邪説。以爲當。豐亨豫大之運。專以奢侈勸上。窮極土木之功。廣京城。修大内。盛築內苑。鑄九鼎。鼎成。以九州水土納鼎中。及奉安北方寶鼎。忽水漏于外。作大晟樂。作玉清神霄宮。崇信道士林靈素。策上爲教主。道君皇帝。作延福宮。作保和殿。作萬歲山。以朱勳領花石綱。奇石異木怪石珍禽奇獸。無遠不致。民間一花一木之妙。輒令上供。有一花費數千緡。一石費數萬緡。者二十年間。山林高深。藥鹿羣。改名良嶽。又爲村居野店酒肆青帘於其間。每歲冬至後。即放燈。縱令飲博。謂之先賞元宵。

時星芒屢見。地震河決。怪異迭出。半以爲常。京等誣奏。甘露降。祥

○時に、星芒屢々見はれ、地震ひ河決す。怪異迭ひに出で、率ね以て常と爲す。京等誣奏す、甘露降り、祥雲現はれ、飛鶴空を蔽ひ、竹紫の花を生じ、芝草、良嶽に産し、及び諸州に連理の木、雙花の芙蓉、芍薬、牡丹有り。臘月の雷、

雲現。飛鶴蔽空。竹生紫花。芝草產于良嶽。及諸州連理木。雙花美渠芍藥牡丹。至指臘月雷。三月雪。皆稱瑞表。賀上內侍童貫。梁師成用事。師成專務。應奉。以蠱上心。勢焰熏灼。竊威福於中。童貫專務。開邊。生事於外。皆與蔡京父子相表裏。

三月の雪を指して、皆瑞と稱し、表賀するに至る。○内侍童貫・梁師成、事を以て用ふ。師成、専ら應奉を務めて、以て上の心を蠱はす。勢焰熏灼し、威福を中に竊む。童貫、専ら邊を開くを務め、事を外に生ず。皆、蔡京父子と相表裏す。

- 蠱星 ● 堤きれ水漲る ● 偏り發す ● めてたき雲 ● 蠱芝 ● 二本の木、根が別にて幹の一體にされるもの ● 一室に二花ある蓮 ● 十二月 ● 上の意を迎ふること ● 勢の極めて盛んなるをいふ ● 宮中 ● 邊境の開拓 ● 内外氣脈を通じて患害を成す

女眞阿骨打。以重和元年戊戌稱帝。初遼主天祚。刑賞僭濫。荒於禽色。歲索名鷹海東青於

○女眞の阿骨打、重和元年戊戌を以て帝と稱す。初め遼主天祚、刑賞僭濫、禽色に荒み、歲ごとに名鷹海東青を女眞に索む。女眞、其隣東北の五國と戰闘し、乃ち能く此禽を獲て以て獻す。其援に勝へず。阿骨打遂に叛き、混同江東の寧江州を攻め陷る。遼、將を遣し之を討ちて敗る。又中京、上京、長春、西遼、

女眞。女眞與其隣東北五國戰闘。乃能獲此禽。以獻。不勝其擾。阿骨打遂叛。攻陷混同江東之寧江州。遼遣將討之。而敗。又起中京。上京長春。西遼四路兵。並進。獨洮流河一路。深入大敗。三路皆退。女眞悉虜遼東界熟女。鐵騎益衆。天祚親征。復大敗。女眞乘勝。并渤海遼陽五十四州。又度遼西。降五州。阿骨打遂建號。改名。旻。國號大金。明年破遼。上京。

四路の兵を起して、並に進む。獨り洮流河の一路、深く入りて大敗す。三路皆退く。女眞、悉く遼の東界の熟女眞を虜にす。鐵騎、益々衆し。天祚、親征して、復た大に敗る。女眞勝に乗じて、渤海・遼陽五十四州を并せ、又遼西を度りて五州を降す。阿骨打遂に號を建て、名を旻と改め、國を大金と號す。明年遼の上京を破る。

- 海東青といふ名高き鷹 ● わづらはしき ● 遼東に服屬せる女眞の稱

高麗來求。上遣二。還奏。實非。國將與女眞

○高麗來りて鑿を求む。上、二鑿を遣して往かしむ。還り奏す、實は鑿を求むるに非ず。乃ち彼、中國の將に女眞と契丹を圖らんとするを知り、謂ふ、苟くも契丹を存せば、猶ほ中國の爲に邊を捍ぐに足らん。女眞は狼虎なり。交る可からず。

圖契丹謂苟存契丹猶足爲中國捍邊女真狼虎不可交宜早爲之備上聞之不樂上嘗徵行都市酒肆妓館正字曹輔上言編管郴州

宜しく早く之が備を爲すべしと。上之を聞きて樂ます○上嘗て都市の酒肆、妓館に徵行す。正字曹輔、上言す。郴州に編管せらる。

其地に編管管せらるる、姦、罪を以て地方に流さるるをいふ當時の語也

童貫自崇寧開與王詔之子領兵復遼州任責借置邊事已而復鄆州廓州貫遂建節爲宣撫既得志於四邊遂謂北邊亦可圖政和初乃自請奉使覘遼國

○童貫、崇寧の閒より、王詔の子と兵を領して遼州を復し、責に邊事を措置すること任ず。已にして、鄆州・廓州を復す。貫、遂に節を建て、宣撫と爲る。既に志を西邊に得たり、遂に謂ふ、北邊も亦た圖る可しと。政和の初、乃ち自ら請ひて、使を奉じて遼國を覘ふ。燕人馬植といふ者有り、燕を滅すの策を陳す。貫、挾みて以て歸る。姓名を趙良嗣と更む。燕を復するの議遂に起る。政和の末、漢人の海に泛びて來る有り、具に女眞、遼を攻むるの事を言ふ。重和の春、乃ち蔡京、童貫の議を用ひ、馬政を遣し、海道より阿骨打が居る所の阿

有燕人馬植者陳滅燕之策貫挾以歸更姓名趙良嗣復燕之議遂起政和末有漢人泛海來具言女眞攻遼事重和春乃用蔡京童貫議遣馬政由海道至阿骨打所居阿芝川涑流河與曠共攻遼阿骨打遂遣使來宣和初至京詔京貫諭以夾攻取燕之意差

芝川、涑流河に至らしめ、與に共に遼を攻めんことを議す。阿骨打、遂に使を遣して來らしむ。宣和の初、京に至る。京・貫に、詔して、諭すに、夾み攻めて燕を取るの意を以てし、軍校呼慶を差して、其使を送らしむ。海道より國に歸る。是歲、王黼、相と爲り、力めて遼を攻むるの策を贊す。呼慶、復た金使と來るに及ぶ。時に阿骨打、上京に在り。遂に良嗣を遣して往かしめ、約すらく、金國は遼の中京を取り、本朝は燕京を取らん。歲幣は遼に與ふるの數の如くせん。良嗣曰く、燕京一帯は、則ち西京を併せて是れ也と。金主も亦た之を許し、札を以て良嗣に付す。期するに、女眞の兵は平地松林より古北に趨き、南兵は白溝より夾み攻むるを以てす。良嗣歸る。馬政、復た子擴と、國書を持して往き、彼此の兵、關を過ぐることを得ざるを訂す。未だ幾くならず、金使復た來る。又、國書を以て、就きて其使に付し、國に歸らしむ。時に、淮南・京西・河北・江南、相繼ぎて盜起る。山東の宋江方に招安に就き、睦の寇方臘、連りに浙郡を

陷る。中都爲に震ふ。童貫、甫めて方臘を平らけて北事作る。

● 邊境の事を處理するの責に任ず ● その者を召し連れて歸る ● 毎年の幣物 ● 書札を良嗣に渡し條約を訂結す ● 北征事件

軍校呼慶送其使。由海道歸國。是歲王歸爲相。力贊攻遼之策。及呼慶復與金使來。時阿骨打在二上京。遂遣良嗣往。約金國取遼中京。本朝取燕京。歲幣如與遼之數。良嗣曰。燕京一帶。則併二西京是也。金主亦許之。以札付良嗣。期以下女眞兵自平地松林。趨古北。南兵自白溝夾攻。良嗣歸。馬政復與子擴持二國書往。訂彼此兵不得過關。未幾金使復來。又以國書就付其使。歸國。時淮南京西河北江南相繼盜起。山東宋江方就招安。睦寇方臘。連陷浙郡。中都爲震。童貫甫平方臘而北事作矣。

金人悉師度遼。趨中京。攻陷之。中京者故奚國也。遂引兵至松亭關。以與宋有各不通過之約。引兵由其西而過。遼金人、師を悉して遼を度り、中京に趨きて之を攻め陷る。中京は、故の奚國也。遂に兵を引きて松亭關に至る。宋と各々關を過ぎざるの約有るを以て止まり、兵を引きて其西よりして過ぐ。遼主、先に已に引き避く。或ひと言ふ、金の前鋒將に至らんとすと。遼主震ひ驚き、亟かに雲中に奔り、夾山に入る。時に、燕王淳、燕を守る。蕭幹、淳を立て、主と爲す。宋の童貫、蔡攸、師を帥めて、

主先已引避。或言。金前鋒將至。遼主震驚。亟奔雲中。入夾山。時燕王淳守燕。蕭幹立淳爲主。宋童貫蔡攸帥師。東路至白溝。西路至范村。蕭幹迎戰。甚力。宋師敗退。耶律淳死。宋師再舉。遼涿州將郭藥師領常勝軍來降。宋兵五十萬進駐盧溝河。蕭幹拒之。藥師聞

東路は白溝に至り、西路は范村に至る。蕭幹、迎へ戦ひて甚だ力む。宋の師敗れ退く。耶律淳死す。宋の師再舉す。遼の涿州の將郭藥師、常勝軍を領して來り降る。宋兵五十萬、進みて盧溝河に駐まる。蕭幹、之を拒ぐ。藥師、問道より燕を襲ふ。幹、還り救ひて死闘す。藥師、屢々敗れ、僅かに身を以て免れ、遁れ還る。盧溝の師遂に潰ゆ。貫、攸、功無くして罪を獲んことを懼る。時に金主、奉聖州に在り。乃ち客を遣はして、金主に之を圖らんとを請む。金主、三道に分ちて兵を進め、遂に居庸關に入る。燕、金に降る。金使來り言ふ、燕京は金の兵を以て攻め下す。其地は宋に與へ、租税は當に以て金に輸すべしと。宋の使趙良嗣、往きて之を議す。歲幣を許すこと契丹の如くし、舊數の外、更に百萬を以て租税に代へ、而して併せて雲中の地を求む。金人、僅に燕京と涿・易・檀・順・景・薊の六州とを以て來歸す。貫、攸、燕に入る。燕の金帛、子安、職官、民戸は、金人、席卷して東し、得る所は空城のみ。貫、攸、歸る。王安中を以て燕

道府に知らしめ、詹度・郭藥師、同知たり。

●死物ぐるひとなりて取ふ ●其地よりの租税は金の方へ送る ●地を宋に與へたる以上當然其地の租税をも與ふべきを請す ●其語に従はざりし故、諸々の幣物を許すこと嘗て契丹と約せしが如くし ●契丹と契約したる時の歌 ●片はしより採め取る

道襲燕。幹還救死關。藥師屢敗。盧以身免。遁還。盧溝之師遂潰。貫攸懼。無功獲罪。時金主在奉聖州。乃遣客誘金主圖之。金主分三道進兵。遂入居庸關。燕幣如契丹。舊數外更以百萬代租稅。而併求雲中之地。金人僅以燕京涿州順景薊六州來歸。貫攸入燕。燕之金帛子女。職官民戶。金人席卷而東。所得空城而已。貫攸歸。以安中知燕山府。詹度郭藥師同知。

有星如月。徐徐南行而落。光照人物。與月無異。修神保觀。其神都人素畏之。傾城男女負土以獻。名曰獻土。又有飾作

○星有り、月の如し。徐徐として南に行きて落つ。光、人物を照し、月と異なること無し。○神保觀を修す。其神、都人素より之を畏る。傾城の男女、土を負ひて以て獻じ、名づて獻土と曰ふ。又鬼使を飾り作り、土を納るゝことを催す者有り。上亦た微服して之を観る。後數日、旨ありて禁す。○京師・河東・陝西、地震ひ、宮中の殿門搖ぎ動き、且つ聲有り。蘭州の草木没入し、山下の麥苗乃ち山上に在

り。

●俗に二郎神と稱する神也 ●城内踊らザの男女

鬼使催納土者。上亦微服觀之。後數日旨禁。京師河東陝西地震。宮中殿門搖動。且有聲。蘭州草木没入。山下麥苗乃在山上。

金國無城郭宮室。用契丹舊禮。如結綵山。作倡樂。鬪鷄擊鞠之戲。與中國同。但於衆樂後。飾舞女數人。兩手持鏡。類電母。其國茫然。皆芟舍以居。至是方營大屋數千間。盡倣中國所爲。

○金國、城郭宮室無し。契丹の舊禮を用ひ、結綵山に如きて倡樂を作す。鬪鷄、擊鞠の戲、中國と同じ。但だ衆樂の後に於て、舞女數人を飾り、兩手に鏡を持たしめて、電母に類す。其國茫然たり。皆芟舍して以て居る。是に至りて、方に大屋數千間を營み、盡く中國の爲す所に倣ふ。○兩京河浙の路、災異、疊見す。都城に青菓を賣る男子有り。孕みて子を誕む。又豐樂樓の酒保朱氏有り。其妻年四十、忽ち髭髯を生じ、長さ六七寸、宛として一男子なり。詔して、度して女道士となす。

●芝居や音樂 ●いなぐま也、俗説に、電の光は電母の鏡を持つなりといふ ●野原のひるくとしたる狀 ●草にて屋を葺く ●つゞけざまにあらはる ●あだかも ●得度

兩京河浙路。災異疊見。都城有下賈青菜二男子。孕而誕子。又有豐樂樓酒保朱氏。其妻年四十。忽生三鬚鬣。長六七寸。宛一男子。詔度爲女道士。

河北山東盜起。連歲凶荒。民食榆皮。野菜不給。至相食。饑民竝起。爲盜。有張仙者。衆十萬。張迪衆五萬。高托山衆三十萬。自餘二三萬者。勝於計。可からず。○金主。帝と稱す。六年にして殂す。太祖大聖武元皇帝と號す。弟吳乞買立つ。名を晟と改む。

○燕山の地、易州の西北は乃ち金坡關、昌平の西は乃ち居庸關、順州の北は乃ち古北關、景州の北は乃ち松亭關、平州の東は乃ち險關、險關の東は乃ち金人の來路なり。凡そ此數關は、天、蕃と漢とを限れり。之を得ば、則ち燕の境保つ可

燕山之北。乃松亭關。平州之東。乃險關。險關之東。乃金人來路。凡此數關。天限蕃漢。得之則燕境可保。然關內之地。平滌營三州。自後唐爲契丹阿保機一所陷。以營深。隸平。爲平州路。得燕而不得平州。則關內之地。蕃漢雜處。而燕爲難保矣。遼張敦守平州。

○河北關。景州之北。乃松亭關。平州之東。乃險關。險關之東。乃金人來路。凡此數關。天限蕃漢。得之則燕境可保。然關內之地。平滌營三州。自後唐爲契丹阿保機一所陷。以營深。隸平。爲平州路。得燕而不得平州。則關內之地。蕃漢雜處。而燕爲難保矣。遼張敦守平州。

し。然れども、關内の地、平・深・營の三州は、後唐、契丹の阿保機の爲に陥れられしより、營・深を以て平に隸し、平州路と爲す。燕を得て平州を得ずんば、則ち關内の地、蕃漢雜處して、燕、保ち難しと爲す。遼の張鼓、平州を守る。金、已に人を遣して鼓を招く。鼓曰く、契丹凡そ八路あり。今特だ平州存するのみ。敢て異志有らんやと。既にして乃ち平州を以て南附す、宋遽に之を納る。趙良嗣力め争ふ。以爲らく、必ず金の兵を招かんと。金人、謀して知り、即ち平州を襲ひて之を陥る。宋の詔札を得たり。是れより曲を歸し、檄を累ねて、鼓を取らんとす。已むことを得ず、王安中に命じて之を縊らしめて、其首を函送す。未だ幾くならず、金の太子幹離不、已に平州路より將に燕に入らんとす。宋方に且つ人を遣し、密に天祚を誘ひて來り降らしめ、童貫を以て兩河燕山路を宣撫せしめ、將に天祚を迎へんとす。金人方に退く。天祚、陰夾山に入らんとす。得べからず。是に至りて、衆を領して南に出で、遂に金人の爲に敗られて、禽に就く。

契丹、阿保機より天祚に至るまで、九世にして亡ぶ。時に宣和七年、乙巳の歳也。

- えびすと中国
- 南のかた中国に附きたがふ
- 問答を入れて
- 宋に曲ありとして責む
- 敵文を連發す
- はこに入れて送る

金已遣人招。凡八路。今特平州存耳。敢有異志。既而乃以平州。南附。宋遣納之。趙良嗣力爭。以爲必招金兵。金人諜知。即襲平州。陷之。得宋詔札。自是歸曲。累徵取。不得。已。命王安中。綏之。而面送其首。未幾。金太子幹離不。已由平州路。將入燕。宋方且遣人。密誘天祚。來降。以童貫。宣撫。兩河。燕山。路。將迎天祚。金人方退。天祚入陰。夾山。不可得。至是。領衆南出。遂爲金人所敗。就禽。契丹自阿保機。至天祚。九世而亡。時宣和七年。乙巳歲也。

是冬金幹離不粘罕分道而南。幹離不陷燕山。郭藥師降之。金兵長驅而進。郭藥師爲前驅。

是冬、金の幹離不・粘罕、道を分ちて南す。幹離不、燕山を陷る。郭藥師之に降る。金兵長驅して進む。郭藥師爲に前驅す。童貫、太原より逃れ歸る。粘罕、太原を圍む。太原の帥張孝純、歎じて曰く、平時、童大師、多少の威重を作す。乃ち畏れ怯るゝこと此の如し。身、大臣と爲りて、難に死すること能はず、

童貫自太原。逃歸粘罕。圍太原。太原帥張孝純歎曰。平時童大師。作多少威重。乃長怯如此。身爲大臣。不能死難。何面目見天下士。孝純以冀景守關。知朔寧府孫翊來救。兵不滿二千。與金人一戰于城下。張孝純曰。賊已在近。不敢開門。觀察可盡忠報國。翊曰。但恨兵少耳。乃復引戰。金人大沮。再益兵。力不能敵。翊死焉。無一騎

何の面目ありて天下の士に見えんと。孝純、冀景を以て關を守らしむ。知朔寧府孫翊、來り救ふ。兵二千に滿たず。金人と城下に戰ふ。張孝純曰く、賊已に近きに在り。敢て門を開かず。觀察、忠を盡し國に報ず可し。翊曰く、但だ兵少きを恨むのみと。乃ち復た引きて戰ふ。金人大に沮む。再び兵を益す。力敵すること能はず。翊、死す。一騎の背て降るもの無し。時に、王翮、先つこと一年、已に罷められて、白時中・李邦彥、竝に相たり。皆鄙夫也。金兵の來るや、時中但だ出奔の策を建るのみ。上、内禪す。位に在ること二十六年。改元する者六、曰く建中靖國、曰く崇寧・大觀・政和・重和・宣和。太子立つ。是を欣宗皇帝と爲す。

- 朔寧府の知事の孫翊
- 兵を引ききて
- 心のいやしき男
- 位を太子にゆづる

肯降。時王輔先一年已罷。面白時中。李邦彦並相。皆鄙夫也。金兵來。時中但建出奔之策而已。上內禪。在位二十六年。改元者六。曰建中靖國。曰崇寧。大觀。政和。重和。宣和。太子立。是爲欽宗皇帝。

欽宗皇帝

欽宗皇帝。名是桓。東宮に在りて失徳無し。蔡京・童貫の輩、成な之を憚る。動かし搖かさんと欲すれども不可なり。是に至りて位に即く。大學生陳東等、闕に伏して上書し、蔡京・童貫・王輔・梁師成・李彦・朱勳の六賊を誅して以て天下に謝せんことを乞ふ。彦は、民田を根括し、百姓を破蕩せしを以て、怨を河北と京の東・西との三路に結べる者也。勳は、花石綱を以て所在騷動し、怨を東南に結べる者也。靖康元年、首として、輔・勳・彦を竄し、尋ぎて皆之を殺す。

● 田を根本よりしらべ、地勢面より餘分なるものは之を沒收す ● 破滅し盡す ● 七五四頁に出づ

騷動。結怨於東南者也。靖康元年。首竄輔勳彦。尋皆殺之。

○狐の御榻に升りて坐する者有り。詔して狐王廟を毀たしむ○上皇應天府に奔る○李綱を以て行營使と爲し、城守の策を定めしむ○元祐の黨籍を除き、范中淹・司馬光等に官を追贈す○白時中罷められ、李邦彦・張邦昌、相と爲る。

● 天子の廢置 ● 狐を祀りたる廟 ● 黨人の籍

有狐升御榻而坐者。詔毀狐王廟。上皇奔應天府。以李綱爲行營使。定城守策。除元祐黨籍。追贈范仲淹。司馬光等官。白時中罷。李邦彦。張邦昌爲相。

春正月。幹離不抵京師。先是。朝廷遣李鄴求和。幹離不携鄴以攻京城。不克。乃遣王洵與鄴偕來。邦彦等○春正月、幹離不京師に抵る。是より先、朝廷李鄴を遣して和を求む。幹離不、鄴を携へて以て京城を攻む。克たず。乃ち王洵を遣し、鄴と偕に來らしむ。邦彦等、皆和を主とす。惟綱のみ戰はんと欲す。上邦彦の計を是とし、鄴望之を遣して出で、使せしむ。未だ至らずして王洵に遇ひ、與に俱に入り見ゆ。又李梲を遣して出で、使せしむ。梲、又、金の使と偕に來る。金人、軍を輜ふ金五百萬

皆主和。惟綱
 欲戰。上是邦
 彦之計。遣鄭
 望之出使。未
 至而遇王訥。
 與俱入見。又
 遣李稅出使。
 稅又與金使
 偕來。金人需
 輜軍金五百
 萬兩。銀五千
 萬兩。牛馬萬
 頭。表段百萬
 匹。割中山河
 間太原三鎮
 地二十餘郡。
 且欲宰相親
 王爲質。遣張
 邦昌副康王。
 如其營。金國

兩、銀五千萬兩、牛馬萬頭、表段百萬匹と、中山・河間・太原、三鎮の地二十餘郡を
 割かんことを需め、且つ宰相・親王を質と爲さんと欲す。張邦昌をして、康王に
 副として其營に如かしむ。金國の太子、康王と同じく射る。連發三矢皆皆に中る。
 金人謂ふ、是れ將家の子にして、親王に非ずと。歸らしめ、更めて肅王を請ひて
 質と爲す。种師道等、諸路の勤王の兵至る。師道奏すらく、京城は周回八十里、
 城の高さ數十丈、粟數年を支ふ。宜しく城内に寨を劄して拒ぎ守り、困むを俟
 ちて之を撃つべしと。綱も亦た奏す、金、孤軍を以て深く入る。虎の檻に投ずる
 が如し。與に一旦の力を角ぶ可らず。縦ち歸らしめて之を撃たば、必勝の計な
 らんと。上、之れを然りとす。而るに李邦彦、吳敏等は、専ら和を主とし、議論
 一ならず。虜をして、汝が議論定まるの時を待たば、我已に河を渡らんの讖あ
 らしむるを致せり。

● 綱の表衣と爲すべきもの、綱 ● 後の矢が前の矢の矢管にあると也 ● とりてを致す

太子與康王同射。連發三矢。皆中。答。金人謂。是將家子。非親王。遣歸。更請肅王爲質。种師
 道等諸路勤王兵至。師道奏。京城周回八十里。城高數十丈。粟支數年。宜與城内劄寨。拒
 守。俟困擊之。綱亦奏。金以孤軍深入。如虎投檻。不可與角。一旦之力。縱歸擊之。必勝之計。
 上然之。而李邦彦、吳敏等專主和。議論不一。致虜有待。汝議論定時。我已渡河之讖。

未幾統制官
 姚平仲宵攻
 金營。不克。上
 大驚懼。廢行
 營。罷李綱。以
 謝金人。大學
 生陳東及都
 人數萬。伏闕
 乞復用綱。得
 旨復右丞。充
 守禦使。衆乃
 散。金使復來。
 乃以下割三鎮
 詔書。遣使持
 往。時括在京

未だ幾くならず、統制官姚平仲、宵に金の營を攻む。克たず。上、大に驚懼
 し、行營を廢し、李綱を罷めて、以て金人に謝す。大學生陳東及び都人數萬、
 闕に伏して、復た綱を用ひんことを乞ふ。旨を得て右丞に復し、守禦使に充つ。
 衆乃ち散す。金の使復た來る。乃ち三鎮を割くの詔書を以て、使を遣して持ち
 往かしむ。時に京に在る金を括して、僅かに二十餘萬兩、銀四百餘萬兩を得た
 り。藏蓄已に空し。金人、京城を圍むこと、凡そ三十三日、地を割くの詔を
 得、金幣の數の足るを俟たずして退く。种師道、河に臨みて之を要撃せんと請ふ。
 綱も亦た以爲らく、彼の兵六萬にして、我が勤王の師は二十餘萬なり。其半ば渡
 るを縱して之を撃たば、必ず勝たんと。邦彦等従はず。惟三鎮に詔して、仍

金。僅得二十餘萬兩。銀四百餘萬兩。藏蓄已空。金人圍京城。凡三十日。得割地。詔不俟金幣數足而退。种師道請臨河要擊之。綱亦以爲。彼兵六萬。而我勤王之師二十餘萬。縱其半渡而擊之。必勝。邦彦等不從。惟詔三鎮。仍堅守不割。

堅く守らしめて割かず。

●上の許可の旨を得て ●在京の者の金を總括して ●地を割き與へず

京師受圍時。梁師成已誅。至是竄蔡京於儋州。至潭而死。年八十。蔡攸竄萬安軍。尋有詔。即所在斬之。童貫亦遠竄。追斬於南雄。李邦彦罷。張邦昌。吳敏竝相。邦昌罷。徐處仁相。處仁敏罷。唐恪相。恪罷。何臬相。

○京師圍を受けし時、梁師成已に誅せらる。是に至りて蔡京を儋州に竄す。潭に至りて死す。年八十。蔡攸、萬安軍に竄せらる。追ひて南雄に斬る○李邦彦罷めらる。張邦昌、吳敏、竝に相たり。邦昌罷められ、徐處仁相たり。處仁、敏、罷められ、唐恪相たり。恪罷められ、何臬相たり。

● 其在る所に就きて ● 要の古字

● 邦彦罷。張邦昌。吳敏竝相。邦昌罷。徐處仁相。處仁敏罷。唐恪相。恪罷。何臬相。

上皇歸京師。數月金兵復至。幹離不由。東路先抵京師。粘罕由西路陷隆德。太原府。汾澤州。平定軍。平陽府。河南府。河陽府。鄭州。懷州。抵京師。張叔夜等統兵赴闕。唐恪、耿南仲、專主和議。曰。今百姓困匱。養數十萬於城下。何以給之。乃止。各道兵毋得

○上皇京師に歸る。數月にして金の兵復た至る。幹離不、東路より眞定を陥れ、長驅して先づ京師に抵る。粘罕、西路より、隆德・太原府・汾澤州・平定軍・平陽府・河南府・河陽府・鄭州・懷州を陥れ、京師に抵る。張叔夜等、兵を統べて闕に赴く。唐恪、耿南仲、専ら和議を主とす。曰く、今百姓困み匱し。數十萬を城下に養はば、何を以て之に給せんと。乃ち各道の兵を止めて、動くことを得る勿らしむ。京師、十一月圍を受けしより凡そ四十日、卒郭京といふ者有り。言ふ、能く六甲の法を用ひて、粘罕・幹離不を生擒せんと。盡く守禦の人をして城を下らしめ、獨り城樓の上に坐し、親兵數百を以て自ら衛る。俄頃にして金人鼓譟して進む。京、衆を給きて曰く、須らく自ら城を下りて法を作すべしと。因りて餘兵を引ききて南に遁る。虜兵、城に登る者纔かに四人。衆皆披き靡きて大に潰ゆ。上、城陥ると聞き、慟哭して曰く、朕、种師道の言を用ひずして、以て此に至れりと。時に師道前つこと一月にして卒せり。

勳。京師自二十一月受圍。凡四十日。有二卒郭京者。言能

● 數十萬の兵を ● 遁甲の法、六甲は甲子、甲寅、甲辰、甲午、甲申、甲戌也、甲年生れの兵七千七百七十七人を以てこの法を行ふといふ ● いげどり ● 遁甲の法 ● 金の兵の城に入るもの儀か四人に過ぎざるは早くも之に恐れなびきたりと也

用六甲法。生擒粘罕。幹離不。盡令守禦人下城。獨坐城樓上。以親兵數百自衛。俄頃金人鼓譟而進。京給衆曰。須自下城作法。因引餘兵南遁。虜兵登城者纔四人。衆皆披靡大潰。上聞城陷。慟哭曰。朕不用神師道言。以至於此。時師道前一月卒矣。

護駕人猶有萬餘。馬亦數千。張叔夜連戰四日。斬其貴將一人。欲護駕突圍而出。上惑於和議。不定。士卒號哭而散。虜使劉晏請上出城。都民爭

駕を護るの人猶ほ萬餘有り。馬亦た數千。張叔夜、連戰四日、其貴將一人を斬る。駕を護り圍を突きて出でんと欲す。上和議に惑ひて定まらず。士卒號哭して散す。虜の使劉晏、上に城を出でんとを請ふ。都民争ひ入り、護して之を食ふ。何桌、都民を率ゐて巷戰せんと欲す。聞く者争ひ奮ふ。金人は由りて兵を飲めて下さず、惟地を割き金幣を責むるの和議を以て辭と爲し、以て戰守の計を誤らしめんとす。侍郎耿南仲、力めて和を議するを主とす。上、以て然りと爲し、遂に其計に墮つ。二元帥、上皇と相見んことを請ふ。上曰く、上皇驚

入。鬻而食之。何桌欲下率都民巷戰。聞者争奮。金人由是斂兵不下。

き憂ひて已に病めり。朕當に自ら往くべしと。遂に青城に如きて之を見、二宿して返る。

惟以下割地。資金幣。和議爲辭。以誤戰守之計。侍郎耿南仲力主議和。上以爲然。遂墮其計。二元帥請與上皇相見。上曰。上皇驚憂已病。朕當自往。遂如青城。一見之。二宿而返。

● 上位の大將 ● 肉をきりきざみて ● 市街販を行はんとす ● 金人の屯せる城

明年春。復請上出郊。續逼出上皇。張叔夜諫曰。今上一出不歸。陛下不可再往。臣當率勳精兵護駕。以出。縱虜騎追至。臣決死戰。或可僥倖。若天不祚。死於封

明年春、復た上に請ひて郊に出でしめ、續きて逼りて上皇を出さんとす。張叔夜、諫めて曰く、今、上一たび出で、歸らず。陛下再び往く可からず。臣、當に精兵を率ゐる勵し、駕を護りて以て出づべし。縱ひ虜騎追ひ至るとも、臣、死を決して戰はん。或は僥倖す可し。若し天祚せずんば、封疆に死せん。猶ほ生きながら夷狄に陥らざらんかと。上皇藥を飲まんと欲し、范瓊の爲に奪はる。上皇に逼りて宮を出でしむ。皇后、太子、親王、帝姬、皇族、前後三千餘人、悉く軍前に赴く。城中の子女、金帛、寶玩、車服、器用、圖書、百物、括索して

疆不三猶生陷二夷狄一乎。上皇欲飲藥。爲范瓊所奪。逼上皇出宮。皇后太子。親王。帝后。皇族。前後三千餘人。悉赴軍前。城中子女。金帛。寶玩。車服。器用。圖書。百物。括索。公私上下俱空。然後宣金主詔書。選立異姓。遂册前太宰張邦昌爲楚帝。以宋二帝北歸。

● 本國の内にて ● 毒藥 ● ことごとく取り集めて

金人在汴凡七閱月而去。始至。張叔夜營力戰。餘皆主和。以至吳玠。徐秉哲。范瓊等。往來逼逐上皇以下。出郊。驢騾異姓。方三上在背。金人汴に在ること凡そ七閱月にして去る。始めて至りしとき、張叔夜嘗て力戦す。餘は皆和を主として、以て吳玠・莫儔・王時雍・徐秉哲・范瓊等に至るまで、往來して上皇以下を逼り逐ひて郊に出でしめ、異姓を擧ぐることを議し、上の青城に在るに方りて、逼りて御服を易へしむ。時に惟だ李若水のみ抱持して大に呼び奮ひ罵る。金人刀もて其頤を裂き、其舌を斷ちて後之を梟す。相謂ひて曰く、大遼の破れしとき、義に死せし者十數あり。今、南朝、惟李侍郎一人のみと。然れども一時憤死せし者甚だ衆し。金人知らざる也。吳革、衆を結びて、二帝を

劫し還さんと欲し、范瓊の爲に誘殺せらる。何臬・孫傅・張叔夜・秦檜・司馬朴、皆争ひ論じて趙氏を存立せんことを乞ふ。金人之を驅りて上に從ひて北に行かしむ。叔夜、粟を食はず、惟湯を飲むのみ。界河を過ぎて死す。臬、燕に至り、亦た食はずして死す。京城危急の時に當り、四方勤王の師の至る者、皆詔して止まりて進まざらしむ。和議を妨げんことを恐るゝなり。金人の退くに訖るまで、未だ嘗て兵を交へず。上、在位二年ならずして國破る。改元して靖康と曰ふ。弟康王南京に立つ。是を高宗皇帝と爲す。

● 吳玠は姓、莫儔は名 ● 帝を抱き支ふ ● 宋の姓也

帝爲范瓊誘殺。何臬、孫傅、張叔夜、秦檜、司馬朴、皆争論乞存立趙氏。金人驅之。從上北行。叔夜不食。粟惟飲湯。過界河。臬至燕。亦不食。死。當京城危急時。四方勤王之師至者。皆詔止不進。恐妨和議。訖金人之退。未嘗交兵。上在位二年。國破。改元曰靖康。弟康王立于南京。是爲高宗皇帝。

南宋

高宗皇帝

高宗皇帝。名構。徽宗第九子也。母韋氏。徽宗夢吳越武肅錢王入室。已而生構。封康王。靖康初。嘗出使。離不軍。是冬。幹離不再來。李詔再出使。耿南仲偕行。至相州。民遮道。請無往。至磁州。守臣宗

高宗皇帝、名は構、徽宗の第九子也。母は韋氏。徽宗、吳越の武肅錢王、室に入るに夢み、已にして構を生む。康王に封ぜらる。靖康の初、嘗て出で、幹離不の軍に使す。是冬、幹離不再び來る。詔を奉じて再び出で使す。耿南仲、偕に行く。相州に至るや、民、道を遮りて往く無からんことを請ふ。磁州に至るや、守臣宗澤之を止む。相州の守、蠟書を以て言ふ、金人方に騎を遣して康王の所在を物色すと。乃ち相州に回り、南仲と榜を掲げ、兵を召して勤王せしむ。詔有り、康王を以て大元帥と爲し、汪伯彦・宗澤を副と爲し、兵を領して入りて衛らしむ。王、伯彦の議に従ひ、北門を出で、河を渡りて太名に至る。京師陥ると聞きて、澤は兵を進めて京城に向はんと請ひ、伯彦は王に兵を東平に移し、身を安

澤止之。相州守以蠟書言。金人方遣騎物色康王所在。乃回相州。吳南仲揭榜。召兵勤王。有詔以康王爲大元帥。汪伯彦宗澤爲副。領兵入衛。王從伯彦議。出北門。渡河。至太名。聞京師陷。澤請進兵。向京城。伯彦請下王移兵。東平。指身安地。南仲亦以爲然。遂東去。知

地に措かんと請ふ。南仲も亦以て然りと爲す。遂に東に去る。知河開府黃潛善亦た兵を領して至り、進みて濟州に屯し、探り報ず、二帝北に行き、張邦昌、金の爲に立てられて、國を楚と號すと。是日風霾あり、日に薄暈有り。百官慘怛し、邦昌亦た憂ふる色有り。惟王時雍・范瓊等、欣然として得る所有るが如し。邦昌位に在ること三十三日。御史馬紳、書を邦昌に貽りて、速に改正を行ひ、服を易へて省に歸らんことを請ふ。遂に元祐孟太后を迎へて、政を聽かしむ。太后、康王を迎へ立つ。詔して中外に告ぐ。曰へる有り、漢家の厄十世、光武の中興に宜しく、獻公の子九人、惟重耳之れ尙ほ在りと。使を遣して表を奉じ、及び孟后の詔を以て來らしむ。邦昌繼ぎて至り、地に伏し慟哭して死を請ふ。使臣、河北より竄け來り、道君の手札を進む。曰く、便ち眞に即き來りて父母を救ふ可しと。王、慟哭して拜受し、遂に應天府に趨きて位に即く。元を建炎と改む。

河開府黃潛
善亦領兵至。
進屯濟州。探

報。二帝北行。張邦昌爲金所立。國號楚。是日風霾。日有薄暈。百官惶惶。邦昌亦有憂色。惟王時雍。范瑔等。欣然若有所得。邦昌在位三十日。御史馬紳貽書邦昌。請速行改正。易服歸省。遂迎元祐孟子。重耳之。尙在。遣使奉表。及以孟后詔來。邦昌繼至。伏地慟哭。請死。中興。獻公之子九人。惟重耳之。尙在。遣使奉表。及以孟后詔來。邦昌繼至。伏地慟哭。請死。使臣自河北竄來。進道君手札。曰。便可即真。來救父母。王慟哭拜受。遂趨應天府。即位。改元建炎。

- 蠟丸に封じ頼めたる密書
- 立札をして勤王の兵を募る
- 風ふきて土を降らし
- 心をいたむ
- 位號を去り帝服を易へ、尙書省に歸りて臣列に就くべし
- 上皇
- 眞の帝位

以主和謀國。
罷貳耿南仲。
召李綱爲相。
以宗澤知開
封。爲留守。綱
至邊防軍政
略。有緒。而潛
善。伯彥復主
和。亟遣祈請
使。矣。綱相數

和を主とし國を誤れるを以て、耿南仲を罷め貳し、李綱を召して相と爲し、宗澤を以て開封に知として、留守と爲す。綱至りて、邊防、軍政、略ほ緒有り。而して潛善、伯彥、復た和を主とし、亟に祈請使を遣す。綱、相たること數十日にして罷めらる。潛善、伯彥、相と爲り、首として上書の人、陳東、歐陽澈を誅し、策を決して東南に幸し、復た兩河を經制するの意無し。此冬、車駕遂に揚州に至る。金人三道に分れて南に來る。二年春、金人汴に至り、宗澤の爲に敗らる。澤、

十日而罷。潛
善伯彥爲相。
首誅上書人
陳東歐陽澈。
決策幸東南。
無復經制兩
河之意。此冬。
車駕遂至揚
州。金人分三
道。南來。二
年春。金人至
汴。爲宗澤所
敗。澤招撫羣
盜。募四方義
士。合二百餘
萬。一語及家
事。但連呼過
河者。三都人
爲之號慟。聞
者皆相弔。出
涕。

羣盜を招き撫で、四方の義士を募りて、百餘萬を合し、糧半歳を支ふ。表疏數十を連ね、上に汴に還らんことを請ふ。潛善其成功を忌みて、中より之を沮む。憂憤して疽背に發して没す。終に臨み一語の家事に及ぶ無し。但だ河を過ぎんと連呼する者三たび。都人之が爲に號慟し、聞く者皆相弔ひて涕を出す。

- いとくちがつく
- 二帝の南歸を訴請する使者
- 經制
- 上皇
- てきもの

三年春。金人
將至揚州。上
得報亟出。二
相方會食堂。
吏呼曰。駕行
矣。乃戎服南
走。回望揚州。
烟焰已漲天。

三年春、金人將に揚州に至らんとす。上、報を得て亟に出づ。二相方に堂に會食す。吏呼びて曰く、駕、行くと。乃ち戎服して南に走る。揚州を回望すれば、烟焰已に天に漲る。呂頤浩・張浚、上に瓜洲に追ひ及ぶ。小舟を得て以て渡り、鎮江に至り、遂に杭州に如く。潛善、伯彥を罷め、朱勝非を以て相と爲す。御營の將苗傅・劉正彥、亂を作し、上に請ひて位を皇子勇に禪らしむ。

矣。呂頤浩張
 浚追及上於
 瓜洲。得二小舟
 以渡。至鎮江。
 遂如杭州。罷
 潛善。伯彥。以
 朱勝非爲相。
 御營將苗傅。
 劉正彥作亂。
 請上禪位於
 皇子。未三
 歲。孟太后聽
 政。呂頤浩張
 浚帥師勤王。
 韓世忠爲前
 軍。張俊翼之。
 劉光世游擊
 爲殿。勝非說
 二兒亟反正。尊孟后爲隆祐皇太后。勝非罷。呂頤浩爲相。二兒走。世忠追之。皆伏誅。上如建康。以浚爲三川。陝宣撫處置使。隆祐太后如南昌。聞兀朮請於粘罕。粘罕一將也。犯江浙。故也。杜充

未だ三歳ならず。孟太后政を聴く。呂頤浩・張浚、師を帥ゐて勤王す。韓世忠前軍たり。張俊之を翼く。劉光世、游撃して殿と爲る。勝非、二兒に説きて亟に正に反らしむ。孟后を尊びて、隆祐皇太后と爲す。勝非罷められ、呂頤浩、相と爲る。二兒走る。世忠、之を追ふ。皆誅に伏す。上、建康に如く。浚を以て、川陝宣撫處置使と爲す。隆祐太后、南昌に如く。兀朮の粘罕に請ひて、將に江浙を犯さんとするを聞けるが故也。杜充、右僕射と爲り、建康を守る。上、杭州に如く。杭を升せて、臨安府と爲す。臨安より浙東に如く。金人、兩道に分れ、一軍は、蕞黃より江を渡る。劉光世、江州に在り。以て蕞黃の小盜と爲し、王徳を遣して、之を興國軍に拒がしめ、始めて金人たるを知る。

● 軍報 ● 苗傅と劉正彥となり

爲右僕射。守建康。上如杭州。升杭爲隆安府。自臨安。如浙東。金人分兩道。一軍自蕞黃。渡江。劉光世在江州。以爲蕞黃小盜。遣王徳拒之於興國軍。始知爲金人。

金人自大治。趨洪撫建昌。臨江吉州。進隆祐太后。不遂。陷袁潭。及南澧州。乃自石首北渡。而去。一軍自澧和。向江東。馬家渡。杜充陷建康。杜充及守臣皆降。於兀朮。迎判邦。父不從。書。詔曰。

金人、大治より、洪撫・建昌・臨江・吉州に趨き、隆祐太后を追ふ。及ばず。遂に袁潭・荆南・澧州を陷る。乃ち石首より北に渡りて去り、一軍は澧和より江東の馬家渡に向ひ、江を濟りて建康を陷る。杜充及び守臣皆兀朮に降る。通判楊邦父從はず、血を刺して裾に書して曰く、寧ろ趙氏の鬼となるとも、他邦の臣と作らじと。衆擁して兀朮に見えしむ。誘ひ諭すと累日なり。輒ち吐り罵る。卒に大に罵りて殺さる。兀朮、長驅して杭州を陷る。上、去りて已に七日なり。兀朮進みて越州を陷る。四年春、明州を陷る。時に、上已に台州章安鎮に次す。金人、船を以て昌國縣を犯し、上の舟を追ひ襲はんと欲す。提領海舟張公祐、大船を引きて之を撃ち散す。乃ち退き、兵を回して秀平江常州を陷れ、鎮江に至る。韓世忠、之を邀へ、海舟を以て與に戦ふこと數十合、俘獲

矣。呂頤浩張浚追及上於瓜洲。得小舟以渡。至鎮江。遂如杭州。龍潛善伯彥以朱勝非爲相。御營將苗傅。劉正彥作亂。請上禪位於皇子。莫未三歲。孟太后聽政。呂頤浩張浚帥師勤王。韓世忠爲前軍。張俊翼之。劉光世游擊爲殿。勝非說二兒。亟反正。尊孟后爲隆祐皇太后。勝非罷。呂頤浩爲相。二兒走。世忠追之。皆伏誅。上如建康。以浚爲三川陝宣撫處置使。隆祐太后如南昌。聞元朮請於粘罕。粘罕犯江浙。故也。杜充未だ三歳ならず。孟太后政を聴く。呂頤浩・張浚、師を帥ゐて勤王す。韓世忠前軍たり。張俊之を翼く。劉光世、游撃して殿と爲る。勝非、二兇に説きて亟に正に反らしむ。孟后を尊びて、隆祐皇太后と爲す。勝非罷められ、呂頤浩、相と爲る。二兇走る。世忠、之を追ふ。皆誅に伏す。上、建康に如く。浚を以て、川陝宣撫處置使と爲す。隆祐太后、南昌に如く。元朮の粘罕に請ひて、將に江浙を犯さんとするを聞けるが故也。杜充、右僕射と爲り、建康を守る。上、杭州に如く。杭を升せて、臨安府と爲す。臨安より浙東に如く。金人、兩道に分れ、一軍は、蕪黃より江を渡る。劉光世、江州に在り。以て蕪黃の小盜と爲し、王德を遣して、之を興國軍に拒がしめ、始めて金人たるを知る。

● 軍報 ● 苗傅と劉正彥とをり

爲右僕射守建康。上如杭州。升杭爲臨安府。自臨安如浙東。金人分兩道。一軍自蕪黃渡江。劉光世在江州。以爲蕪黃小盜。遣王德拒之於興國軍。始知爲金人。

金人自大治。趙洪撫建昌。臨江吉州。追及。遂陷袁潭。荆南澧州。乃自石首北渡而去。一軍自臨和向江東。馬家渡。杜充陷建康。杜充及守臣皆降。於元朮。迎判邦父不從。書曰。鬼。

金人、大治より、洪撫・建昌・臨江・吉州に趨き、隆祐太后を追ふ。及ばず。遂に袁潭・荆南・澧州を陥る。乃ち石首より北に渡りて去り、一軍は臨和より江東の馬家渡に向ひ、江を濟りて建康を陥る。杜充及び守臣皆元朮に降る。通判楊邦父從はず、血を刺して据に書して曰く、寧ろ趙氏の鬼となるとも、他邦の臣と作らじと。衆擁して元朮に見えしむ。誘ひ諭すと累日なり。輒ち叱り罵る。卒に大に罵りて殺さる。元朮、長驅して杭州を陥る。上、去りて己に七日なり。元朮進みて越州を陥る。四年春、明州を陥る。時に、上已に台州章安鎮に次す。金人、船を以て昌國縣を犯し、上の舟を追ひ襲はんと欲す。提領海舟張公祐、大船を引きて之を撃ち散す。乃ち退き、兵を回して秀平江常州を陥れ、鎮江に至る。韓世忠、之を邀へ、海舟を以て與に戦ふこと數十合、俘獲

見殺。元。卒。大罵。日。輒。元。北。上。去。已。七。日。元。北。進。陷。越。州。四。年。春。陷。明。州。時。上。已。次。台。州。章。安。鎮。金。人。以。船。犯。昌。國。縣。欲。追。襲。上。舟。提。領。海。舟。張。公。祐。引。大。船。擊。散。之。乃。退。回。兵。陷。秀。平。江。常。州。至。鎮。江。韓。世。忠。邀。之。以。海。舟。與。戰。數。十。合。多。俘。獲。伏。卒。金。山。龍。王。廟。幾。獲。元。北。相。持。於。黃。天。蕩。元。北。求。假。道。甚。恭。不。許。欲。自。建。康。北。歸。不。得。去。或。教。於。冶。城。西。南。隅。蘆。場。地。鑿。大。渠。一。夕。成。次。早。出。舟。趨。建。康。世。忠。大。驚。尾。擊。之。一。日。值。無。風。海。舟。不。能。動。元。北。乃。引。其。舟。出。江。北。去。疾。如。飛。以。火。箭。射。海。舟。世。忠。軍。亂。奔。還。元。北。乃。得。北。還。元。北。乃。北。に。遁。る。こ。と。を。得。た。り。統。制。岳。飛。邀。へ。撃。ち。て。之。を。六。合。に。敗。れ。り。

● 夏の生えたる場所 ● ちほみぞ ● 翌早朝 ● 退軍

多し。卒を金山の龍王廟に伏せ、幾んど元北を獲んとす。黄天蕩に相持す。元北道を假らんことを求めて甚だ恭し。許さず。建康より北に歸らんと欲す。去ることを得ず。或ひと教へて、冶城の西南隅の蘆場の地に於て、大渠を鑿たしむ。一夕にして成る。次早、舟を出して建康に趨く。世忠大に驚きて之を尾撃す。一日風なきに値ひ、海舟動くこと能はず。元北乃ち其舟を引き、江を出でて北に去る。疾きこと飛ぶが如し。火箭を以て海舟を射る。世忠、軍亂れて奔り還る。元北乃ち北に遁ることを得たり。統制岳飛、邀へ撃ちて之を六合に敗れり。

遁。統制岳飛。邀撃敗之於六合。

初張浚西行。上命浚三年而後用師。及是捷辣元北皆在淮東。浚開元北踏踏。必再犯東南。議出師。攻取大夫及諸將皆以爲不可。浚決策。移檄粘罕。問罪。遣吳玠入長安。金人遂調元北。自京西。星馳赴陝西。與婁室合。浚合

初め張浚の西に行くや、上、浚に命じ、三年にして後、師を用ひしむ。是に及び、捷辣、元北、皆淮東に在り。浚、元北の踏踏するを聞き、必ず再び東南を犯すならんとし、議して師を出し、攻め取りて以て其勢を分たんとす。士大夫及び諸將皆以て不可と爲す。浚、策を決し、檄を粘罕に移して罪を問ひ、吳玠を遣して長安に入らしむ。金人、遂に元北を調す。京西より星馳して、陝西に赴き、婁室と合す。浚、六路の兵を合して富平に至る。婁室、兵を擁して驛に至る。鐵騎直に環慶路の趙哲の軍を撃つ。佗路、援けず、哲、所部を離る。諸軍退く。金遂に勝に乗じて前む。浚、趙哲を斬る。諸路の兵皆散じ去る。陝西大に震ふ。浚、軍を興州に駐め、劉子羽を遣して、諸將の在る所を訪はしむ。各々所部を引きて來り會す。人心粗ほ安し。吳玠、走りて大散關の東の和尚原を保つ。

● 逃びて出發せしむ ● 流星の如く疾く馳せて

六路兵至富平。婁室擁兵驟至。鐵騎直擊環慶路。趙哲軍。佗路不援。哲離所部。諸軍退。金遂乘勝而前。凌斬趙哲。諸路兵皆散去。陝西大震。凌駐軍興州。遣劉子羽訪諸將所在。各引所部來會。人心粗安。吳玠走保大散關。東和尚原。

上自海道回駐越州。呂頤浩罷。范宗尹爲相。秦檜南歸。赴行在。檜在北。依捷辣。爲所任用。捷辣南侵。檜參謀其軍。嘗爲草檄。下山東州郡。翠全家。泛小舟。抵澧水軍。自言逃歸。朝士多疑之。檜言如欲

○上、海道より回りて越州に駐まる。呂頤浩罷められ、范宗尹相と爲る。秦檜南に歸りて行在に赴く。檜北に在りて捷辣に依り、爲に任用せらる。捷辣の南侵するや、檜其軍に參謀たり。嘗て爲に檄を草して、山東の州郡を下す。全家を挈へ、小舟を泛べて澧水軍に抵る。自ら言ふ、逃れ歸ると。朝士多く之を疑ふ。檜言ふ。如し天下の無事を欲せば、須らく是れ南は自ら南、北は自ら北たるべしと。上に乞ひ、書を捷辣に致して以て好を求む。其言皆捷辣の意也。○是歲、劉豫、帝と稱す。豫は景州の人なり。建炎の戊申に於て、濟南の守を以て金に降り、之が用を爲し、東平府に知たるを得、兼ねて河南に節制たり。粘罕、金主に白し、邦昌の故事に循ひて豫を立つ。國を大齊と號す。後、都を汴に遷す。粘罕、既に關中の地を得たり、悉く割きて以て豫に與ふ。

天下無事。須是南自南、北自北。乞上。致書捷辣。以求好。其言皆捷辣意也。是歲。劉豫稱帝。豫景州人。於建炎戊申。以濟南守降金。爲之用。得知東平府。兼節制河南。粘罕自金主。循邦昌故事。立豫。國號大齊。後遷都于汴。粘罕既得關中地。悉割以與豫。

紹興元年。命張浚討江淮盜李成。成據江淮六州。連兵數萬。有下。成卷東南之。意尋陷江筠。臨江。凌擊其軍。復三郡。成遁降齊。張浚盡失陝西之地。惟餘階成。岷鳳。洮五郡。及鳳翔府之和尚原。隴州。

○紹興元年、張浚に命じて、江淮の盜李成を討たしむ。成、江淮の六七州に據り、兵數萬を連ぬ。東南を席卷するの意有り。尋ぎて江筠・臨江を陷る。浚、其軍を撃ちて三郡を復す。成、遁れて齊に降る。○張浚、盡く陝西の地を失ひ、惟だ階・成・岷・鳳・洮の五郡、及び鳳翔府の和尚原、隴州の方山原を餘すのみ。浚、退きて閬州を保つ。統制曲端、威名有り。浚、先に語を用ひて、其兵柄を罷め、萬州に安置す。西人、端に倚りて重きを爲す。貶せらるゝに及び、軍情悦ばず。是に至りて又恭州の獄に送りて之を殺す。士大夫、軍民、皆恨み恨む。西人益々是を以て浚を非る。金人、兩道に分れて蜀に向ふ。吳玠、弟璘と、大に之を和尚原に敗り、又將を選びて之を箭箐關に敗る。兩道皆入ること能

之方山原而
已。凌退保固
州。統制曲端
有威名。凌先
用。諸罷其兵柄。安置萬州。西人倚端爲重。及貶。軍情不悅。至是又送秦州。賦殺之。士大夫
軍民皆恨。西人益以是非凌。金人分兩道。一向蜀。吳玠與弟璘。大敗之於和尚原。又選將
敗之於箭筈關。兩道皆不能入。

● 尉にて物を巻く如く片端より地を略取すること ● 兵權 ● 曲端あるために重視せらる

范宗尹罷。秦
檜昌言曰。我
有二策。可三以
聳動天下。遂
爲右相。呂頤
浩爲左相。兀
朮會諸道及
女眞兵。造浮
梁於寶雞縣。
渡渭攻和尙
原。玠璘三日三十餘戰。大破之。兀朮中流矢。僅以身免。始自河東。歸燕山。

○范宗尹罷めらる。秦檜昌言して曰く、我に二策有り、以て天下を聳動す可し
と。遂に右相と爲る。呂頤浩、左相と爲る。兀朮、諸道及び女眞の兵を會し、
浮梁を寶雞縣に造り、渭を渡りて和尚原を攻む。玠璘、三日に三十餘戰し、大
に之を破る。兀朮、流矢に中る。僅に身を以て免れ、始めて河東より燕山に歸
れり。

● 綱目に揚言に作る、従ふべし、變んにいひよらしての意 ● 船橋

紹興二年。上
自越州還。臨
安。言者劾秦
檜專主和議。
沮止恢復。遠
圖。檜罷。朱勝
非爲右相。紹
興三年春。金
撤離曷。自鳳
翔長安。聲言
東去。實由商
於一出。漢陰。直
趨金商。吳玠
急引兵扼之。
德風嶺。金人
開道。遠出其
後。玠遣還。仙
人關。金人遂
進陷興元。知
府劉子羽退

○紹興二年、上、越州より臨安に還る。言ふ者、秦檜の専ら和議を主として、
恢復の遠圖を沮止せしことを劾せしかば、檜罷められ、朱勝非右相となりぬ。○
紹興三年春、金の撒離曷、鳳翔・長安より東に去ると聲言し、實は商於より漢
陰に出で、直に金・商に趨く。吳玠、急に兵を引いて之を饒風嶺に扼す。金人、
問道より遠りて其後に出づ。玠、遽に仙人關に還る。金人、遂に進みて興元を
陥る。知府劉子羽、退きて、三泉縣、潭毒山を保つ。撒離曷、食盡く。乃ち引き
還る。吳玠、糧無きを以て寨を抜き、和尚原を棄つ。金人之を得たり。玠、其必
す深く入るを度る。乃ち兵を嚴にして以て待つ。兀朮、果して撒離曷と來りて、
仙人關を犯す。玠、璘、與に戰ふこと七日。金人支ふること能はず、宵遁る。玠、
伏を設けて、其歸路を扼し、又之を敗る。是擧や、金人意を決して蜀に入らんと
し、卒に志を得ず。是歲、凌又洮・岷・關外を失ひ、惟階・成・秦・鳳を存す。
凌、召し還され、尋ぎて劉子羽と皆貶竄せらる。凌の是行、本と關・陝より中原

保三泉縣潭
毒山。撤離曷
食盡。乃引還。

保三泉縣潭
毒山。撤離曷
食盡。乃引還。
賴得玠麟保蜀而

吳麟以無糧
拔寨。秦和尚
原。金人得之。

玠度其必深入。乃嚴兵以待。兀朮果與撤離曷來。犯仙人關。玠麟與戰七日。金人不能支。宵遁。玠設伏扼其歸路。又敗之。是舉也。金人決意入蜀。卒不得志。是歲。凌又失洮岷關外。惟存階成秦鳳。凌召還。尋與劉子羽皆貶竄。凌是行。本欲由關陝取中原。乃盡喪關陝而歸。賴得玠麟保蜀而

齊遣李成。攻
陷鄆襄陽軍
等。岳飛復隨
鄆。成棄襄陽
而遁。呂頤浩
朱勝非相繼
罷。趙鼎爲右

○齊、李成を遣し、攻めて鄆・襄陽・隨・鄆・唐州・信陽軍等を陥る。岳飛、隨・鄆を復す。成、襄陽を棄て、遁る。○呂頤浩、朱勝非、相繼ぎて罷めらる。趙鼎、右相と爲る。○齊、金兵を以て道を分ちて南侵す。上、詔して親征し、出で、平江に如く。張凌を以て、樞密院に知たらしむ。是より先、凌、極めて言ふ、北方、既に西顧の憂無し、必ず力を併せて東南を窺はんと。上、其言を思ひて、遂に

相。齊以金兵
分道南侵。上
詔親征。出如
平江。以張凌
知樞密院。先
是凌極言。北
方既無西顧
憂。必併力窺
東南。上思其
言。遂召之。凌
至。請遣岳飛
渡江。入淮。西
以牽制北兵
之在淮東者。

之を召す。凌至り、請ひて岳飛を遣して江を渡りて淮西に入らしめ、以て北兵の淮東に在る者を牽制せんとす。之に従ふ。上、凌に命じて、師を江上に視しむ。將士、凌の來るを見て、勇氣皆倍す。時に、韓世忠、揚州に駐る。先に已に大に金兵を大儀鎮に敗り、その將撻也を擒にす。解元・成閔、與に承州に戦ひて十三捷あり。仇念、孫暉、之を壽春安豐に敗る。王德、之を滁州に敗る。岳飛、牛阜等を遣して之を廬州に攻めしむ。撻辣・兀朮、世忠の爲に扼せられ、江の渡る可からざるを知り、引きて還る。齊の劉麟・劉猷、輜重を棄て、遁れ去る。

從之。上命凌視
江上。將士見
凌來。勇氣皆
倍。時韓世忠
駐揚州。先已
大敗金兵於
大儀鎮。撻其
將撻也。解元
成閔。與戰于
承州。十三捷
仇念孫暉敗
之於壽春安
豐。王德敗之
於滁州。岳飛
遣牛阜等攻
之於廬州。撻
辣兀朮知爲
世忠所扼。江
不可渡。引還
齊劉麟劉猷
棄輜重遁去。

從之。上命凌視江上。將士見凌來。勇氣皆倍。時韓世忠駐揚州。先已大敗金兵於大儀鎮。撻其將撻也。解元成閔。與戰于承州。十三捷。仇念孫暉敗之於壽春安豐。王德敗之於滁州。岳飛遣牛阜等攻之於廬州。撻辣兀朮知爲世忠所扼。江不可渡。引還。齊劉麟劉猷棄輜重遁去。

紹興五年。上自平江還臨安。趙鼎、張浚爲左右相。浚兼都督諸路軍馬。尋復命浚視師江上。浚至鎮江。召韓世忠使舉兵移屯楚州。浚至建康。撫張俊軍。至太平州。撫劉光世軍。無不踴躍思奮。以岳飛爲河北京西招討使。

○紹興五年、上、平江より臨安に還る。趙鼎・張浚、左右の相たり。浚、兼ねて諸路の軍馬を都督す。尋ぎて復た浚に命じて師を江上に視しむ。浚、鎮江に至り、韓世忠を召し、兵を擧げて移りて楚州に屯せしむ。浚、建康に至りて、張俊の軍を撫し、太平州に至りて、劉光世の軍を撫す。踴躍して、奮はんことを思はざる無し。兵飛を以て河北京西の招討使と爲す。

● ころどりして

先是建炎庚戌中。有武陵人鍾相。起於鼎州。僭號楚。鼎潭辰岳之境。皆盜區。

○是より先、建炎、庚戌中、武陵の人鍾相といふものあり、鼎州に起り、僭して楚と號す。鼎・潭・辰・岳の境、皆盜區なり。相敗れて擒に就く。其徒に楊么といふ者有り。洞庭に據り、遂に劇しき寇を爲す。官軍、陸より之を襲へば、則ち湖に入り、水より之を攻むれば、則ち岸に登る。曰く、能く我を害せんとするものあらば、除だ是れ飛び來れと。浚謂ふ、上流先づ么を去らざれば、腹心の害を爲し、將に以て國を立つること無からんとすと。請ひて、自ら行く。浚、湖南に至り、岳飛の兵の至るに會し、急に其水寨を攻む。么、窮蹙し、水に赴きて死す。遂に平ぐ。浚、湖南より轉じ、兩淮より諸將を會して防秋を議し、乃ち入りて見ゆ。

● 盜賊出沒の區域 ● 洞庭は建康の上流に當る ● 胡人の秋の入侵を防ぐこと

相敗就擒。其徒有楊么者。據洞庭。遂爲劇寇。官軍陸襲之。則入湖。水攻之。則登岸。曰有能害我。除是飛來。浚謂上流不先去么。爲腹心害。將無以立國。請自行。浚至湖南。會岳飛兵。至。急攻其水寨。么窮蹙。赴水死。遂平。浚自湖南轉。由兩淮。會諸將。議防秋。乃入見。

○金主晟殂す。文烈と諡す。初め晟、晟と約すらく、兄終らば弟立ち、而る後晟の子に復歸せんと。故に、晟、己の子宗盤を捨て、晟の長孫曷囉馬を立て、諱版字極烈と爲す。儲副の位也。曷囉馬、名は直、是に至りて遂に位に即く。宗盤、晟の別子及び粘罕と皆立たんとを争ひて得ず。粘罕、時に己に兵柄を失

而立。曼長孫
葛囉馬。爲二語
版字極烈。儲
副位也。葛囉
馬。名直。至是
遂即位。宗盤
與曼之別子及
粘罕。皆爭立而
不得。粘罕時已
失二兵柄。與二
悟室竝相。粘罕
絕食。縱飲而死。
蒙國叛金。蒙在
二女真之北。在
唐爲二蒙兀部。亦
號二蒙骨斯。

紹興六年。張
浚復出視師。
上自臨安。如二
平江。齊人分
道入寇。初劉
豫因粘罕得
立。知奉粘罕
而已。蔑視他
帥。及是。請兵
於金。宗盤沮
之。聽豫自行。

ひ、悟室と竝に相たり。粘罕、食を絶ち、縱飲して死す。○蒙國、金に叛く。蒙は女真の北に在り。唐に在りては蒙兀部たり。亦た蒙骨斯と號す。

● はしいま、に酒を飲む

○紹興六年、張浚復た出でて、師を視る。上臨安より平江に如く。齊人、道を分ちて入寇す。初め劉豫、粘罕に因りて立つことを得たり。粘罕を奉ずることを知るのみ。他の帥を蔑視す。是に及びて、兵を金に請ふ。宗盤之を沮み、豫の自行くことを聽す。而して兀朮を遣し、兵を黎陽に提けて以て豫を觀しむ。劉光世、時に廬州に駐る。以爲らく、守り難しと。張浚、泗州に駐る。亦た兵を益さんことを請ふ。衆情洶懼す。張浚、書を以て浚及び光世を戒むらく、進み撃つこと有りて退き保つこと無れと。趙鼎等、上の親書して浚に付せんことを請

而遣兀朮。提
兵黎陽。以觀
劉光世時
駐廬州。以爲
難守。張浚駐
泗州。亦請益
兵。衆情洶懼
張浚以書戒
浚及光世。有
進擊無退保
趙鼎等請上
親書付浚。欲
退師還南保
江。浚力爭。以
爲可保。必勝。
一退則大事
去矣。光世已
舍廬州而退。
浚即星馳至
采石。遣人喻

ひ、師を退け、南に還りて江を保たんと欲す。浚、力め争ふ。以爲らく、必勝を保す可し。一たび退かば則ち大事去らんと。光世、已に廬州を捨て、退く。浚、即ち星馳して采石に至り、人を遣して其衆を喻さしむ、若し一人の江を渡るもの有らば、即ち斬りて以て徇へんと。仍りて光世を督して復た廬州に還らしむ。光世、已むことを得ず、乃ち兵を駐め、王德、鄭瓊を遣し、三たび齊の兵を霍丘、正陽及び前羊市に敗る。時に劉猷、淮東に至り、韓世忠の兵に阻まれて敢て進まず。乃ち淮西より渡る。浚、張浚の統制官楊沂中を遣して濠州に至らしめ、浚と兵を合す。沂中、猷の前鋒を敗る。猷、兵を引き、劉麟に合肥に會し、而る後進まんと欲す。沂中、與に藕塘に遇ひて合戦す。猷大に敗る。麟、猷の敗れたるを聞き、風を望みて潰え去る。光世、勝に乗じ追ひ襲ひて、亦た捷つ。北方大に恐る。上曰く、敵に克つの功皆右相より出づと。趙鼎遂に罷めらる。

● 人心洶々として危ぶみおそる

其衆。若有一人渡江。即斬以徇。仍督光世復還廬州。光世不得已。乃駐兵。遣王德、鄺瓊、三俊、統制官楊沂中、至濠州。與俊合兵。沂中敗。前鋒。引兵欲會劉麟于合肥。而後進。沂中與遇於藏塘。合戰。大敗。麟、開、猊、敗。望風潰去。光世乘勝追襲。亦捷。北方大恐。上曰。克敵之功。皆出右相。趙鼎遂罷。

上皇以五年四月。至七年春。因問始。至壽五十四。二帝自建炎初。由燕山。如中京。古奚國。霑郡也。在燕山北千里。次年。又自中京。移韓州。在中京東北千五百里。後二年。又自韓州。移五國城。在金國所都東北千里。上皇終焉。

○崩御の報知

○上皇五年四月を以て殂す。七年春に至りて、凶問始めて至る。壽五十四。二帝、建炎の初より、燕山より中京に如く。古への奚國霑郡也。燕山の北千里に在り。次年、又中京より韓州に移る。中京の東北千五百里に在り。後二年、又韓州より五國城に移る。金國都する所の東北千里に在り。上皇焉に終れり。

岳飛、湖北京西宣撫使と爲る。時に淮東宣撫使韓世忠、江東宣撫使張俊、皆久しく已に功を立つ。而して飛、列將を以て拔起す。世忠、俊平かならず。飛、

使韓世忠。江東宣撫使張俊。皆久已立功。而飛以列將拔起。世忠、俊不平。飛風已下之。二人皆不答。及飛破楊么。俊益忌之。於是隙日深。上自如平江。如建康。飛因辱駕以行。入見。疏論。復。秦檜時爲樞密副使。主和議。忌飛成功。沮之。飛以內艱去。上力起之。劉

己を屈して之に下れども、二人皆答へず。飛が楊么を破るに及び、俊益之を忌む。是に於て、嫌隙日に深し。上、自ら平江に如き、建康に如く。飛、因りて、駕に扈して以て行き、入りて見え、疏して恢復を論ず。秦檜時に樞密副使たり。和議を主とし、飛の成功を忌みて之を沮む。飛、内艱を以て去る。上、力めて之を起す。劉光世、言者の、其師を退けて幾んど事を誤らんとせしを論ぜざるを以て、兵柄を罷めらる。張浚、王徳を以て其軍を統べしむ。徳、鄺瓊と等夷にして相下らず。大に謀ぎ、督府に詣りて徳を訴ふ。浚、乃ち徳を召して還らしめ、督府都統制と爲し、而して呂社を以て督府參謀と爲し、其軍を領せしむ。社、簡倨にして將士の情に通ぜず。瓊等の反側を聞き、密に之を罷めんと乞ふ。瓊、叛き、社を執へ、所部數萬を以て齊に降る。張浚、遂に言を以て罷めらる。浚の徳と社とを用ひしとき、岳飛嘗て其不可なるを言ひしが、浚聽かず。故に敗れたり。趙鼎復た相たり。○金人、劉豫の國を立つること能はざるを以て、之を廢す。齊立つこと八歳にし

光世以下言者
論其退師幾
誤事體兵柄
張浚以王德
統其軍德與
鄴瓊等夷不
相下大譟詣
督府訴德浚
乃召德還為
督府都統
制而以呂祉
為督府參謀
領其軍祉簡
倨不通將士
之情聞瓊等
反側密乞罷
之瓊叛執
復相金人以
劉豫不能立
國廢之齊立
八歲而亡。

紹興八年上
自建康還臨
安秦檜復相
趙鼎罷詔議
講和自建炎
以來無歲不
遣使直願去
尊號奉其正
朔比於藩臣
金人不從使
者往多拘囚
後數南侵不

○紹興八年、上、建康より臨安に還る。秦檜復た相たり。趙鼎罷めらる。詔して講和を議せしむ。建炎より以來、歳として、使を遣して、直に尊號を去り、其正朔を奉じ、藩臣に比せんを願はざること無し。金人従はず。使者往けば多く拘囚せらる。後、數々南侵して利あらず。江南の圖る可からざるを知り、然る後、檜を遣して間を爲さしむ。豫の廢せらるゝに至りて、和議乃ち決す。金使張通古來る。編修官胡銓上疏す、以爲らく、陛下一たび膝を屈せば、則ち祖宗廟社の張盡く夷狄に汚され、祖宗の赤子盡く左衽と爲り、朝廷の宰執皆陪臣と爲ら

てじぶ。

● 並みの大將より抜け出て、身を起す ● 母の喪を以て官を去る ● 同等 ● 叛かんとする兆あると

利。知江南不
可圖。然後遣
檜爲開。至豫
廢和議乃決。
金使張通古
來。編修官胡
銓上疏。以爲
陛下。一風膝。
則祖宗廟社
之靈。盡汚夷
狄。祖宗之赤
子。盡爲左衽。
朝廷宰執。皆
爲陪臣。異時
豺狼無厭。安
知不加我。以
無禮一如劉
豫。夫三尺童
子。無知。指大
豕而便拜。則
佛然怒。堂堂
天朝。相率而
拜大豕。曾無
童稚之羞。邪。
奉使王倫誘

ん。異時、豺狼厭くこと無く、安んぞ我に加ふるに無禮を以てすること劉豫の如くならざるを知らん。夫れ、三尺の童子は無知なり、大豕を指して拜せしめば、則ち佛然として怒らん。堂堂たる天朝、相率るて大豕を拜せば、曾て童稚の羞無らんや。奉使王倫、北使を誘致し、江南を招諭するを以て名と爲し、我を臣妾にせんと欲す。執政孫近、秦檜に附會す。臣、義として檜等と共に天を戴かず。乞ふ、倫・檜・近三人の頭を斬りて之を藁街に竿し、然して後其使を羈し、無禮を責め問罪の師を興さば、三軍の士、戦はずして氣自ら倍せん。然らずんば、臣、東海を蹈みて死する有らんのみ。寧んぞ能く小朝廷に處りて、活くることを求めんやと。書、上る。連りに貶竄せらる。

● 反間の計を爲さしむ ● 衣服を左まへにすること、夷狄の風なり ● 宰相執政 ● 劉豫は廢に臣事し、南面して王と稱せしも、後父子共に縛せられて捕虜となる ● 宋也 ● 蠻夷の居留地

致北使。以招諭江南爲名。欲臣妾我。執政孫近附會秦檜。臣義不與檜等共戴天。乞斬檜。檜近三人頭。竿之藁街。然後羈其使。責無禮。興問罪之師。三軍之士。不戰而氣自信。不然。臣有下。東海一而死耳。寧能處小朝廷。求活邪。書上。連貶寬。

紹興九年。金人先以陝西河南地歸宋。朝廷遣官。謁除汴京留守。青澗城李世輔來歸。世輔之先。果世爲蕃族。都巡檢使。父子雖嘗仕齊。每相泣恨。不得歸宋。齊用世輔。知同州。嘗得聞生擒撤離曷。

○紹興九年、金人先づ陝西河南の地を以て宋に歸す。朝廷、官を遣して、陵寢に謁し、地界を交し、汴京の留守を除す。○青澗城の李世輔來り歸る。世輔の先は累世蕃族都巡檢使爲り。父子嘗て齊に仕ふと雖も、毎に相泣きて宋に歸るを得ざるを恨む。齊、世輔を用ひて同州に知とす。嘗て聞を得て撤離曷を生擒し、朝に歸らんと欲せしが、金兵來り追ひしかば之を縱ちて西夏に奔り、其父母及び二子一孫皆戮せられぬ。是に至りて兵を夏に乞ひて以て復せんとす。既に出づれば、則ち陝西已に宋に還りしを知り、乃ち夏兵を部して來る。上慰勞して賜賚を加へ、名を顯忠と賜ふ。○金國、反を謀る者有り、事宗盤等に連り、皆坐して誅せらる。左副元帥捷辣は、實は楊割の長子にして、金主亶の大父行也。粘罕の死せしより、宗戚大臣皆懼る。捷辣、悟室と、尋ぎて亦た叛を謀れるを以て先後に誅せらる。金、宋と

欲歸朝。金兵來追。縱之而奔。西夏。其父母及二子一孫。皆被戮。至是乞兵於夏。以復。既出則知陝西已還。

和せしは、實に捷辣之主とせり。捷辣既に死す。是に於て右副元帥兀朮、左相たり。乃ち密に其主に奏するに、宋、未だ歲貢、正朔、誓表、冊命を議せざるに、而も捷辣、擅に地を割くことを許し、を以てす。遂に盟を渝ふ。

- 先帝の墳陵廢廟 ● 境界を配分す ● 銓任す ● 仇を復せんとなす ● 賙物 ● 祖父の發行 ● 年

宋。乃部夏兵而來。上慰勞加賜賚。賜名顯忠。金國有謀反者。事連宗盤等。皆坐誅。左副元帥捷辣。實楊割長子。金主亶之大父行也。自粘罕死。宗戚大臣皆懼。捷辣與悟室。尋亦以謀叛。先後誅。金與實捷辣主之。捷辣既死。於是右副元帥兀朮爲左相。乃密奏於其主。以下宋未議歲貢。正朔誓表冊命。而捷辣擅許割地。遂渝盟。

紹興十年。金兵分四道。南侵。劉錡大破兀朮於順昌府。檜急啓上。召錡還。岳飛

○紹興十年、金兵四道に分れて南侵す。劉錡大に兀朮を順昌府に破る。檜急に上に啓して錡を召し還さしむ。岳飛之を郾城に敗り、幾んど兀朮を擒にせんとす。飛、朱仙鎮に至る。檜急に上に啓して、飛を召し還さしむ。韓世忠、金人を淮陽の洧口に敗る。兀朮、汴に還り、兩河の軍と蕃部とを檢して以て再舉

を謀る。

敗之於郾城。機擒兀朮。飛至朱仙鎮。檜急啓上召飛還。韓世忠敗金人於淮陽之洧口。兀朮還汴。檜兩河軍與蕃部以謀再舉。

十一年兀朮陷廬州。侵和州。劉錡楊沂中敗之於蘄。檜又啓上。亟班師。沂中自瓜州渡。返行在張俊自宣化歸建康。劉錡自采石歸太平州。罷宣撫司。以其兵歸。韓世忠出師時。臨時取旨。以韓世

〇十一年、兀朮、廬州を陥れ、和州を侵す。劉錡、楊沂中、之を蒙臯に敗る。檜又上に啓して、亟に師を班さしむ。沂中、瓜州渡より行在に返る。張俊、宣化より建康に歸る。劉錡、采石より太平州に歸る。宣撫使を罷め、其兵を以て御前に隸す。師を出す時に遇へば、時に臨みて旨を取る。韓世忠、張俊を以て、樞密使と爲し、岳飛、副使たり。飛、世忠、尋ぎて罷めらる。兀朮、書を以て檜に抵して曰く、爾朝夕、和を以て請ふ。而るに岳飛、方に河北の圖を爲す。必ず飛を殺さば乃ち可ならんと。張俊、又飛の罪を構成す。逮して獄に赴かしむ。檜、奏して、飛及び張憲、岳雲を誅して、和議遂に諧ふ。韋太后及び徽宗の梓宮を宋に歸す。金人、惟に盡く許す所の陝西河南の地を悔ゆるのみならず、仍ほ唐、鄧等の

忠。張俊爲樞密使。岳飛副使。飛世忠尋罷。兀朮以書抵檜曰。爾朝夕以和請。而岳飛方爲河

州を割きて金に入れしめ、淮の中流を盡して界と爲し、西のかた商秦の半を割き、和尚・方山原を棄てしむ。時に宣撫使吳玠、卒して四年なり。胡世將之に代り、力めて和尚・原等の地を以て棄つ可からずと爲す。兀朮必ず之を欲す。遂に大散關を以て界と爲す。

● 天子の親兵とす ● 上意を伺ひて舉行せんとす ● 金に屬する河北の地をはからんとす ● 無實の罪を構へ成す ● 逮捕して ● 天子のひつぎの稱 ● 悔いて取り戻したるのみならず ● 無實の罪を

北圖。必殺飛。乃可。張俊又構。成飛罪。逮赴獄。檜奏。誅飛及張憲。岳雲。和議遂諧。歸韋太后及徽宗梓宮於宋。金人不惟盡悔。所許陝西河南地。仍割唐鄧等州入金。盡淮中流爲界。西割商秦之半。棄和尚方山原。時宣撫使吳玠卒。四年矣。胡世將代之。力以和尙原等地爲不可棄。兀朮必欲之。遂以二大散關爲界。

于時金國屢有內叛。宗戚大臣相繼誅夷。且北有蒙兀。自號大蒙。

時に、金國屢々内叛有り、宗戚大臣相繼ぎて誅夷せらる。且つ北に蒙兀有り。自ら大蒙と號し、帝と稱し、元を改む。連歲兵を用ひしも卒に討つと能はずして之と和し、南侵すれども又逞しくするを得ず。而して宋の猛將精兵、方に日に

稱帝改元。連
識用兵。卒不
能討。而與之
和。南侵又不
得逞。而宋之
猛將。精兵。方
日盛。恢復實
不難。沮於秦
檜。有志之士
扼腕歎息。兀
兀且死。曰。南
朝軍勢強甚。宜
益加和好。俟中
數年。南軍衰老。
然後圖之。張浚。
趙鼎。鼎卒於海外。

盛に、恢復すること實に難からず。秦檜に沮まれ、有志の士扼腕して歎息す。兀兀の且に死せんとするや、曰く、南朝の軍勢強きこと甚し。宜しく益々和好を加へて十數年を俟つべし。南軍衰へ老いて、然る後之を圖れと。張浚・趙鼎、皆遠竄せらる。鼎、海外に卒す。當時、異議の人、貶竄せられて殆んど盡き、復た敢て兵を言ふ者無し。

● 腕をさすりて ● 秦檜に反對する人

紹興十九年。
金主亶。爲其
下所弑。共立
丞相岐王亮。
旻之孫也。
紹興二十年。

○紹興十九年、金主亶、其下の爲に弑せらる。共に丞相岐王亮を立つ。旻の孫也。○紹興二十年、金主亮、上京の一隅に僻在するを以て、燕京に城き、徙りて之に居り、燕京析津府を改めて、太興府と爲し、中都と號し、中京會寧府を以て北京

金主亮。以三上
京僻在一隅。
城二燕京。徙居
之。改二燕京析
津府爲二大興
府。號二中都。以二
中京會寧府一
爲二北京。汴京開封府爲二南京。而舊遼陽府爲二東京。大同府爲二西京。如故。分二蕃漢地二爲二十四路。置二總管府。

と爲し、汴京開封府を南京と爲す。而して、舊の遼陽府を東京と爲し、大同府を西京となすこと、故の如し。蕃漢の地を分ちて十四路と爲し、總管府を置けり。

● 片隅の方にかたより在る

二十五年。秦
檜卒。檜乘政
十八年。臨終
猶起二大獄。欲
殺二異己者張
浚李光胡寅
等五十三人。
幸檜病已不
能書。得免。沈該。万俟卨。湯思退。陳康伯。朱倬。相繼爲相。

○二十五年、秦檜卒す。檜政を乗ること十八年、終に臨みて猶ほ大獄を起し、己に異なる者張浚・李光・胡寅等五十三人を殺さんと欲す。幸に檜病みて已に書すること能はずして、免るゝを得たり。沈該・万俟卨・湯思退・陳康伯・朱倬、相繼ぎて相と爲る。

● 己れの意見に反對せる者

三十一年。欽宗因問至。以去年冬。一狙於五國城。年六十。金主亮修汴京。蓋經營南侵。幾年矣。嘗因使來。密藏畫工。圖繪臨安山水。城市宮室。以歸。題詩其上。有下立馬吳山第一峰之句。是秋。徙居汴。遂淪盟。舉兵。其母諫。殺之。以威衆。兵號百萬。陷淮。浙。西。諸郡。江淮。浙。西。

○三十一年、欽宗の凶問至る。去年冬を以て五國城に狙す。年六十○金主亮汴京を修す。蓋し南侵を経營すること幾年なり。嘗て使の來るに因りて、密に畫工を藏し、臨安の山水、城市、宮室を圖繪して以て歸らしめ、詩を其上に題す。馬を吳山の第一峰に立つの句有り。是秋、徙りて汴に居る。遂に盟を渝へて兵を擧ぐ。其母諫む。之を殺して以て衆を威す。兵百萬と號す。淮西の諸郡を陷る。江淮浙西制置使劉錡、王權を遣して敵を迎ふ。權、逗留す。已にして退き、還りて采石に奔る。報至り、中外大に震ふ。海に浮びて狄を避けんの議有り。陳康伯可かず。葉義問に命じて師を視しむ。中書舍人虞允文、軍事に參謀す。金人揚州を陷れ、瓜州に趨く。劉錡、將を遣して之を阜角林に敗る。詔有り、錡をして軍を還し、専ら江上を防がしむ。金主、采石より渡らんと欲す。朝廷李顯忠を以て權に代ふ。而して未だ至らざるに、金人の舟來る。虞允文、亟に水軍を督し、海峽船もて迎へ撃ちて死闘す。金人、濟ること能はず。時に、亮、

制置使劉錡遣王權迎敵。權逗留。已而退。還奔采石。報至。中外大震。有浮海避狄之議。陳康伯不可。命葉義問視師。中書舍人虞允文。參謀軍事。金人陷揚州。趙瓜州。劉錡遣將敗之於阜角林。有詔令錡還軍。專防江上。金主欲由采石渡。朝廷以李顯忠代權。而未至。金人舟來。虞允文亟督水軍。海峽船迎擊。死闘。金人不能濟。時亮聞有內變。又聞舟師由海道來者。已爲李寶所焚。而荆鄂諸軍方自上

内變有りと聞き、又、舟師の海道より來る者は、已に李寶の爲に焚かれ、而も荆鄂の諸軍方に上流よりして下ると聞き、忿ること甚し。乃ち揚州に回り、諸將を召して約す。三日にして必ず濟らん、期を過ぎれば、盡く殺さんと。諸將遂に亮を弒す。亮の引きて南するに方り、渤海の一軍叛き去る。已にして葛王衰を遼陽に擁立す。亮の死を聞き、遂に譙京に入り、賈を追諡して閔宗と爲し、亮を廢して海陵王と爲し、諡して煬と曰ふ。衰は晟の孫也。後、名を雍と改む。是より先數年、張浚嘗て言ふ、金必ず盟を渝へんと。時の相湯思退等大に駭き、以て狂と爲す。是に至り、浚起ちて建康に判たり。上、臨安より建康に如く。浚迎へ調す。衛士其復び用ひらるを見、手を以て額に加ふ。

● 歐陽修の名 ● 望み見て喜ぶ也

● 歐陽修の名 ● 望み見て喜ぶ也

沈而下。忿甚。乃回揚州。召諸將一約。三日必濟。過期盡殺。諸將遂弒亮。方亮之引而南也。泚海一軍叛去。已擁立葛王。襄子遠陽。閉亮死。遂入譙京。追諡宣爲閔宗。廢亮爲海陵王。諡曰煬。煬之孫也。後改名雍。先是數年。張浚嘗言。金必渝盟。時相湯思退等大駭。以爲狂。至是浚起判建康。上自臨安一如建康。浚迎謁。衛士見其復用。以手加額。

三十二年。上還臨安。金使來。遣使報之。復尋和議。夏六月。上內禪。退居德壽宮。在位三十六年。改元者二。曰建炎。紹興。

○三十二年。上臨安に還る。金使來る。使を遣して之に報せしめ、復た和議を尋ぐ。夏六月、上、内禪し、退きて德壽宮に居る。在位三十六年、改元する者二、曰く建炎・紹興、皇太子立つ。是を孝宗皇帝と爲す。

孝宗皇帝

孝宗皇帝。初名伯琮。宗室。追封秀王。諡

孝宗皇帝、初めの名は伯琮、宗室追封は秀王、諡は安僖、子偁の子、太祖七世の孫也。母は張氏といふ、夢に崔府君一羊を擁し來りて曰く、此を以て識と爲せと。高宗、康王たりしとき、出で使して磁州に至る。磁人、崔府君出で迎ふと夢む。張氏、是歲丁未を以て、伯琮を秀州に生む。嘉禾の瑞有り。小名は羊。高宗太

安僖。子偁之子。太祖七世孫也。母張氏。夢崔府君擁一羊來曰。以此爲識。高宗爲康王。出使至磁州。磁人夢崔府君出迎。張氏以是歲丁未。生伯琮於秀州。有嘉禾之瑞。小名羊。高宗喪太子。命選太祖之後。得伯琮。鞠宮中。賜名瑗。適與屋府君名同。封晉安郡王。秦檜疾其英明。而不能害也。竟立爲皇子。賜名璋。封楚王。紹興末。賜名昚。立爲皇太子。尊詔即位。尊奉上帝。爲光堯壽聖皇帝。皇后吳氏爲壽聖太皇太后。

子勇を喪ふ。命じて太祖の後を選ばしめ、伯琮を得て宮中に鞠ふ。名を瑗と賜ふ。適、崔府君の名と同じ。晉安郡王に封ぜらる。秦檜、其英明を疾み、而も害すること能はざりき。竟に立ちて皇子と爲り、名を璋と賜ひ、楚王に封ぜらる。紹興の末、名を昚と賜ふ。立て、皇太子と爲し、尋ぎて詔して位に即かしむ。上皇帝を尊奉して、光堯壽聖皇帝と爲し、皇后吳氏を壽聖太皇太后と爲す。

● 後漢の崔瑗を祀れる神 ● めてたき稻穂の瑞光 ● 慎の古字

○史浩を以て右相と爲す。張浚樞密使たり。師を江淮に督す。遂に北伐す。浩、其議に與らず、力め巧ひて罷めらる。李顯忠、濠州より出で、靈壁に趨きて、金兵

遂北伐。浩不與其議。力丐罷李顯忠。出濠州。趙靈壁。敗金兵。邵宏淵出泗州。圍虹縣。降金將進克。宿州。金副元帥紇石烈志寧率兵至。顯忠與戰。連日未決。謀報。金人大興河南兵。將至會。宏淵與顯忠不相能。而顯忠又不協。士憤怨。遂潰而歸。金人亦解去。上銳意恢復。是役不利。乃復議和。陳康伯罷。湯思退。張浚爲左右相。浚仍以都督視師。數月而罷。未幾卒。浚許國之心。自首不諱。終身不主和議。遺命付其二子。以不能復中原。雪國恥。不得附葬先人之墓。

を敗る。邵宏淵、泗州より出で、虹縣を圍みて金の將を降し、進みて宿州に克つ。金の副元帥、紇石烈志寧、兵を率ゐて至る。顯忠、與に戰ふこと連日、未だ決せず。課、報すらく、金人大に河南の兵を興して、將に至り會せんとすと。宏淵、顯忠と相能からず。而して顯忠又士を犒はず。士憤り怨み、遂に潰えて歸る。金人亦た解きて去る。上、恢復に銳意せしが、是役利あらず。乃ち復た和を議す。陳康伯罷められ。湯思退、張浚、左右の相と爲る。浚、仍ほ都督を以て師を視る。數月にして罷められ。未だ幾くならずして卒す。浚、國に許すの心、自首まで渝らず。終身和議を主とせず。遺命して、其二子に付するに、中原を復し國恥を雪ぐ能はずんば先人の墓に附葬するを得ざれといふを以てす。

● 仲愷し ● 身を國に捧ぐる心 ● 白髮の老年 ● 先人の墓に合せはらむる

湯思退密有召虜議和之迹。言者論罷。竄之。道死。康伯復相。和議成。先是。國書大宋去大字。皇帝去皇字。書用君臣之禮。有再拜等語。金使至。則起立問金主起居。降坐受書。奉使者自同陪臣。館伴之屬。皆拜其來使。至是。始稱上爲宋皇帝。止爲叔姪之國。易歲貢。

○湯思退、密に虜を召し、和を議するの迹有り。言者論ず。罷めて之を竄す。道にて死す。康伯復た相たり。和議成る。是より先、國書、大宋は大の字を去り、皇帝は皇の字を去り、書は君臣の禮を用ひて再拜等の語有り。金の使至れば、則ち起立して金主の起居を問ひ、坐を降りて書を受く。奉使者は、自ら陪臣と同じ。館伴の屬、皆其來使を拜す。是に至り、始めて上を稱して宋皇帝と爲し、止だ叔姪の國と爲し、歳貢を易へて歳幣と爲し、歳幣十萬の數を減じ、地界は紹興の時の如くす。而れども、餘の禮は往往竟に盡く改むること能はず。上、身を終るまで之を憤る。其後、屢々河南、陵寢の地を還し、受書の禮を改めんことを請ひしが、金人卒に従はずりき。蓋し、上、復讐に志有りとも雖も、而も能く其志を輔くる者無し。陳康伯の卒せしより後、共适・葉頤・魏杞・蔣芾・陳浚・虞允文・梁克家・曾懷・葉衡・史浩・趙雄・王淮・周必大・留正、相繼ぎて相と爲る。惟だ俊卿と允文と竝に相たりし時、北方を經營するの議有りしが、而も

爲二歲幣。歲幣減二十萬之數。地界如紹興之時。而餘禮往往竟不能盡改。上終身憤之。其後屢請還河南陵寢地。改中受書禮。金人卒不從。蓋上雖有志復讐。而無能補其志。者。自陳康伯卒後。共适。葉頤。魏杞。蔣芾。陳浚。鄭允文。梁克家。曾懷。葉衡。史浩。趙鼎。王淮。周必大。留正。相繼爲相。惟俊卿。允文。竝相時。有經營北方之議。而浚卿持重。卒與允文不合。允文所爲。人亦厭其虛誕。竟不效。如浩。尤不主用兵。

● 旅館に於ける金使の接待係 ● その空論なるをいふ

必大從容廟堂。善類多所引進。朱熹以淳熙十五年被召。必大作相時也。初程頤卒於徽宗之世。其徒楊時在欽宗光

○ 必大、廟堂に從容として、善類引き進むる所多し。朱熹、淳熙十五年を以て召さる。必大、相と作りし時也。初め程頤、徽宗の世に卒す。其徒楊時、欽宗、光堯の時に在りて、皆擢んでらる。趙鼎、頤を識るに及ばずと雖も、而も其學を主張す。之を惡む者、楊時を以て還魂と爲し、鼎を尊魂と爲し、胡安國を強魂と爲す。其後又尹焞有り、召されて經筵に入る。焞は蓋し頤の晩年の高弟也。士大夫、程氏の學を名づけて道學と曰ふ。時好の尙ぶ所、或は此名を冒して以て進み、

趙鼎雖不及識頤。而主張其學。惡之者以楊時爲還魂。鼎爲尊魂。胡安國爲強魂。其後又有尹焞。見召入。經筵。焞蓋頤晩年高弟也。士大夫名程氏之學曰道學。時好所尙。或冒此名以進。時好不同。亦多以此名見於世。延平李侗受學於楊時之門。人羅從彦。而

時好の同じからざる、亦た多く此名を以て世に擠さる。延平の李侗、學を楊時の門人羅從彦に受く。而して熹又學を侗に受く。胡銓、嘗て熹を光堯に薦む。熹至らず。乾道以來、屢々召さるれども起たず。特旨もて、秩を奉祠に改め、召して館に入らしむ。就かず。後、南康の守と爲る。浙東荒る。熹を提舉に除し、往きて之を救はしむ。闕を過ぎ、嘗て一たび入りて事を奏す。是に至りて、召對して兵部郎に除せらる。侍郎林栗と合はず。即ち奉祠となりて去る。數月復た召さる。熹、辭し、惟封事を進めて天下の大本と今日の急務とを言ふ。大本は、陛下の心に有り。急務は、則ち太子を補翼し、大臣を選任し、綱維を振擧し、風俗を變化し、民力を愛養し、軍政を修明する、六の者は是れ也と。

趙鼎雖不及識頤。而主張其學。惡之者以楊時爲還魂。鼎爲尊魂。胡安國爲強魂。其後又有尹焞。見召入。經筵。焞蓋頤晩年高弟也。士大夫名程氏之學曰道學。時好所尙。或冒此名以進。時好不同。亦多以此名見於世。延平李侗受學於楊時之門。人羅從彦。而

● 善良なる人物 ● 國の魂の還り來れる者の意 ● その魂を養ふのみとの意 ● 國の綱維を護り其魂を氣強くさす意 ● 秩職を詞を奉ずる役に改む、宋代詞職の制ありて老賢人を降退せる也

熹又受學於胡。胡銓嘗薦熹於光堯。熹不至。乾道以來。屢召不起。特旨改秩奉祠。召入館。不。就。後。爲。南。康。守。浙。東。荒。除。熹。提。舉。往。教。之。過。闕。嘗。一。入。奏。事。至。是。召。對。除。兵。部。郎。與。二。侍。耶。林。與。不。合。即。奉。祠。去。數。月。復。召。熹。辭。惟。進。封。事。言。天。下。之。大。本。與。今。日。之。急。務。大。本。在。二。陛。下。之。心。急。務。則。補。製。太。子。選。任。大。臣。振。舉。綱。維。變。化。風。俗。愛。養。民。力。修。明。軍。政。六。者。是。也。

熹之同志。有廣漢張栻者。魏忠獻公浚之子。其學得之胡宏。宏安國子也。栻之言曰。有所爲而爲者利也。無所爲而爲者義也。學者誦爲二名言。稱栻爲二南軒先生。有呂祖謙者。公著之五

熹の同志に、廣漢の張栻といふ者有り。魏の忠獻公浚の子にして、其學之を胡宏に得たり。宏は安國の子也。栻の言に曰く、爲にする所有りて爲す者は利也、爲にする所無くして爲す者は義也と。學者誦して名言と爲す。栻を稱して南軒先生と爲す。呂祖謙といふ者有り。公著の五世、希哲の四世の孫也。亦た程氏の學を祖とす。學者稱して東萊先生と爲す。皆是より先數年にして卒す。惟熹は、學問、老いて彌々篤く、學者共に之を師宗とし、稱して晦菴先生と爲す。四方其人を仰ぐこと泰山北斗の如し。南使北に至れば、金人必ず朱先生安くにか在ると問ふ。同時に、臨川の陸九淵、世に象山先生と號する者有り。熹と太極圖説を爭論し、且謂ふ、學に吾人有りと。熹が訓解に従事するを譏り、意見頗る異を

世。希哲之四

立つと云ふ。

程氏之學。學者稱爲二東萊先生。皆先是數年卒矣。惟南使至北。金人必問二朱先生安在。同時有臨川陸九淵。世號二象山先生。與熹爭論太極圖説。且謂學有二悟入。譏熹從二事訓解。意見頗立異云。

○上、久しく子に與ふるの意有り。會々光堯皇帝壽八十二にして崩す。乃ち詔して内禪す。上、德壽に奉すること二十六年、孝養備に至る。既に升遐して、哀み慕ふこと尤も切なり。日に几筵に奉することを得ざるを以て、退きて喪制を終へんと欲し、移りて重華宮に居る。在位二十八年、金の世宗雍、是歳を以て殂す。其嗣允恭、先ちて卒す。孫璣立つ。雍、賢明仁恕なり。號して北方の小堯舜と爲す。故に金の大定三十年に宋の隆興、乾道、淳熙と相終始し、南北皆休息を得、彼此乗ず可きの釁無し。上の志を齎しながら、大に爲す有る克はざ

上久有與子之意。會光堯皇帝壽八十而崩。乃詔內禪。上奉德壽二十六年。孝養備至。既升遐。哀慕尤切。以不得日奉几筵。欲退終喪制。移居

○上、久しく子に與ふるの意有り。會々光堯皇帝壽八十二にして崩す。乃ち詔して内禪す。上、德壽に奉すること二十六年、孝養備に至る。既に升遐して、哀み慕ふこと尤も切なり。日に几筵に奉することを得ざるを以て、退きて喪制を終へんと欲し、移りて重華宮に居る。在位二十八年、金の世宗雍、是歳を以て殂す。其嗣允恭、先ちて卒す。孫璣立つ。雍、賢明仁恕なり。號して北方の小堯舜と爲す。故に金の大定三十年に宋の隆興、乾道、淳熙と相終始し、南北皆休息を得、彼此乗ず可きの釁無し。上の志を齎しながら、大に爲す有る克はざ

重華宮。在位二十八年。金世宗。其嗣允恭先卒。孫環立。雍賢明仁恕。號爲北方小堯舜。故金之大定三十年。與宋之隆興。乾道。淳熙。相終始。南北皆得休息。彼此無可乘之釁。上之奮志。不克大有爲者。以此。太子立。是爲光宗皇帝。

りし者、此を以てなり。太子立つ。是を光宗皇帝と爲す。

●先帝に也、光宗が建寧宮に在りしより斯く稱す ●崩御 ●帝位に待する意也 ●喪期三年の定制を移ふる爲に ●時代を同じくす ●ナキ

光宗皇帝

光宗皇帝。名惇。年四十四。自東宮受禪。尊太上皇帝。爲至尊壽皇聖帝。周必大罷。留正。葛邲爲左右相。改

光宗皇帝、名は惇。年四十四、東宮より禪を受く。太上皇帝を尊びて至尊壽皇聖帝と爲す。周必大罷められ、留正、葛邲、左右の相と爲る。改元して紹熙と曰ふ。皇后李氏は、大將李道の女也。悍にして妬。亟かに太子嘉王を立て、儲嗣と爲さんと欲す。内宴に因りて壽皇に請ふ。許さず。后、不遜なり。壽皇、怒語有り。后、之を銜む。乃ち謚罔を造り、壽皇廢立の意有りと謂ふ。上、驚

元曰紹熙。皇后李氏大將李道女也。悍而妬。欲亟立太子嘉王。爲儲嗣。因内宴。請於壽皇。不許。后不遜。壽皇有怒語。后銜之。乃造謚罔。謂壽皇有廢立意。致上驚恐。得疑疾。及開後宮。有暴死者。上震懼。疾愈甚。不復過重華宮。近兩載。始一至。壽皇彌不憚。上亦不能視疾。壽皇居重華。踰五載。壽六十八。而崩。上不能執喪。一日忽仆於地。中外危懼。太皇太后立嘉王。是爲寧宗皇帝。

き恐れて疑疾を得るを致す。後宮に暴死者有るを聞くに及びて、上、震ひ懼れ、疾愈々甚し。復た重華宮に過らず、兩載に近くして、始めて一たび至る。壽皇彌々憚はず。上、亦た疾を視ること能はず。壽皇、重華に居りて五載を踰え、壽六十八にして崩す。上、喪を執ること能はず、一日忽ら地に仆る。中外危み懼る。太皇太后、嘉王を立つ。是を寧宗皇帝と爲す。

● 疾癒ふかし ● いっはり ● 物を疑ひおそる、病、一種の精神病 ● 頓死 ● 二年

寧宗皇帝

寧宗皇帝。名擴。初封嘉王。

寧宗皇帝、名は擴。初め嘉王に封ぜらる。孝宗崩す。光宗疾病なり。知樞密

孝宗崩。光宗疾。知樞密院事趙汝愚密建翼戴之議。知憲聖慈烈吳太皇太后以宗社爲憂。將白事而難其人。有知閣門事韓侂胄者。琦之曾孫。而太皇女弟之子也。乃因以入白。太皇垂簾引嘉王入卽位。代執孝宗之喪。中外危疑者。乃定。光宗居壽康宮。後六年而崩。壽五十四。

● 病重し ● たすけ願きて天子とす ● 宗廟社稷 ● いもうと

上之爲嘉王也。黃裳爲朝善。講說開導。光宗嘗宣諭曰。嘉王進學。皆卿之功。裳上之爲嘉王也。黃裳爲朝善。講說開導。光宗嘗宣諭曰。嘉王進學。皆卿之功。裳

曰。若欲進德修業。追蹤古先哲王。須尋天下第一人。乃可。問爲誰。以朱熹對。彭龜年繼爲宮僚。因講每及熹說。上傾心已久。熹在光宗時守漳州。後守潭州。爲湖南安撫。至上登極。首被召除待制兼侍講。熹未至。已聞近習用事。御筆指揮。皆有漸深憂之。留正罷。汝愚

院事趙汝愚密建翼戴之議。知憲聖慈烈吳太皇太后以宗社爲憂。將白事而難其人。有知閣門事韓侂胄者。琦之曾孫。而太皇女弟之子也。乃因以入白。太皇垂簾引嘉王入卽位。代執孝宗之喪。中外危疑者。乃定。光宗居壽康宮。後六年而崩。壽五十四。

上の嘉王たるや、黄裳、朝善と爲りて、講説開導す。光宗、嘗て宣べ諭して曰く、嘉王の學に進むは、皆卿の功なり。裳曰く、若し徳に進み業を修め、古先哲王に追蹤せんと欲せば、須らく天下第一の人を尋ねて、乃ち可なるべし。問ふ、誰とか爲すと。朱熹を以て對ふ。彭龜年、繼ぎて宮僚と爲り、講に因りて毎に熹の説に及ぶ。上、心を傾くること已に久し。熹、光宗の時に在りて漳州に守たり。後、潭州に守たり。湖南安撫と爲る。上の登極に至りて、首めに召されて待制兼侍講に除せらる。熹未だ至らず、已に近習事を用ひ、御筆指揮して皆漸有りと聞き、深く之を憂ふ。留正罷られ、汝愚、相と爲る。韓侂胄、自ら定策の功有るを負み、不次の賞を希ふ。汝愚、肯て驟に除せず。遂に怨む。汝愚の政を爲すや、方に務めて善類を引き進め、僥倖を裁抑す。小人滋々悦ばず、相與に共に之を排す。朱熹、既に至り、上疏して侂胄に忤ふ。朝に在る、甫めて四十六日にして罷めらる。言者以爲らく、熹、宮祠の命有りと。遠近相弔ふ、天下の大老之を去らば、誰か去るを欲せざらん。若し正人盡く去らば、何を以て國を爲めんと。汝愚、袖より内批を還して、且諫め且拜すれども、聽かず。

● 官名、教育掛 ● 東宮附の役人 ● 卽位 ● 天子の策立を定めたる功 ● 次第にか、はらざる特別の恩賞 ● 宮祠を奉ずるの命。八一三頁参照 ● 熹を罷むる御沙汰書

愚爲相。韓侂胄自負有定策功。希不次之賞。汝愚不肯驟除。遂怨。汝愚爲政。方務引進善類。裁抑僥倖。小人滋不悅。相與共排之。朱熹既至。上疏忤侂胄。在朝甫四十六日而罷。言者以爲熹有宮祠之命。遠近相用。天下大老去之。誰不欲去。若正人盡去。何以爲國。汝愚袖還內批。且諫且拜不聽。

侂胄欲併逐汝愚。而難其名。或教之曰。彼宗姓。誣以謀危社稷。則一網盡矣。侂胄然之。汝愚在相位數月。罷。連貶竄。服藥以死。侂胄用李沐。何澹。劉德秀。胡紘。沈繼相等爲鷹犬。搏擊善類無遺。彭龜

侂胄併せて汝愚を逐はんと欲し、其名を難かる。或ひと之に教へて曰く、彼は宗姓、誣ふるに社稷を危くせんを謀るを以てせば、則ち一網にして盡さんと。侂胄之を然りとす。汝愚、相位に在ると數月にして罷められ、連りに貶竄せらる。藥を服して以て死す。侂胄、李沐・何澹・劉德秀・胡紘・沈繼相等を用ひて鷹犬と爲し、善類を搏ち撃ちて遺すこと無し。彭龜年・劉光祖・章穎・葉適・徐誼・沈有開・吳獵・黃由・黃度・鄧駟・陳傅良・樓鑰・鄭湜・李祥・楊簡・呂祖儉・曾三聘・游仲鴻・項安世・孫元德・袁燮・陳武・汪適・范仲黼・黃灝・詹體仁等、貶し逐はるること勝けて紀すべからず。黨人の姓名を籍記し、目して僞學と曰ひ、朱熹を以て首と爲す。籍に在る者數十人。蔡元定、熹の累に坐して、道州に編管せらる。大學生楊宏

年。劉光祖。章穎。葉適。徐誼。沈有開。吳獵。黃由。黃度。鄧駟。陳傅良。樓鑰。鄭湜。李祥。楊簡。呂祖儉。曾三聘。游仲鴻。項安世。孫元德。袁燮。陳武。汪適。范仲黼。黃灝。詹體仁等。貶逐不可勝紀。籍記黨人姓名。目曰僞學。以朱熹爲首。在籍者數十人。蔡元定坐熹累。道州編管。大學生楊宏中等六人。亦坐上書救黨人。編管。留正以嘗引用黨人。亦黜竄。俞端禮。京鏗。謝深甫。相繼爲相。

中等六人、亦た上書して黨人を救ふに坐して編管せらる。留生、嘗て黨人を引用せるを以て、亦た黜竄せらる。俞端禮・京鏗・謝深甫、相繼ぎて相と爲る。

○朱熹、慶元庚申を以て卒す。時に僞學の黨禁嚴なりと雖も、會葬する者亦數千人あり。呂祖泰、上書して僞學を雪がんとを論ず。乞ふ、侂胄及び其黨蘇師旦・周筠を誅し、陳自強の徒を罷め逐ひ、周必大を召し用ひん。然らずんば、事將に測られざらんとすと。書出づ。中外大に駭く。杖すること一百、面を刺さずして、欽州に配す。必大亦た坐して謫降せらる。熹、没し、年を踰えて黨禁稍々解く。諸人或は官に復して自ら便せしむ。然れども、消沮變化の餘、風俗已に大に

朱熹以慶元庚申卒。時僞學黨禁雖嚴。會葬者亦數千人。呂祖泰上書論雪僞學。乞誅侂胄及其黨蘇師旦。且周筠。罷逐